

見えない小動物の恐るべき雲集等にとつては根本的な清浄器である。

種の均衡は一般に望ましいことである。どんなものにもその效用があるものだ。吾々は、此記録の著者の希望、適当な昆虫を特に認めて、殊にそれらがより小さな昆虫を退治するのを許さうとする希望には、嬉んで一致するものである。田舎の人はそれらを皆退治してゐる、例へば、トンボ等は一日に何萬といふ蟲を殺す立派な殺害者であるが、之を殺すといふことは、彼自ら害蟲の爲に働くものであり、害蟲の助手となるものであり、自分の財産を蕩盡する害蟲の保存者となり、増殖者となるものである、といふことを知らないのである。あの恐ろしい斑猫蟲は、餘り高く飛ぶことは出来ないが、その十文字になつた短刀、むしろ彼に願の役目をなしてゐる二本の新月刀を以て、敏捷な前代未聞の昆虫劫掠をなし遂げてゐる。彼を助けよ、彼を尊敬せよ。その翅翅が美しいからと云つて、是を欲しがる子供の聲に耳を借してはならない、子供を喜ばせる爲に、此優れた昆虫の獵人、農業上有益な貴君の助手をピンに止めようなどとはし給ふな。

甲蟲類は、様々な武器を備へた戦士である。彼はその重々しい鎧の下に、燃え上がる様な活動力を持つてゐる。これこそ誠に田園の番兵だ。彼は夜となく晝となく、何の歡樂もなければ何の休息も持たずに、諸君の畑を守つてゐる。彼等は自分では畑から何んな僅かなものだつて決して取らうとはしない。彼等は唯一向に盜賊の掠奪を實行する。そしてその報償としては、盜賊そのもの、體より外に何も望みはしない。

他の或者は地下で働いてゐる。あの無邪氣な蚯蚓だ、彼は土地を掘り返して、粘土質な何うにも發散力を持たない土壤を立派な耕地に仕あける。又或者は、土龍と一緒になつて、穴の中に、農作上の恐ろしい敵、三ヶ年間絶えず農作物の下根を斷つてゐる處のあの恐ろしく貪食な、破壊的な黄金蟲の幼蟲を追撃する。

食蟲昆虫は彼等が同盟主である人間から當然その保護を受く可き権利を持つてゐる。けれども、食草昆虫の中にだつて、有害な植物を立派に滅亡させるものがある。何等益のない、棘だらけの、あらゆる意味に於て不快なあの毒麻いらくまは、四足類から敬遠されてゐて、誰

も之に觸れようとしなない。處が五十種にも及ぶ昆虫が、吾々に一致して、此厄介物を除く爲に働いてゐる。

或る非常に立派な階級の昆虫、或者は立派な服装をこらしめて、又或者は優れた智識を持つてゐるものに埋葬蟲がある。吾々の爲に、あらゆる地上の死物を取片附ける役目をして呉れてゐる。自然は、自然に取つて非常に有用な彼等をば、誠に寵兒として待遇してゐる。彼等に美しい服装を與へ、その仕事を勤勉に、巧妙に果たさしめてゐる。注意すべきことは、恚うした嫌な職業を持つてゐるにも拘らず、彼等は相互に親しみ悪いといふ所が少しもなく、必要に応じて頗るよく結束する。彼等は自分達の力を合せ、活動に聯絡を取り、相協力して活動することを知つてゐる。要するに、是等名譽ある死體運搬夫達は、昆虫民族中での貴族社會民である。

自然は明らかに吾々とは考へを異にしてゐる。自然は、最も有用なものに力を盡す、その職分が、何であらうとも構ふことではない。例へば、糞蛆である、彼は糞を取片附け

る、此奉仕の酬として、サファイアの衣を著せられてゐる。埃及の有名な蛆は、墓の聖蝶として、エメラルドの後光を許されて現はれる。

是等の清潔屋さんのやる凡ての仕事を誰か口にするだらうか？ よし口にはしても、彼等に對して正しい態度を取るものは殆んどない。私にこんなことがあつた、四月のこと、冬中果樹園に置いたダリアを庭に移さうとした時、みると、濕氣と、水はけの悪い固い粘土質の土壤の爲に、球根が腐れて了つてゐた。其處へ多くの蟲が出て、胸のむつとする様な此腐敗の中心を淨化する爲に、一生懸命働いてゐた。處が、それが此植木屋さんを途方もなく憤怒させて了つた、彼等が消滅せしめようとしてゐる此不しだらを、彼等の所爲でもあるかの様にして、彼等を責めんばかりになつて了つた。

濕つた庭園の敵、蝸牛はドリリュース（鞘翅類の一種）といふ昆虫に追撃される。彼は蝸牛を待伏して、最も巧みに彼に附いて行く爲に、その上に昇り、一緒に運んで貰ふ、そして最も好都合な時を捕へる。蝸牛が引き籠ると、彼もその中へ這入りこんで生活する、

彼を食つて行くのだ。一匹の蝸牛は彼を十五日支へてゐる。是が盡きると、彼は又他のより大きな奴の處へ移る、次ぎに第三番目には更に大きな奴の處へ行く。彼にはそれが三四必要である。第三番目は、彼が蛹に變らうとする時で、ドリリュースは其處を綺麗にして、氣樂に眠る爲に此彼を養つて呉れた敵の丈夫な家を占領する。

何よりも先づ必要なことは、農夫に農業上の益蟲と害蟲との區別を明瞭させることであらう。様々な技術、殊に化學的な技術を用ひれば利用の出来る昆虫を明瞭と説明してやることであらう。そうした技術は恐らく意外の利益を此豊かな、激しい生命を持つた動物の中に發見することであらう。私は此方面での非常に獨創力ある或る學徒の講演を此處に轉載したいと思ふ。食糧としての昆虫に關する獨創的な、教へられる所の多いものである。

〔或る惜しむ可き偏見と滑稽なお上品ぶりから、我が西部地方は最も豊富な、最も美味しい食糧の源を等閑にしてゐます。あの腐れか、つた獲物を食ふ人々が、腸も取らない鳥を食ふ人々が、それどころか牡蠣といふ蛋白質の軟體動物を食ふ人々が、どんな謂はれ

があつて、昆虫を食ふことを排斥するのでせうか？ ブウルゴオニユ（佛蘭西東部地方）では、立派な考から、つまらない毛嫌を捨て、葡萄園に住んでゐる優良な軟體動物を——と云ふのは他でもない蝸牛なんです、あの蝸牛を利用してゐるのです。是をバタで調理し香草を添へて出すので、肺の爲に非常にいいが、又口當りもいいし、胃の爲にも非常によいものです。

〔ラランド（Talende, 1732—1807, 佛蘭西の有名な美文學者）といふ有名な學者は在來の偏見を捨て、更に一步進んで、あの青蟲を食べました。青蟲が巴目杏の味を持ち、蜘蛛が榛の實の味を持つてゐるといふことを知つたのは、實に彼のお蔭であります。氏は蜘蛛を最もよく食べて、最も美味しいものであるといつてゐます。〕私も全くそれを信ずる。あらゆる意味に於て、蜘蛛は優れた動物である。

〔多くの昆虫は非常に美味しくもあり、又滋養分にも富んでゐます。だからこそ、あらゆる食料中、活々しさとか美しさとか若々しさとか云ふものを失はない爲に、昔から貴婦

人達は之を取つて参りました。古代羅馬帝國の貴婦人達はコシユウス（鱗翅類の一種）を食べて豊艶な容姿を取とめてゐました。ある逸樂的な東方諸國の皇妃達は、丸々とした容姿を持たなければ愛を得ることが出来ない處から、ブラッブス（暗所に住む甲蟲の一種）を取り寄せて、庭園の中で噴水の音に耳を傾けながら、此滋養に富んだ蟲から永遠のジュウヴランスを汲んでゐたものです（Tunycnos,ギリシヤ神話の泉、此處に湯浴するものは若返るといふ）。

（葡萄牙人は、蟻がその戀愛期に達して、羽根が生え、空に舞上るといふ時に、是をボンボン代りに食べてゐます。）

（然しながら、昆虫は一般には、その本當の價値は別として人間の處へやつて來ては、その耕作物を荒してゐました。昆虫は、人間の食糧を奪つてゐたのです。處が人間が昆虫を食料として、捕へる様になりました。あの恐ろしい蠶の繁殖は、東方諸國を屢々荒廢滅亡せしめました。それ等東方人は是を捕へて、食盡したものです。回々教のオートル王

（le calife Omar, 第二世哈利發）は食卓に著いてゐるとき、一匹の蠶が落ちて來るのを見ました。そしてその翅の上を見ると、（吾々は九十九個の卵を産む。で若し我々が百回産卵するならば、世界は荒廢して了ふだらう。）と書いてあつたと云ひます。

（幸にも蟲は亞細亞の賜食^{マシナ}であります。カルメル山（シリアの山）の洞窟の中にある豫言者達は、果して何か他のものを食つて、生きてゐられたでせうか？ 回々教の豫言者達も同じ此食物を取つてゐたのです。或日オマールに慙う言つたものがありました、（蠶は如何ですか？——籠一杯ほしいものだ。）その後、蠶がなくなつて了つた。で一人の従僕が非常な苦心をして、彼の爲に一匹の蠶を見附けて來ました。すると、感謝の念に心も有頂點になつた彼は、（神は廣大だ！）と叫んだと云ひます。

（今日でも猶、東方諸國では至る處で蠶を愛してゐます。そしてデザート菓子として、珈琲の時に食べられてゐます。船舶に積み込まれたり、樽に詰め込んで取引されたりしてゐます。）

〔吾々は憊うして此處に昆虫といふものを全く別の意味で、滋養に富んだ、最も豊富な食料として持つてゐるのであります。吾々を阻止するものに誰が？ 何の懸念が要りませう、吾々は昆虫に對して、憊んな有益な復讐をなし得るではありませんか？〕

此點に議論が來た時、演説者は、ノルマンディの理解ある農夫達が一杯に溢れてゐる聴衆席に、或深い感動の起つてゐるのを見て取つた。英國議會ならばさしずめ、ヒアー！ヒアー！といふ喚聲の響き渡る所である。

彼は豫め憊うした時の起るのを知つてゐた。といふのは、彼はその卓子の上に農業上最も恐る可き昆虫を數種類載せて置いた。そして、彼はそれを取ると自分の口に入れて、必ずその効果を滴らさないではゐない様な力強い次の言葉と共に莊重にそれを吞下した、〔彼等は我々を食ふのです……我々も彼等を憊うして食はうではないか！〕

第十二章 色と光との幻覺

若し昆虫が吾々人類に話しかけてゐないとするならば、そして話しかけることを欲しないとするならば、それは、彼の内に籠つてゐる燃える様なあの烈しい生命を、彼は説明してゐないのだ、と云ふ可きであらうか？

如何なる生物と雖も、彼等同志が、即ち昆虫が昆虫へ示す程、明白に自己表現をやつてゐるものはない。彼等の内にゐるのだ、これが、外部に向つては何等の言葉を發せず、自分に向つてのみ自分を語つてゐる一個の閉塞された世界なのである。

普通の用を足す時には、一個の電信機が彼等の感鬚の中に備へられてある。けれども偉大な、雄辯な言葉は、彼等の晩年に及んで表はれる、ほんの短い一時の爲に、誠にそれはその死と愛の大歡樂との切迫を告ぐるものである。

彼等は語るのだ、その時に纏つてゐる著しい裝飾に依つて、その翅、即ち飛翔と輕快な

生活とに依つて、彼等の心にかもされる所の、自分は鳥となるのだといふ好奇心とに依つて、彼等は語るのだ。彼等はその色彩と怪奇な意匠との光彩陸離たる象形文字に依つて語る、その異常な化粧を盡した不思議な嬌態に依つて語る。彼等は光を以てさへ語る、或種のものは明るい松明を灯してその胸に燃えてゐる戀を顯はす。

彼等は王者の如く華やかに此最後の日を消費する。そして之を巧妙に終らせて了ふ爲には、明日は彼等は死んで行くだらう。さらば、輝かしい生命を爆發せしめよ！ 黄金とエメラルドと、サファイアとルビーとを煌めかせよ！ そして生命そのものを溢れしめよ、その白熱せる熱情を、生存の奔流を、撒き散らされた光の奔湍を、一個の共通な迅速な流れの中に押し流して了ふがい。

大自然が母の様な慈愛を以て昆蟲の婚姻を榮あらしめ、その婚禮を飾つた處の數限りもない豊富な装身具は、我々の博物館は狭くて、とても之を陳列することが出来ない。曾て私は或有名な蒐集家の豊富な蒐集品を、此の種彼の種と引續きさま呆れ果てる程見せられ

た時、私は或る無盡の力、大自然が此處に撒き散らした狂熱的な發明とでも言ひたかつた處のものに打たれて、茫然としてなす處を知らなかつた。私は壓倒された、私は眼を閉ぢた、そして助けを求めた。何となれば、私の脳髓は凝結し、眩惑し、遲鈍になつて了つたからである。だが、自然は、彼女はさうはしてゐなかつた。彼女は私を襲つて來るのだつた、壓し附けて來るのだ、魅力のあるもの、珍奇なもの、讚嘆すべき怪しきもの、火の様な翅を持ち、エメラルドの鎧を纏ひ、千姿萬態の絞を織りなせる錦を附け、燦然たる、だがそれ丈威嚇する様な、奇怪な道具を備へたもの、その或者は黄金を著せた輝かしい鋼鐵で造られ、又或者は黒天鷲絨で織られた絹の總を垂れ、彼が、豊艶な桃花心木色の地に、細い鹿子色の絹の刺毛を持つかと思へば、これは金繡を施せる柘榴色の天鷲絨で造られ、猶天鷲絨の斑點を浮織した前代未聞の輝かしい空色のもの、その他艶消し天鷲絨の織り込まれた金属の様な光を放つ縞物等——を以て私を壓倒して來るのであつた。

其處には慙う言つてゐるらしいものがあつた、(我々は全自然である、我々丈で。若し

自然が消滅して丁ふならば、我々が自然がやる劇を演ずるだらう。我々はあらゆる存在を装ふだらう。何となれば、若し諸君が毛皮をお望みなら、我々はそら、ロシアの皇后でさへ決して用ひたことのない様な毛皮の襟巻をしてゐるぢやないか。又若し諸君が羽毛をお望みとならば、そら此處にゐる我々が蜂雀そのけの羽毛を着けてゐるではないか。又若し諸君が木の葉をお望みとあらば、我々はまぎれもない木の葉ではないか。樹であらうが何であらうが、我々が偽造してゐないものは全然ない。何卒ぞ、此小枝を取つてみて下さい、そら……これが一匹の昆蟲なんですよ。)

その時私は全く呆然として了つた。私は謙讓な心を以て此恐るべき民族に會釋した。私は頭を火の様にして此壯麗な巢窟を出た。處が何時までも此煌めかしい數々の假面は踊つたり狂つたりして私に追ひすがつて来て、私の網膜の上に其放從な舞踏會を續けてゐた。然も私が其處でそれらを見たのは箱の中、額縁の中だつたのだ、そして又その死骸だつたのだ。自然の中にあつては、彼等は銳氣瀟灑として、蝟集してゐるのである。果して然

らば、彼等が、生命を持つて活動してゐる所を、殊に火の様な氣候の中にある所を見たら何うであらう？ 其處では、彼等は繁榮に繁榮を極めてゐる、其處では、凡てのものが、空氣が、水が、草木が、彼等に調和してゐる。さうした中で、熾烈な焔に包まれた彼等が、絶えずじり／＼と迫つてゐる死に、促進され、更新される所の生産を、その熱狂的な愛の爲に、烈しい熱情を持つた動物群と競争するのを見たら、何うであらう？

ブラジルやギアナの大森林は、生存物の大交換が不斷に企まれる恐る可き陰謀の天地である。植物界の奇怪な魔の地は又動物界の魔境である。野蠻な、鋭い、悲しげな歌とは聞えぬ叫聲は、その伴奏樂である。奇怪な鳥類の聲は、森林の中に、大草原の中に、囁がれた、けれども、あだかも時を計るが如くに、規則正しく、交る交る震え渡る。それらは此の無人境の時計である。晝の聲、夜の聲は又、朝、午、夕の三つの時に於けると同じく完全に違つてゐる。それらが我々人類の音聲に似るものとすれば、不安をみなぎらすものである。それらは、皮肉を含み、嘲笑を帯んでゐるかに見える。或者は叫び、或者は喉を鳴

らし、又或者は吐息を吐く。これは鐘を鳴らし、かれは槌を以て打ち、又他のものは風笛の音を響かす。萬物の沈黙はカリアマ鳥の大聲に反響し、又蛇を食ふ黒大鳥の聲は、沼の上に、強く、鋭く走つて、蠻人を戦慄せしめる。蠻人は死靈の通るのが聲えると信じてゐる。

夕方には、蟬の唄、蛙の聲、泉の叫び、吸血蝙蝠の慟哭等に、猿の叫びが和してゐる。所が、胸を突裂いて迸り出る様な鋭い吼哮が、それらを沈黙させ、恐怖をみなぎらす。鋭い爪を持った徘徊者、敏捷な豹の出現を示すものである。

そればかりではない。此處では何者も安全ではない。大變靜かな青い水は、其處から、時々何か忍ぶ様な吐息が聞えるが、若し、諸君が其處へ足を入れたなら、これが固い水であることを知つて恐怖することだらう。海曼（アマゾン河に有名な鰐魚）が水苔か水草の様な、その青つばい背を表面に並べてゐるのだ。生物は頭を持上げて、體を動かしながら、現はれてゐて貰いたいものだ。吾々は恐怖に戦きながら此の奇怪な全體のものが立あ

がるのを見る。此丈だらうか？……表面に君臨してゐる此の奇怪の物自體がその下に暴君を持つてゐるのである。ピランガといふ五月蠅い魚だ。彼は海曼が鈍重である丈、敏捷な奴で、海曼が身を交はず暇もない内に、その鋭い鋸齒で、海曼の尻尾を切つて、奪取つて了ふ。海曼は恚うして殆んど皆不具である、若し鎧が此敵のメスを防がないとすれば彼等は滅亡して了つたかも知れない。此の恐ろしい解剖家は、又そのメスを閃めかしながら、波上を掠める鳥類を、矢庭に、飛び着いては切つてゐる。吾々が捕へる水鳥の多くが、恚うして不具である。では、四足獸は何うか？ といふに、その最も力強いものがやられてゐる。恐ろしい鬪争が此の深淵の、活氣を帯びた水、生命に溢れた、だが又それ丈死に満たされてゐる水の中で、絶えず行はれる。そこでは、自己改造の爲に自分を啖ふ處の自然の急速な狂熱的な自殺が、文字通りに實現されてゐる。

昆蟲は狂氣と美との海をなしてゐる。虻や蚊に於ては血に對する渴望に依つて生命の昂奮が表はされるが、他のものに於ては、眼も覺める様な色彩とか、奇怪な意匠とか、珍奇

な恰好とかいふ人を驚嘆させる様な、又は恐怖せしめる様なもので、之が表はされる。穀象蟲は、青い地に金粉を撒散らした鎧を自慢にしてゐる。彼は此の地方の鑛山を歩いて、その途すがら是等の富を擱んで来たかの様である。もつと黄色がかつた青い玉蟲は、全身皆鏤められた寶石であつて、それが動いて歩くもの、様である。ギアナの道化役者（アルルカン）は雑色の服を着てゐる。である巨大な脚長蜘蛛は、高い草の無数の障碍の中を走る爲に、法外な感髭と極端な長い脚とを持つてゐる。その體の黄色い地には黒い句點や、譯の分らぬ象形文字が斑らに現はれて、二重に奇妙な、二重に謎の様なものである。それは奇體に、印度織物の模様を思ひ出させる。此の地方の常に一樣になるといふことのない色彩に合はせる爲に、此の技術家は、切れたり、波になつたりする線を造つて、色を和らけ、調和を計つてゐる。

社交を好む柔しい昆蟲の胡蝶は、その翅を以て河岸を蔽ひ、草原をうつとりする様な花の毛氈に變へる。殊に榮あるブラジルの胡蝶は色彩を様々に變へて反射するコバルト色の

翅を以て、燃える様な日盛りに、爛漫たる森の花に蔽はれた水の上を、ひらくと舞ひあそぶ。平和な、花やかな彼は、此の力に溢れた自然の無邪氣な王の様ではないか。此の王につくものが皆同じ美しさのものだ。然も後から後からと際限もなく續く。此の壯麗な種族が、そのコバルトを翻へしながら、水の流れを追ふてゐる。

見給へ、これが愛の言葉である。様々な色彩を持つた際限のない此の虹は他のものではない。これこそ愛の自由な翻譯である。だが、何？ 若し愛そのものが仲介なしに現はれたらつて？

既に我が國に於ても、叢の中にじつとしてゐる臆病な螢が、その小さなランプを提げて、夜中戀人を戀人へと導いてゐる筈ではないか。伊太利では、彼は動いてゐる、彼の戀の焰は翅を生やしてゐる。ピエモン地方に一步足を踏み入れるや、アッポイの温泉に到るまで、その到る處にゐる。私はそれを見て驚異の眼を見張つたことであるが、その自由奔放な光のダンスは、此處の大地が藏してゐる地熱に刺戟されてゐるかの様であつた。ブ

ラジルでは、木の葉さへ燐光の鈴なりである。婚禮のイルミネーションとして、昆蟲に何が缺けてゐるだらうか？ 此の不思議は熱帯地方には到る處に輝き渡つて、萬物を恍惚たらしめてゐる。既に知られてゐるものが二百種、自然は是に此の詩的な力を與へて、此の光の詩を以てその戀の焰を燃え上らしめ、彼等の大禮式を盛大ならしめてゐる。

メリアン嬢(Mlle. Merian, 1647—1717, 畫家及び博物學者)といふ熱帯地方に移住してゐた愉快な一獨逸婦人は、彼等の此の奇蹟に就いて抱いた恐怖を、床しげに語つてゐる。父にも祖父にも共に優れた勤勉な彫刻師を持ち、自身も又藝術家であり、非常に教養もあつた彼女は、羅典、和蘭、佛蘭西の各國語を以つて、シュリナム(Surinam, ギアナの河)の昆蟲に關する繪畫的な嘆稱すべき著作をなしてゐる。此の博學な婦人は、不幸と貞節との模範的な生活に、唯一つの奇癖しか持たなかつた(誰がこの奇癖を持たないだらうか?) それは自然の愛好だつたのだ。彼女はその蒐集に引かれて、獨逸を捨て、和蘭へ移つた。次ぎにそこが彼女を満足させなかつたので、彼女はギアナに移つた。そしてそこで長い歳

月を送つた。彼女は同じ額の中に(優れた方法ではないか)昆蟲も、昆蟲が住む植物も、昆蟲を食ふ爬蟲類も一緒にしてゐた。如何に深く彼女が考へてゐたことであらう。彼女は非常に多くのモデルを取つて來ては、それに自然の姿を取らしてゐた。然も彼女は之に恐怖を持つてゐたのであつた。或時、土人達が彼女に一籠の昆蟲を持つて來て置いて行つた時、彼女は仕事を濟まして眠に就いた。處が或る不思議な夢が彼女の清い眠りを亂した。彼女は立^{クニル}の恍惚たるメロデイを聞く様な氣がした。次にそのメロデイが燃え上がった。最早それは歌ではなく、火事だつた。部屋中が火の海になつて了つた……彼女が眼を醒まして見ると、凡てが本當だつた。その籠が立^{クニル}だつたのだ。その籠が火山だつたのだ。彼女は幸にもこの火山は燃えてはゐないといふことを逸速く見て取つた。その捕はれ者はフルゴール(半翅類の一種、翅長大にして美しき斑紋を現はせり。)であつた。彼等の歌は婚禮の歌であつた、彼等の焰は戀の焰であつた。

此の地方では人はよく夜旅をする。暑氣を避ける爲である。けれども、若し是等の光を

持った昆蟲が旅人を保證してくれなかつたならば、あの深い森林の暗闇の中を歩いて行くものはないだらう。旅人は、遠くに彼等が輝いて、踊り狂つてゐるのを見る。近くには又叢の陰に、自分の置かれたまゝの處に輝いてゐるのを見る。彼はそれらを取つて一緒に連れて行く。それらを自分の履物の上に着ける、路を照らす爲又蛇を逐ひ拂ふ爲にである。だが、天明よるけになつて何もかもすつかり分る様になると、彼はそれらを或叢の上に置いて、彼等とその戀の舞臺に返してやる。(火の蟲を持つて行け、だが又それを取つた所へ置け)といふのが、亞米利加印度人の柔しい俚諺である。

誰か此の燈火に感動しないものがあらうか？ それは、生命の動きに連れて動く。それは、吾々の呼吸のリズムに調和して燃えあがり、燃え鎮まるのである。それは心臓のリズムにまで一致してゐる。心臓は此の燈火と共に膨らまつたり、又は縮まつたりする。そして、情熱の悩みが矢張り、此の震える燈火を惱ましてゐる。

その底にあるものは何であらう？ 明らかに嬉ばさうとする、そして愛されようとする

慾望であり、努力である。千萬の方法に依つて此の光の言葉に移し出されたその慾望、その努力である。或者は比類なきコバルトに紅玉の頭を輝やかせて、その燦然たる光輝の中に眞紅の炭火をも掻消して了ふ。他の者は、もつと沈鬱に、暗紅色に浸つてゐる。もつと蒼白い、緑に近い様な黄色い焰のものに到つては、南方の烈しい戀の憔悴、困憊、辛慘を語るもの、様である。

亞米利加よりも峻烈な空の下にゐる情熱的なスペイン娘は、此の焰を持つた動物に手を出さず、是を自分のものとして捕へて了ふ。彼女はそれで一個の御守りを造る。自分の装身具とし、犠牲とする。燃えてゐる彼を、彼女は自分の燃えてゐる胸の上に附けて了ふ。彼は其處で死なねばならないのだ。

彼女等はそれを以て何等の役に立てるのではない。唯無謀なお洒落から、彼女等は、是等命を持つた焰を絹に結んだり、絹に包んだりして、それを燃ゆる頸飾として頸に巻き附け、又火の帯として腰の周りに廻す。彼女等は又その寶冠を戴いて女皇の如くに、舞踏會

にやつて来る、消えたり燃えたりする（それは彼等の愛でか？若惱でか？）生きた黄玉、有情の碧玉で造り上げたその地獄の寶冠を戴いてやつて来る。不吉な磁氣を持った輝かしい、そして悼ましい飾だ。死の感じから其處では魅力が一しほ人の心を攔む。彼女等は踊る——衰へたその焰は和らいだ様なその柔しい反射を、疲れた人々の深い黒い眼に映す。彼女等は踊る、限りもなく、考へもなく、憫みもなく。彼女等の胸の上に、黙つて（私を取つた所へ置け）と彼女等に言ふ聲も持たずに、死んで消えて行く此の愛の光を思ひ出しもしないで。

第十三章 蜘蛛の勤勞と休業

第三篇の社會的昆蟲に這入る前に、此處では單獨なものに就いて述べるとしやう。

昆蟲以上であり、又以下である蜘蛛は、その體組織から見れば、それと離れてゐるし、

その本能や慾求や營養といふ方から見れば、それに似寄つてゐる。

あらゆる意味に於て非常に特異な地位にゐる蜘蛛は、大衆の外にゐる、恰も、創造界中の除物の様である。

獲物が豊富にある様な熱帯地方の豊饒な國々では、彼も社會を造つて生活する。或る樹木の周圍に大きな共同の網を張つて、彼等は完全な一致協力の下に並木道を守るといふことである。それどころか、強大な昆蟲や、小鳥などが引懸る時には、此の危険に際して彼等は聯合する。そして互に助け合ふ。

けれども、恚ふした社會的生活は全く例外であつて、或る決つた種類と最も恵まれた風

土の處とに限られてゐる。それ以外では到る處、蜘蛛は、その生活と體組織との關係から、狩獵者としての性格を持つてゐる。或る不確定な獲物を食つて嫉妬深い、狐疑的な、排他的な、孤獨な生活をする所の野蠻な性格を持つてゐる。

猶その上、彼は、自分の進路とか努力とか活動とかいふもの、爲に分離する様な普通の狩人ではないといふことを、考へなければならぬ。彼の狩獵は敢て言ふならば、彼に取つて、非常に高價なものである。不斷に資金の投資を必要とするのである。毎日毎時間、彼は自分の本體から、此の彼に食物を與へ、その本體を造り直して呉れる所の網の必須物を引出さなければならぬ。それで、彼は自分を養ふ爲めに飢渴に襲はれる。自分を造り直す爲めに自分を涸らして了ふ。自分を肥らせるのだといふ不確な希望の上に身を細らせるのだ。彼の生活は一個の富籤である。豫見し難い無數の遇然といふ機會を待つてゐる富籤である。是が自分の同類を見ても、そこに競争を感じるばかりで、何等同情の念を抱かない様な、不安な動物を、換言すれば、運命的な自己主義的動物を、造らすにすまないのだ。

若し彼がさうでなかつたなら、彼は滅亡するの外はないであらう。

此の哀れな動物に取つて最も面白くないことは、彼が徹底的に醜いといふことである、彼は、肉眼で見れば、醜いが、顯微鏡で見れば、反對だといふ様な動物ではない。職業上の極端な専門化といふものは、人間の間にもそれを見ることが出来る通り、或器官を萎縮せしめ、或器官を極度に發育せしめ、調和を破るものである。鍛冶屋は屢々侷僂である。同じ様に、蜘蛛は太鼓腹である。自然は彼の職業、必要、その必要を充たす生産器官の爲に、彼の凡べてのものを犠牲にしてゐる。これは職工であり、網造りであり、紡績工であり、機職工である。彼の顔かたちなどを見ないで、その技術的生産品を見なくてはいけない。彼は單に紡績工であるばかりでなく、實に一個の製絲工場である。體の周りに八本の脚を、頭の上に八個の用心深い眼をぐるりと集中した彼は、巨大な腹部の偏心的な突起を以て人を驚嘆せしめる様な仕事をする。甚だ卑しけな恰好のもので、不注意な軽々しい觀察者には恐らく大食ひとしか見えぬであらう。あゝ！ 是が全く反對なのだ。此の腹は彼

の工場である、彼の倉である。網造りが、自分の前に置いて、糸に繰る處の材料を入れて置く囊である。けれども、彼は此の囊の中へ自分そのものより外には何者も詰め込まないのだから、彼は、自己そのものの消費によつてのみ節食の力に依つてのみ大きくなつてゐるのである。で諸君は、他の凡ての部分が痩せこけてゐるにも拘はらず、彼の此寶庫ばかりは何時膨らがつてゐるのを見るだらう。其處には仕事の上に缺くべからざる必需品があるのだ、彼の産業の希望があるのだ。未來への唯一の運が藏してあるのだ。本當に産業家の典型だ。(若し自分が今日食を取らないとしても、と彼は言つてゐる。明日になれば恐らく食を取ることが出来よう。處が、若し私の製絲場が休業してしまへば、何もかもお終ひだ。私の胃は休業しなければならぬ。永久に斷食しなければならぬ。)

私と蜘蛛との始めての關係は、決して氣持の悪いものではなかつた。貧窮を極めた私の少年時代に、私が、當時、落ぶれて、打捨になつてゐた父の印刷工場で、唯一人で働いてゐた時、その仕事場は臨時に或穴倉の様な處にあつたが、そこは可成明るくて、私達の住

んでゐた大通からみれば地下室だつたが、又バス通りの方から見れば通りと同じ高さだつた。午になると、格子の篋つた大きな換氣窓から、ほんの少しばかりの日光が、私が字を拾つてゐる活字盤の上へ斜にばつと射し込んで來た。すると、壁の角の方に、用心深い蜘蛛の姿が明瞭と見えるのだ。彼は、此の光線が來れば何か輕々な羽蟲でも御馳走になれるだらうと考へて、私の活字盤の方へと近寄つて來る。此の光が、彼のゐる隅の方へは射さないで、私の近くに射すので、彼に取つては、私の方へ近寄る極く自然な誘惑だつたのである。誰にだつて蜘蛛などは嫌なものだが、然も私は、彼がその臆病な、ゆつくりした、賢い實驗を次第に押し進めながら、自分がその生命を任さなければならぬ人間の性格を確めて行くのを嘆稱したのであつた。彼は確かにその八個の眼の全部を以て私を觀察した。そして怎ういふ問題を置いたに違ひない、(之は敵かな、味方かな?)

彼の顔色を分析した譯でも、彼の目をよく見た譯でもないが、私は自分が凝視されてゐるのを觀察されてゐるのを感じた。そして明らかにその觀察は、次第に、私に取つて好都

合なものとなつた。恐らく仕事の本能（彼等にはそれが非常に強い）に依つて、彼は、私が平和を愛する労働者に違ひない、そして、矢張り彼の様に其處で自分の織物を織つてゐるのだ、と感じたのでもあらう。まあそれは何うでも構はない、彼は、迂廻や用心を捨てて活潑な果斷に移つた、まるで大膽な、少し冒險的な歩みぶりを取るもの、様であつた。だが、それでもしとやかに、彼は自分の糸にぶら下がつた。そして、吾々二人の國境たる箱の縁へ、丁度此の時、蒼白い太陽のブロンド色の光線に色取られた活字盤の縁へ、ちやんと下り立つた。

私は二個の感情の間にあつた。告白するが、私はこんな親しい交際というものを味はつたことがなかつた。こんな友達の憐れした態度を私はまだ殆んど受けたことがなかつたのだ。一方、此の用心深い觀察家は、確かにさうむやみに人を信用しないものであるのに、其處へ来て、私に憐れ言つてゐるのだ、（あ、！ 何故私はたとへ幾らでも此のお前の光を取らなかつたのだらう？……たとへどんなに違はうと、私達は矢張り此の貧しい仕事と冷厳

な暗さとから出て、此の優しい光の饗宴で一緒にならうじやないか……心を一つにして、兄弟にならうぢやないか、お前が私に許して呉れた此の光明を、お前は私からも受取つて呉れ、そしてそれを持つてゐて呉れ……是から半世紀の間には、それがきつとお前の冬を照らすだらう。）

此の黒い小さな仙女が彼女一流の言語で而も低い聲で、それはそれは非常に低い聲で、憐れ言つた時、私はその印象をぼんやりと受取つた。處がそれは私の内で眠つて了つた。それから、一八四〇年にそれは一寸目を覺まして、そのまゝ、今日、一八五七年五月十五日まで眠つて了つたのだ。今日こそ、私は始めて、彼を説明し、彼を叙述したのである。

さて、その一八四〇年に私は家族のものを一人なくしたのだが、その休暇を、私は巴里で暮した。そして、唯獨り、終日、ボス街の我が家の小さな庭を歩き廻つてゐた。家のものは田舎にゐるのだ。私は、何の氣なしに、多くの蜘蛛が木々の周圍に造つてゐる美しい同心圓の星を眺めた。彼等はそれを賞讃すべき勤勉さを以て修復したり、造り直したりし

てゐた。そして、私の僅かばかりの果實や葡萄の實を守る爲に非常な苦勞をしてゐた。そればかりではない、それは私自身をも、執念深い蠅や蚊の攻撃から救つて呉れてゐるのだ。彼等は、私の少年時代に、私と言葉を交はしたあの黒い内蜘蛛のことを、私に想起させた。彼等はそれとは非常に違つてゐた。空氣と光との子であつて、常に眼に見える所にさらされてゐる。直ぐにでも捕へることの出来る様な、木の葉の下より外に隠家もない。で彼等は昔の私の知己の様に、用心とか掛引とかは持つてゐないのであつた。彼等の凡ての作業は明白だ、彼等の如何に小さな機密も吹きさらしだ、彼等の體は意の儘である。彼等には、慈悲か、或は彼等がなす積極的な奉仕、立派に盡される利益より外には、何等の保護もないのだつた。

木々の枝に網を張るものも、窓に張るものと同じく、明らかに或注意を以て、よく風を受ける處や、蟲の飛んで来る様な氣流にうまく合ふ處や、又は羽蟲がうかれ出る様な明るい光の射す處に、此を張る。その網は垂直にはをろされぬ、それは唯一つの流れしか受け

ないからである。蜘蛛は、熟練した水夫として、網をうまく斜にして、二つ又はそれ以上の流れを受ける様にするのである。

その腹部の先端にある四個の絲生殖器又は乳頭は、望遠鏡のレンズの様に出入自在なもので、是が、動いて、それはくゝ小さな雲を吐く、それが少しづつ、伸びて出る。此の雲は實に細い絲の集りで、一個の乳頭から千本も出るのだ。そして四個の乳頭はこの四千もの絲を一緒に集めて、可成丈夫な一本の絲とする、それが網となるものである。

猶よく注意すべきは、此の聰明な工場主の絲は、その性質が皆同じではなくて、各々その運命に依つて、違つた性質、違つた力を持つてゐるといふことである。經絲となるものには乾いたものがあるかと思へば、一方くつつく爲には粘るものがある。又子供達を入れる巢となるものは木綿であつて、卵の這入る卵袋を保護するものは、卵を安全にする爲に必要な抵抗力を備へたものである。

蜘蛛が網を造るに充分な絲を備へると、彼は高所の一點から身をすべらしながら、絲枠

を繰る。彼はそこに吊下がつてみて、それからその細い綱に依つて又出発點まで昇つて、他の點へ移る。恚うして、同じ中心點から出發する一連の幅を移し續けて行くのである。經が揃ふと、彼は緯に取り掛つて、糸を交又させる。幅から幅へと身を移しながら、彼はその絲生器官を以て、其處へまあるく糸を着けて行く。全體は目の詰んだものではないが、同じ圓の凡ての目がいつも同じ大いさを保つてゐる様な、幾何學的な比例をなした立派な網である。

此の網は、彼から出たのだ、生きて、動いてゐる、正に一個の道具以上のものである。これが彼自身の一部である。蜘蛛は彼自身圓形をなしてゐるが、その彼は、此の圓輪の中に自分を擴けたかの様に思はれる。そして彼の神経の線を、彼が揃へた是等の幅の糸へ伸ばしてゐるかの様にも思はれる。彼が攻撃に對しても防禦に對しても、最も大きな力を持つてゐるのは、此の網の中心に於てである。其處以外では、彼は臆病だ、恐らく一匹の蠅にでも逃げ出すだらう。此の網は彼に取つては、最も軽い感觸をも感ずる處の電信機であ

つて、目にも見えない、殆んど何等の重味のない様な獲物の來たことをも彼に知らせる。と同時に、これには幾分の粘着力があつて、その獲物を捕へもするし、又危険な敵を防禦して、彼を救つてさへ呉れるのである。

風の日には、いつも網が揺れてゐるので、網に引懸るものを勘定することが出来ない。その時は、彼はその中心に我ん張つてゐる。普通の時は、彼は極く近くの葉の陰にかくれる。獲物を威かさないうちに、又は自分自身が數多い敵の餌食とならない様に。

彼の性格は、勇敢といふよりも、むしろ用心深い、忍耐強いといふことである。

彼は大膽な心を持つには、餘りに經驗があり過ぎるのだ、餘りに災難に會ひ過ぎてゐる、失敗を重ね過ぎてゐる、運命の峻嚴さを餘りによく知り過ぎてゐるのである。彼は一匹の蟻をさへ恐れる。蟻は、屢々意地の悪い、腰の落着かない、粗暴なうろつきだ、彼は、何者をも恐れるといふことを知らないで、時々、行つてみた處で何にもならない此綱を態々探險する。すると蜘蛛は彼に場所を譲つてやる、彼は、此硝酸の様に燃える蟻酸の

くつつくのを心配してゐるに違ひない、又は、善良な職工として、慥うも考へるに違ひない、彼を相手にして永い、困難な闘争をしたら、此網を新しく造り代へるよりも長い時間がかゝるだらう、と。其處で、彼は自負心などの感情は毛頭現はさないで、彼が其處を横行闊歩するまゝに任せて、自分は少し離れた所へ行つて、蹲んでゐる。

萬物は餌食に生きる。自然は自分自身を食つて行くのだ。然しながら、餌食は必ずしも尊敬する様な忍耐強い勤務に依つてのみ獲得されてゐるのではない。然も數多い生物の中に彼のみが運命に奔弄されてゐるのである。全く善良な労働者として、自然は彼を二重に束縛してゐる、一つはその仕事だ、も一つは、その體だ。數限りもない昆蟲、殺戮者の甲蟲、上品で優美な暗殺者のトンボ等、凡て彼等は自分の體と武器とより外には何も持たない、そして、その殺害生活を愉快氣に送つてゐる。又他のものは、自己防禦の容易な、安全な隠家を持つてゐて、危険に就いて心を悩ますことがない。屋外の蜘蛛はその何れの利益をも持つてゐない。彼は、一定の産業を営む地位にゐるが、此の地位は、その何等保證

のない僅かな身代の爲に、他の貪慾を招き、侮辱を挑發せずにはゐない。下では蜥蜴が、上では栗鼠が、此の弱い獵師を目掛けて獵をやる。不精な蟻奴はあの粘りこい舌を投げかけて、彼をくつつけて動けなくする。燕は、圓滑に飛びかひながら、何等自分の姿勢を亂すこともなく、蜘蛛を掠奪するのが彼の楽しみである。又凡ての鳥共は、彼を立派な御馳走か、又は優れた藥だと思つてゐる。大聲樂家の如く、衛生を守るものは、鶯に至るまで、時々清淨劑の處方に一匹の蜘蛛を書入れないものはない。

若し彼の此職業の具が壞されるとするならば、むしろ彼は自分自身が呑まれたがい、それと全く同じことである。網が目茶目茶に破られてみ給へ、少し永引いてゐた彼の絶食は、もう彼に絲を供給する能力を與へない、そして間もなく彼は飢に死んで了ふのだ。彼は此不完全な圓の中に、いつだつて切迫した状態である、絲を紡ぐ爲には、食はなければならぬ。食ふ爲には、絲を紡がねばならぬ。此絲こそ彼に取つては、バルク (Parque) 生命の絲を紡ぐといふ神話の女神の絲である、運命の絲である。

吾々は嘗て蜘蛛の巣を續けさまに三度取上げるといふ實驗をした。六時間に渡つて、三回、彼は嘆稱すべき忍耐力を以て、何等絶望する處なく、網を造り直した。慘酷な實驗だ、吾々は正に自ら責む可きである。是に依つて吾々が見たものは何か、他ではない、慙うした災厄の爲に休業の止むなきに立至つた餘りに不幸な彼等であつた、遂に自分の業務を再度開始し得ることも出来ない程、力も根も盡き果てた彼等の不幸な姿であつた。彼等は生きながらの骸骨として、徒らに他の仕事に手を出して失敗するのだつた、そしてそれまで彼等の生活を營んで来た、あの永い手足を凝つと悲しげに見結めるのであつた。

蜘蛛のあの餓鬼の様な貪婪さを語る時、吾々はともすれば忘れてゐるが、彼は二重に食はなければ、死滅して了ふ、即ち、その體を造る爲に食はなければならず、その絲を造る爲にも食はなければならぬといふことだ。

彼の勢力を消費するものが三つある。不斷の仕事に必要な熱、彼の最後まで活動を續ける力強い感受性と二重の呼吸方法。といふのは、彼は單に、氣孔に依つて空氣を受け入れ

るあの昆蟲の受動的呼吸法を持つてゐるばかりでなくて、高等動物の肺に類似した積極的な呼吸法を持つてゐるからである。彼は空氣を取り込んで、それを變化し、分析して、絶えず自分を新しくしてゐる。何よりも、その活動を見るに如くはないが、是は正に昆蟲以上のもと思はれる。生命の潮が敏速な循環をしてゐるに違ひない、その心臓は蠅や蝶とは全然別個な鼓動をやつてゐるに違ひない。

高等なのだ、が危険である。昆蟲は毒氣に向つても、強烈な臭氣に向つても何等の害をも蒙らずに、是に挑んで行く。蜘蛛は是に抵抗することは出来ない。彼は直ちに當てられて、痙攣して了う、むつとして氣絶する。私は或日それをルユセルヌで見た。飛生蟲はクロロホルムに合つても、十五日間、死に切れずに動き續けてゐた。それが蜘蛛は先づ始めの一回で昏倒して了つた。彼はその時勢力の絶頂にあつた。彼は現に一匹の羽蟲を食つてゐたのだ。私はそれに唯一滴のクロロホルムを注ぎかけた。その効果は恐ろしいものであつた。人間の窒息に於ても、是程ぞつと來るものは恐らくあるまい。彼は仰向けに倒

れ、又立上つたが、直ぐ又ぶつ倒れた。何等彼の體を支へようとするものがなかつた。彼の手足は脱臼したかに見えた。最も感動すべき一事は、慙うした最後の瞬間に於て、その生命力がその腹部に現はれたといふことである。この苦悶の中にあつて、その乳頭は網にする小さな綿雲を吹き續けてゐたのだ、恰も、息絶えながらも彼は猶働かんとしてゐるものであることを信じさせずに置かないかの様に。

私は之を見て悲しんだ。そして、若し新鮮な空氣が彼を甦らせはしないだらうかといふ希望を抱いて、それを窓の上に置いた。けれども是は最早彼そのものではなかつた、何うしてさうなつたかは分らないが、彼はまるで融けて了つてゐた、そして最早解剖體ではなくなつてゐた。悶絶した彼の肉體は、一個の軽い亡靈に過ぎなくなつてゐた。風がそれを湖の上に攫つて行つた。

第十四章 蜘蛛の家蜘蛛の戀

蜘蛛は凡ての單獨生活をする昆蟲を遙かに凌駕してゐる。彼は單に巢を持つてゐるのではない。單に待伏の場所、一時的な獵場を持つてゐるのではない。彼は（少くもその或る種屬に於ては）立派な家を持つてゐる、非常に複雑した眞の家である、玄關があり、寢室があり、後ろには出口があり、最後に、猶此上に巧妙に造られた扉、何と云はうか？ 自然に閉まる様に造られた、即ち戸そのもの、重量で落ちる様に出來た扉がある。

扉！これこそ蜜蜂や蟻の大都市にさへ見られない所のものではないか。工業の盛んな彼等の都市もこゝまで進んではゐない。

蟻は明らかに、今日の大部分のアフリカ人の様な状態にゐる。毎晩彼等は非常な努力をして、見張番を置かすにはゐられない様な、餘り丈夫でない格子戸を、いつも新しく造つては、その住居を閉めるのである。彼等勇敢な、そして立派な武器を持つた大市民達が、

他の侵略に對して大して恐れを抱かず、スバルタ人の様に壕も城壁も持たずにゐられるといふことは、眞實である。かくて彼等に得意な勇氣が彼等の工業を制限してゐる。

是に反して、唯獨りで生活する哀れな此労働者は、あの絲を吐出すこと、不斷の労働を續けること、の爲に常に疲れ切つてゐて、自分の勇氣に信頼してゐる譯に行かぬ。その上猶不都合のある様な或る地方、或る環境の下にあつては、彼は深い工夫を廻らさねばならなかつた、そして、遂に此用心深い工夫の凝つた小さな奇蹟を發見して、或は昆蟲を或は野蠻人を凌駕するに至つた。

ルウセルヌの近傍で私は始めて蜘蛛(袋蜘蛛)の家を見た。それは非常に美事に造られた鞘であつて、その廊下は中央で廻つてから、漏斗の様に外部に向つて開いてゐた。此外の部分が日にさらされた小さな隠家となつてゐるが、是がその陥穽である、狩獵場である。宿の御主人公は此漏斗の一番奥に控えてゐた。處が、此底の裏、此鞘の最下部の端の處に白い頑丈な齒があつて、その中に小さな極く安全な奥の間がしつらへられてあつた。

彼は此室を非常に信頼してゐた。私達が、此建物全體を叢に結びつけてゐる絲を切離してゐる間、彼が其から出ようとしなかつたのを見ても、彼が如何に此處を信じてゐるか分る。私達は此住居を、壊したり、傷つけたりしないで、唯その位置丈を動かして置いた。處が翌日行つて見ると、それはもう修繕されて、周囲の叢に結び付けられてゐた。その配置は最早前の様にいゝものではなかつた。けれども疑もなく此職工さんは、此時期遅れな時に(アルプスの麓の九月である)夏の大かゝりな仕事を又も繰返す様な資力が自分ないことを知つてゐた。

ブラジルの森にゐる或る小さな蜘蛛は、網の真中に小屋を吊下けてゐる。そしてほんの一吋した危険が迫つても、彼は其處へ驅け込んで了う、處が彼が其處へ這入るや否や、その戸口は或る發條仕掛に依つて素早く閉ぢられて了う、といふことだ。

だが此種のもの、傑作は、殊に「ルシカ」の土蜘蛛に見られる。此土蜘蛛の住居は巧妙に築造された小さな坑孔であつて、その滑らかな平らな壁には、二重に壁布が張られてゐる。

る、地面の側には厚い粗い布が、そして此技術家が住んでゐる内側には薄い縞子の様な布が。坑孔の口は一個の扉で閉ぢられてゐる。此扉は下部よりも上部の廣くなつてゐる一個の圓盤で、びつたり塞がる様に出來た漏斗状の口に受けられてゐる。此圓盤は厚さ三分に過ぎないが、然もその中には六十枚の網が含まれてゐて、此網の間には、その同じ數丈の薄い土床又は土壁がある、そして全體としての扉が、六十枚の戸から出來上つてゐる。何といふ忍耐の結果であらう。が、その天才とも云ふ可きは、是等の網と土との戸は皆、一枚が他の一枚に嵌め込められてゐるといふことだ、網の戸はその一點が壁の中まで伸びて、扉を壁に結び付け、蝶番となつてゐる。扉は、蜘蛛が出ようとして是を押しあける時、外部に向つて開かれる。けれども敵が之を開けに此處へ來るかも知れない。それが前以て考へられてゐる。蝶番と反對の側に、扉には幾個かの穴がつけられてあつて、蜘蛛は其處へ引着いて、生きた門となつて了ふのである。

若し此驚く可き技術家が、特別な苦境に置かれて(ユウベールの實驗に依つて蜜蜂が蒙

つた様に)(第三篇参照)その方法を代へ、改革しなければならなくなつたなら、その時は何うであらうか? 彼はそれをやるだらうか? 彼も矢張術策を施す才能を持つてゐるだらうか? そして、必要に應じては、高等昆蟲が或場合にやつてのける様な一新機軸を編む才能があるだらうか? 之は是非やつてみる丈の價值のある問題だ。確實なことは庭にゐる普通の蜘蛛でさへ、若し諸君がそれらがあの幾何學的な正しい巢を張るに必要な空間を奪つて了ふならば、彼等は、その狭められた空間に比例して、小さくしながら、不規則な網を持つた巢を、立派に造りあけることを知つてゐるといふことである。

猶未だ、困難な實驗がある。蜘蛛は恐怖心の強い處から技藝家となつてゐるが、此恐怖心は又彼を疎まして、理性を失はしめて了う、彼はそれ程に神経質である。彼に勇氣を與へてゐるのはその網丈である。網を一步外へ出れば、どんなものにも彼は震えあがつて了う。捕へられて、網を持たないと、自分の餌食の前からも逃げ出すのが彼だ。彼は一匹の蠅に向つて行く勇氣をも持たない。

消極的な期待といふ哀れな彼の境遇、それが彼の性格の全部を説明する。動いたり、走ったり、闘争したりして、待つてゐるのは、それは暇をつぶし、餓をまぎらすことである。けれども其處にちつとしてゐるのだ、獲物を威すので動くことも出来ず、それが来るのを見てゐる、すると時々近くまでは来るが、通り過ぎて了う、そして遂に腹は空つばのまゝである！ 羽蟲の氣樂な、際限のないダンスに立合つてゐる、羽蟲は、日光の中で、面白をかしく、何時間でも飛びはねてゐるが、彼の喉から手が出る様な慾望の中へは飛び込んで来ない、彼は小さな聲で云ふ、（おいで、坊や！……お出で、い、子だよ！）之は苦痛だ、希望と屈辱との辛抱である。

彼は彼の踊りを續ける。そして、それを考へる。

（晩飯が食へるだらうか？）此因果な言葉が、またやつて来て、彼の腸を刺る。それから、又もつと不幸な言葉が来る、（若し今日絲代丈食はなけりや、明日は益々食ふ望みはなくなるのだ！）

恙う云ふ凡ての條件が凝つて、惱ましげな、不安げな、けれども極端に敏感な、注意深い一個の動物となつた。それは唯に最も輕微な觸感を感じるばかりでなくて、如何なる音響をも感ずる動物だ。此點に就いて、蜘蛛程敏感なものはない。可成輕微な震動にも、彼は氣を失ふかに見える。彼は卒倒するものらしい、恐怖に打たれた蜘蛛が、突然天井から落ちて来るのは、よく見る處である。

此敏感性は、彼が子を持つた時に殊に熾烈である。貧困な狩師である彼も、矢張無限の愛情を持ち、家族に對しては寛大な心を抱かずにはゐない。然かも、亦一方に於て、生餌を欲する鳥類、あの翅のまに／＼様々な策略を用ひて、早くから彼等の幼兒を捕へて了ふ獵師があつて、敵手たる彼等を見ると、彼等とその領土外に放逐せずには置かまいとする時、蜘蛛はその卵を卵袋の中に置くことに満足しないで、その或る種類に於ては、胎生として、生れながらがつがつする兒を養ひ、之をその背の上に連れて歩く。さもなければ、彼等に絲をつけて、自由に歩かせる。若し危険が迫ると、彼はその絲を引く、幼兒達

は親の上に飛びあがる、彼はかうして子供を救ふ。又若し彼が子供を救ふことが出来ない時には、彼はむしろ死を選ぶ。彼が子供等を捨てまいとして、自ら蟻地獄の淵に吞まれるのも構はなかつたといふ例がある。又或る足の緩い種類のもので、子供等を救ふことが出来なかつた時、逃げもしないで、子供等と一緒に自ら捕はれたといふ例もある。

小供等の巢には屢々非常な傑作品がある。私はスイスで非常に感心したものだが、それは長い管で、内部は立派に壁布が張られて、柔かく暖かにしてあつた。外部は、木の葉の小さな破片や、細かい木片や、灰色の土塊などをごち／＼やに合はせて、巧妙に覆ひ隠されてゐた。その管が、支へられてゐる壁の色に完全にまぎれて了うように造られてゐた。けれども、是なども、私が此處のフォンテエヌプロオで見付けた一個の藝術品に比較すれば、てんで物の數ではない。一八五七年七月二十二日、私は物置の中に一個の丸い可愛らしい籠を發見した、豎横共に約一吋位の大きさで、あらゆる材料が混つて出来たもので、何等の蔽ひもなかつた（雨の恐れがないので）。それは、幾本かの上品な絹絲でいと優

美に梁に吊下がつてゐた、此の絹絲を、私は小さな手とでも云ひたいのだ、丁度蔓草が持つてゐる様なものである、その中には、卵が置かれて、一匹の蜘蛛が絶えず孵化を續けてゐた。彼は決して身動きもしなかつた、恐らく夜の一寸の間食物を取りに出る丈に過ぎないでもあらう。そんなに恐る可き動物は決してゐなかつたのである。非常に靜かに近づいて行つても、彼は恐怖の爲に逃げ出した、落ちさへするのだつた。一度など、少し急激に近寄つて行つた所、彼は非常な恐怖を抱いて了つて、終日姿を見せなかつた程である。彼は一週間卵を抱いた。が、若し慙うした不安がなかつたなら、恐らく彼はもつと長く留つてゐたに違ひない。

讃稱すべき母、デリケートな、巧みな藝術家、殊に女性として、最高度にまで心を悩ます神経質な女性、さうした此不思議な感覺者が、吾々が蜘蛛に對して抱かせられた全然相反する二個の感情を、即ち、嫌忌と愛着とを、私に完全に説明して呉れた。人は彼から遠ざかり、又彼に近寄る。彼はそれ程嚴峻なのだ、が、又それと同時に、それ程極端に情が

深いのである。

彼は吾々人間の様な呼吸法をしてゐる。又あのデリケートな乳頭は、彼が此處から（顕微鏡でみると）乳の様な絹を分泌するもので、恐らく自然界に存する最も女性的な器官であらう。

あ、！ 母として彼女は孤獨なのだ。或る種類（土蜘蛛）に於ては父が幾分母に助力するが、それを別にしては、彼女は何等の助力を期待することは出来ない。雄は、戀愛期以後はむしろ敵である。何という慘酷な貧困の結果であらう！ 雄は其子供等が食物になり得るのだといふことを認める。處が母は、雄より大きい、で同じ考へを抱く、此子供食ひは食へるものであると考へる。そして時々自分の夫をがりがりやつて了う。

恚ういふ兇悪な事件は、私は斷言するが、氣樂な、豊かな生活が許されて、彼等の性質が害はれない様な風土に於ては、決して起るものではないと思ふ。けれども、我が國などに於いては、非常に數が多いのに、然も一匹の獲物も希であるが爲、烈しい競争状態にあ

つて、彼等の間には、恰もメヅサの筏の難破者の様に、恚うした不幸者がゐる（メヅサといふ帆走船艦が、一八一六年七月にアフリカ東方の暗礁に難破したとき、難破者は筏を組んで避難せるも、食料盡きて生存者は死者を食ひしといふ）。

腹といふ慘酷な暴君は凡ての自然性を支配する。それは戀までも抑制する。蜘蛛の様な疑り深い不安な動物に於ては、戀は非常に孤疑的である。情慾の頂點にありながら、力の弱い、瘦せた雄は、非常な抑制と威敬とを以てなければ、嚴やかな夫人の側へ寄り附けない。彼は進み出て、退き、觀察する。彼は、自分がかくも尊大なお方の同情を幾分でも戴いたか何うかを、自問自答してゐる様である。彼が用ゆる臆病な手段は、弱い磁氣である、殊に極端な辛抱である。彼は始めての相圖を殆んど信じない、すっかり分つて了はない内は身を捧けて行きはしない。遂に、讚美の對稱が寵を垂れて、風情あり氣にみせ、燃える様な真心を現はした時でさへ、彼は、突然、譯の解らない狼狽をみせて、そこを脱出し、足に任せて逃げて了う程にそれを信用しないのである。

かゝるものが天井に於ける黒い戀人の恐ろしい牧歌である。庭園の蜘蛛では、それ程の不信はない。自然が、彼等の心をば和らけてゐる。そして、烈しい産業熱そのものが田園生活に於てくつろいだものとなつてゐる。庭木の上に見られる處では、彼女等はその夫を可成よく待遇してゐる、そして、彼等が自分達の狩獵の競争者であるといふことを餘り考へてはゐない。彼女等は彼等を同じ場所へ住はせて置く、勿論幾分除け者にして、彼等を離しては置く。軽い仕切に依つて兩者は分たれてゐる。女王は彼を自分の下の一階に住はせて満足してゐる、さうすれば、彼女は、彼を従へて、配下にしながら、第一等の生活が出来、彼が自分は王様ではなく、配偶者であり、女王の夫であると信じてゐるようになる意味である。

蜘蛛は彼等の種族以外のものに何等かの交感を持つてゐるだらうか？ 持つてゐるといはれてゐる、そして私もそれを信ずる。彼等は吾々人間とは、謂ふ所の昆蟲よりも遙かに密接である。彼等は吾々の家に生活してゐる、吾々を知ることに興味を持つてゐる、そし

て吾々を観察してゐる様に思はれる。彼等は音聲や音響に非常に注意してゐる、それを驚く可き程に聞き分ける。若し彼等が昆蟲の聽覺（それは恐らく彼等の感^{アンテナ}髭らしい）を持たないとするならば、それは、彼等に於ては凡てがアンテナであるといふことである。彼等の過度の注意力、彼等の何處にでも感じられるあの神経の發射が、彼等に最も目醒ましい感受力を與へてゐる。

ペリソンの音樂蜘蛛は普く人口に膾炙した處である、(Paul Pellisson, 1621—1693 佛蘭西の有名な文學者、故あつて入獄中に蜘蛛を友達とした、が、その蜘蛛は彼の手に來て食物を食べるのを常としたといふ。)が、も一つは餘り知られてゐない話だが、之も矢張非常に心を打たれずにはゐられないものである。早くから音樂の達人として育てられる幼い犠牲者の一人、一八〇〇年代に有名なベルトーム (Berthome) はその驚嘆すべき成功を、彼が勉強させられてゐた野蠻な塾居生活に負ふてゐた。八歳で、彼のバイオリンは天下を驚倒させたのである。が、その不斷の孤獨生活の中に、彼は疑ひもない一人の友達を持つ

てゐた、一匹の蜘蛛だ……蜘蛛は始め壁の隅にゐた、が、彼は、壁の隅から譜面臺の上へ、譜面臺から少年の體へ、遂には、弓を持つて盛んに動いてゐる腕の上にまで、進み出る自由を與へられてゐた。其處で、彼は非常に近く、感動して胸をどきどきさせてゐる音楽狂として聽き入るのであつた。彼が全聽衆だつた。此藝術家に反響を與へ、その魂に魂を以て答へる爲には、是以上の聽手を必要としない。

少年には不幸にも一人の養母があつた、彼女は、或る日此靈域に一人の音楽好きミュージカルを連れて來ながら、此敏感な動物が例の位置に着席してゐるのを見つけた。スリッパの一撃が此聽手を葬り去つた……少年は仰向に倒れた、このことの爲に三ヶ月間病の床に着いた、そして危く死ぬ所であつた。

第三篇 昆蟲の社會

第十五章 暗黒の都市、白蟻

プレフォンテエヌ氏 (M. de Préfontaine) がギアナを行中、土人達が一種奇怪な建物を包圍攻撃してゐた相だ(ユワベール著「蟻」参照)。氏は之を蟻塚と呼んでゐるが、此の蟻塚を土人達はわざ／＼遠くの方から、火道具を以て攻め、その上猶用心深いことには、之に小さな水道を開鑿して、彼等を水攻せにしてゐたといふ。

是等の建物は蟻の住居ではなくて、種類の違つた昆蟲、白蟻の住居である。白蟻は只にギアナに見られるばかりでなく、亞弗利加にも濠洲にも、又北米の大草原にも此を見るこゝとが出来る。

此昆蟲に就いては旅行家達が様々に物語つてゐるが、最も教へられる所の多い特異な著

作はスミースマン (Smiesman) の著である、彼が装置した優れた舞臺面に依つて吾々はそれを眼の前に見ることが出来る。その構想は亞弗利加の白蟻アリヤシに取られてゐる。

十二の(時には二十のもみられる)支脚を持つた土の射塚を想像してみ給へ、それは遠くから見れば、土人の小屋とも見られるであらう。だが近寄つて見るならば、これが優秀な技術を以て造られた物であることが立派に認められる。その形は、非常に珍奇なもので、尖つたドーム又は角度の鈍い小さな塔とでも言ふ可きものが、全體の中心をなしてゐる。だが此の小塔はその支脚として高さ五六尺位の小さな鐘樓を五六個持つてゐる。そして是等のものに高さ二尺位の低い鐘樓が脊を寄せてゐる。その全體は東洋風の一種の寺院と見ることが出来るであらう。主なる塔は次第に低くなつて行くミナレ(回々教の禮拜塔)に依つて二重にも取圍まれてゐたりする。

凡ては非常に堅固なものである。硬い粘土で、焼かれ、ば立派な煉瓦となるものである。多くの人々がその上に載つても小搖ぎ一つしない。それ處か、あの水牛達さえもが此

處を哨塔として、此の上から、平原を覆ふてゐる丈なす雜草越しに、若しや獅子とか豹とか、牧羊を窺ひはせぬかと見張をするのである。

然も此の圓蓋ドームは空洞になつてゐる、そして之を支へてゐる下部の床そのものも亦半ば空洞のものに依つて支へられてゐる、即ち、その支持點となつてゐるものは、尖つた、ゴシツク式な尖弓形の非常に堅固なアーチ——二個又は三個の足を持つた此のアーチが、四個合接した所である。猶その下方には、數々の通路又は廊下があり、客間とも呼ばる可き天井の附いた數々の室があり、最後に廣大な衛生的な心地よい數々の廣間がある、之は容易に大衆を迎へることが出来る。要するに全々一個の地中都市である。

一條の廣い通路が螺旋形に廻り廻つて此の建物の奥へ奥へとゆるやかに登つてゐる。開いた穴もなく、戸もなく、窓もない。入口出口は何處にも見えない、それは平原の遠い地點に達してゐる。

これが昆蟲の天才、無限の根氣と大膽な技術との事業を證明する最も重大な、最も大切

な構造物である。此の非常に強硬に出来てゐる壁は、その始め碎け易い、崩れ易い物質であつたといふことを忘却してはならない。そこで此の巨大な建物を之程高く築く爲には、先づ不斷の努力が必要だ、次には假建築が必要だ、又それを猶高く築き上げようとする時には、順次に破壊して行くことが必要だ。石工は一尺半乃至二尺の外部角錐から始めて、次ぎに第二列第三列と繼けて行くが、これは一個形體であり、硬固體である、従つて彼等は通路や廊下や螺旋形階段等を造る爲には、大膽にもその根柢から掘鑿してかゝつてゐる。内側を空洞に造つたそのドームの作業も同じである、その凹み込んだ大い丸天井は、下方の床を以て此建物の中心となり、根柢となつてゐる四個のアーチの狹隘な丸天井の上に支へられる様になつてゐる。

此のドームがそれ自身の上に、必要無く可からずといふ程のもでもない側面のピラミッドを支へてゐるといふことに、嚴密に言へば、地形がそれ丈で充分であるといふことに、留意して見給へ。其處に此の眞實な純粹な根氣強い技術の原則があるのだ。それは、自己

を信じ、自己の計劃を信頼し、外的支持に援助を求めず、扶壁拱の必要もなければ、扣柱の必要もないものである。これこそブルユウモレスキ (Philippe Brunelleschi, 1377—1546) 伊太利ルネサンス時代の大建築家のシステムそのものである。

何が慙うした技術を生んだのか？ それを言はねばなるまい。これこそは、實用そのものに外ならぬ。此の尖つたドームと、數々の小鐘樓又は尖塔等は、熱帯地方の猛烈な降雨に抗すべく美事に連結されてゐる。此のドームは水を遠去ける、速かに流下せしめる。假に之が潰れたとすれば、是を支へてゐる下部の床は猶屋根の様に水を外部の圍郭に溢出せしめ、圍郭は又それを地上に注ぐのである。竈の様に空洞なドームは暖を取るのが速かである、非常な熱氣を吸収して、卵の孵化の爲に又、眞裸な、といふよりはむしろ高温度を好んでゐる此住民の幸福の爲に、それを地下に傳達するのである。

此の記念建築物は、それが效用の建物であるが故に、正しく傑作藝術品である。美と善とが互に抱き合つてゐる。さてかゝる驚く可き藝術家とは如何なる人々であるか？ 知り度

くなるであらう。吾々は敢てそれを言ふことの出来ぬ程、それは自然から最も輕蔑されたもの達である。

人々は彼等に様々な名を與へてゐる、就中白蟻と呼び木蟻と呼ぶが、確かに餘り正確な名ではない。蟻は彼等の敵である。彼等の極端に柔軟な體軀は、蟻の乾燥強固な體軀に正に相反したものである。

人々は又彼等に木虱の名を與へてゐる。彼等は實際、何等の抵抗なしに壓潰されるあの柔弱な寄生蟲に似てゐる。神の素晴らしい哄笑でなくてなんであらう、かゝる微細物を好んで奪取せしめるとは！ 昆蟲のマンフィス、バビロン、眞のカピトル宮殿は誰の手に依つて築かれたか？ 虱の手に依つて！ たとへ彼等の立派な臆とその四重になつた齒牙とが如何に驚嘆すべき浸飾力を持つとは云へ、若し、彼等からその精英達（彼等の兵卒）を除くならば、彼等は何等重要な武器を持たない。齧蝕の用をなす彼等の齒牙は、戰鬪的には無力である。白蟻の目的は明白だ、人々が彼等の種類に與へた恐る可き名（戰鬪蟲、齧

蝕蟲、兇暴蟲）に反して、彼等は單なる勞働者に過ぎない。

如何なる昆蟲と雖も彼等よりは強者である、少くもより強固であり、よりよき保證を持ち、より立派な鎧裝を持つてゐる。萬物は、殊に蟻は彼等を涉獵してその群れを喰つてゐる。鳥類は勿論之を食ふ。家禽は彼等を無數に吸收する。萬物は（之を焼く人間も同じ）彼等に何ともいはれぬ味を見附けてゐる。土人は彼等を食つて飽くことを知らない。

彼等はそんなことを見もしないで働いてゐる。彼等は殆ど眼を持たない、少くも眼が利かない。殆んど凡ての場合、彼等が生活してゐる暗黒界が彼等の此の器官を萎縮せしめてゐるのだ、恰もカランチイ（Carintie 塊太利）の地下湖水に發見せられる一種の鴨類の様に。だが極く稀には、日光に身をさらしてゐて、完全な形を供へ、立派に觀察の出来る眼を持つた白蟻がるのではない。

暗黒、彼等を光の下から追放する此禁令が、彼等に獨特な産業を發達させたものらしい。斯様に彼等にとつては仇敵である光の世界に反して、彼等は力に任せて此の夜の小世

界を打建て、其處に自己の技術を振つてゐる。彼等はその食料、護謨とかその他彼等の藏をなしてゐる物質を求めに行く時より外には、其處から出掛けはしない。

是等暗黒の都市に對する彼等の執着は極端である。彼等はそれを執拗に固守する。人が是に一撃を與へる時、彼等は各々彼等の方法を以て之に抗爭する。勞働者達は孔を塞いでゐる漆喰を内部から押す。兵士達は喧嘩を賣つて來たそのものへ攻め寄せて行く、そして、その鋭い齒を彼等の皮肉に刺して、その傷口へ喰着いて了つて、たゞへひねり潰されようとも彼等を取逃がしつこはない。土人達の様に眞裸な人間は、此の喰着きには怖氣をふるつて降参する。

然しながら若し諸君が猶我張つて、侵入して行くならば、諸君はその宮殿、その通路、その浮橋、その住民の部屋、卵の爲に供へてある食料、穴藏、酒庫又は倉庫等に驚異の眼を見張らずにはゐるまい。だが最後にその中央に行つて見給へ。其處に彼等の守り本尊、そのイドールが絶へず一群の御機嫌取りの注意に守られてゐる。奇怪な、氣持の悪いものだ

が、又こんなにもちやほやされてゐるものはない。明らかに尊崇的である。

これが女王又は共通母で、恐る可き繁殖力がある、即ち一時も中斷することなく一分間に約六十個、即ち一日の間に八萬個の卵が彼女から産出されるのだ！

處でまあ何と奇妙なことではないか。是等寄生蟲に比較された動物にも、高き詩の一瞬間、愛の時があるのだ。一時彼女等にも翅が生える、そして殆んど一瞬間にして彼女等は落下する。かく翅の落ちた幾番かは隠家もなければ、力もなく、何等抵抗すべき力もなく、あらゆる昆蟲の餌となる、彼等が喜んで飛びか、つて行くマンナが之である。戀もなければ翅もない勞働蟻は、是等の犠牲者の一と番を救ひ出すことに努力する、この弱い、墜落した哀れなものを迎へて王とするのである。

彼等を連れ來つて、此の都市のあらゆる室、あらゆる通路の中央に位する一室に据える。其處で、彼等を甦らせ、夜となく、晝となく、之を養う。すると雌は次第に巨大な體軀になつて、遂にはその體軀は普通の二千倍の大いさになつて了う。が、その頭部は奇怪

な對照を見せて、少しも發育しない。従つて運動は不可能となつて、此時より囚はれの身である。戸口は彼女が通るには、既にかゝる怪物にとつては餘りに狭いものとなつてゐる。そこで彼女は其處に閉籠つて、その死に至るまで急流の如くに生物を排出する。彼等は日夜それを引取つてゐる、それはやがてこゝの市民となるのである。

此の柔かい白味がかつた動物、一動物といふよりはむしろ一腹部とも云ふ可き彼女は、少くも拇指程の大きさである。或る旅行家は蜎蛄程のものを見たと言つてゐる。大なれば大なる程、彼女は多産で、優勢である。此の恐る可き虱の母は又それ丈その狂熱的な寄生蟲の尊崇的であるらしい。彼女は彼等の理想であり、詩であり、熱情であるらしい。彼女をその破壊せる都市の一片と共に移し置くならば、見て居たまへ、彼等は直ちにその土焼の下で仕事に取りかゝる。その母の聖體を保護するアーチを建設し始める。彼女の爲にその王室を再築し始める。それはやがて材料の許す限りに於て、此復興都市の中心となり、基礎となる。

此の市民が此の繁殖器に對して示す強烈な愛情だけなら、私は何も驚嘆しはしない。若し限りある有種類の昆蟲が一緒になつて彼等を亡ぼさうと働かないならば、眞に不可思議な此母は彼等を世界の主人、何といはうか？ 彼等丈を世界の住民としたかもしれない。そして恐らく魚類丈が残されたことであらう。然かも昆蟲そのものは死滅してゐたであらう、それは蜜蜂の母が一年か、つて、やつと白蟻の母が一日に造り出す處のものしか造り得ぬといふことを思ひ合せれば充分である。彼女に依つて、彼等はあらゆるものを併呑するが彼等は脆弱で而も美味である。それが彼等を滅亡せしめる原因となつてゐる。

樹木に宿つて生活する白蟻の類が不幸にして吾々に近附かんか、彼等の害を阻止する手段は殆んどない。彼等は恐るべき速力と力を以て活動する。彼等が卓子の一足から侵蝕し、次ぎに卓子そのものを、次ぎに反對側の足まで残る隅なく一夜に侵蝕して了ふことは既に知られてゐるところである。

慙うした急激な活動が家屋の梁から木組に及ぶ時の結果は、之を容易に想像することが

出来る。最も不幸なのは、人がそれを長い間発見せずにあることだ。人は洞になつた柱を猶信じてゐる、それは何日かは突然崩壊する。明日とも知れぬ屋根の下に、人は氣樂に眠つてゐるではないか。

コロンビア州のヴラレシア町は、彼等の孔道に依つてその地下が空洞となり、今や危険な壑窟の上にかゝつてゐる。

吾々も現にロシユル (Rochelle, 佛蘭西西方の港町シャラント・アンフェリウール縣の首都)

に於て船がもたらした白蟻が、町の一部に此恐る可き活動を開始したのを見てゐる。完全な築物がかくて今や蝕耗されてゐる。何等外部に現はれるものもなく、階段のてすりまであらゆる木材が完全に穿たれて、空洞になつてゐる。餘り觸つてはいけない。それは、諸君の手を觸れる丈で崩壊して了ふのだ。然しながら此恐る可き侵蝕は今までの處町の一街区に踏み止まつて、他を毀損しようとはしないもの、様である。曾つては歴史を有し、今猶航海と通商とに依つて重要な此都市はやがて、ヘルキュラノムやボムベイ (Herculanium,

Pompei 共に伊太利の古都にして、ベジウブ山の憤火に埋没せられた) の状態に立判るゝとであらう。

第十六章 蟻の結婚とその家政

蟻は凡ゆる他の昆蟲に比して或る優越點を持つてゐる。それは彼等の生活、食糧及びその労働用の器具に特別な制限を持たぬといふことだ。一般に、彼等はあらゆることに自身を適應せしめ、又到る處に活動する。是程力強い進歩發達の能因となるものは又とはあるまい。彼等は、まあ言つてみれば、自然の萬事一手引受人である。

白蟻は、少くもその大部分のものは、地下の暗い所に働く、蟻は上にも下にも働く。

白蟻と同じく、彼等も亦熱帶地方に於ては立派な建物、ドームを造り、その中でその蛹達に太陽の焼き着く様な光線を避させながら、その暖氣丈を受けさせてゐる。だが、是は要塞ではない、蟻は要塞などを必要としない。彼等はこの國土に於ては他のあらゆる動物の王様であり専制君主である。饜殺者の甲蟲、侵略者の埋葬蟲等の我が國に於ての昆蟲中の敏捷者、禿鷹の役をなしてゐるもの達も、此蟻の支配下にある熱地の中へは敢て出現

しようとはしない。地に宿る凡てのものは、立所に彼等の襲ふ所となる。lund (Tund) はその著「蟻の話」に於て、現に落ちて來るのを見た鳥を拾ふ時間も殆んどないと言つてゐる。蟻は既に其處へ現はれて、それを横取してゐるのだ。

我が地方のものよりは遙かに強烈な南方の大蟻は、自分をあらゆるもの、王者であり、畏敬の的であると自任してゐて、何者をも恐れるといふことがない。その進路に如何なる障碍が現はれようと、之に向つて平然として前進する。その前途に人家があれば、彼等は其處へ這入り込む、そして生きてゐるものは何者でも、巨大なものでも、有毒な恐る可き蜘蛛でも、小さな哺乳動物でも、何でもかんでも噛み附いて了う。人間も逃げて了う。が若しそれが出來ないならば、その侵寇は眞に憂ふ可きものとなる。曾つて、バルバドス (Barbados) 西印度諸島少アンチル列島の一に於て、彼等が長蛇をなして幾日も幾日も無限に續いて來たことがあつた。地上はその爲に全く眞黒になつた。そしてその激流は明らかに住宅地の方へ向つてゐた。人々は彼等を幾分潰したが何等の注意をも惹かなかつた。

無數に潰した、が矢張彼等は前進して來た。如何なる墻壁も、如何なる溝渠も何等の役に立たなかつたに違ひない。水さへも彼等を阻止することが出来なかつたであらう。彼等が互に房飾りか何かの様にくつき合ひながら、生きた橋を造つて了ふことは分り切つてゐるのだ。幸にして人々は前方の地上に小火山を設置することを、火藥の塊を散布することを思ひ附いた、これがそれからそれへと彼等の下に爆發する、その列を破り、之を潰亂せしめる、火と煙とで彼等を包んで了ふ、埃でその眼を眩まして了ふ。これが成功した。少くも彼等は少しく方向を轉換した、そして他の方へ廻つて行つた。

ランネ(Charles de Linné 1707—1778 有名な瑞典の博物學者)は白蟻を印度の厄介物と呼んでゐるが、蟻も假に人間の仕事、耕作に及ぼす損害丈しか考へないとすれば、矢張此名を與へることが出来るであらう。數時間内に、彼等は大きなオレンジの樹を空坊主にす。彼等は一夜に綿や甘蔗の畑を荒らして了う。これが彼等の害惡だ。彼等の徳と云へば、それは人類に害をなす蟲とか不潔物とか云ふものを凡て立派に驅除することである。

簡單に云つて了へば、彼等なしには、或る國には人が住み得ないと云ふ。

我が國のものに就いては、正直な處、彼等は人間や又その栽培する植物にほんの一寸した害をだつて及ぼしてはゐない。それ處か、彼等は無數の小昆蟲から人間を救ひ出してゐる。私は、屢々彼等が口々にほんとに小さな青蟲を咬へて、長い列をなして通るのを見た。彼等はそれをいみぢくもその共和國の食物倉に運んでゐるのだ。此畫面は正直な農人をして彼等を祝福せしむ可きである。

地の中、全く地下に働いてゐる蟻、土で巢を造る蟻は、觀察が困難だ。だが大工職とも呼べる可き種類のものゝは容易に眼を附けることが出来る、少くも彼等の建築の上部構造に着眼することが出来る。彼等は常にその崩壊し易い建物のドームを修理し、更に高くして行かねばならない。彼等はその使用する土壤に木の葉や樅針や松の花をまじへる。若しその一片が弓形に曲つたり、結ばれたりしてゐれば、それこそ一個の寶だ。彼等はそれを弓形フックの入口ミとして使用する。尖弓形であればこれ程都合なことはない、何となれば尖つ

た弓形はそれ丈堅固だからである。外部へ通ずる無数の通路は扇形に開いてゐる。彼等は中心點から出發して、その周圍に開き出る。部屋は低い立派なもので、此建物の大部分を占めてゐる。その最も大なるものは中央部ドームの下に位し、最も高い部屋であり、公衆會議の處に當てられてゐるらしい。其處では常に多忙な此處の市民達が、其感鬚（一種の電信だ）の敏速な接觸に依つて、或は事件を報告し合ひ、或は相互の意見や指導を交換し合つてゐるのを、諸君は見るだらう。こゝは一種の國民會議場である。

此大國民の様々な活動事業觀察の興味をそゝるものはない。一方では日用品係が木虱の搾取や、昆蟲狩りや又は材料の仕入に出かける、他方では屋内係が一身を全く家事に捧げる、子供達の教育に携はる。その搖籃の周圍に行はれる乳母達の不斷の活動を見てみ給へ、まあ何といふ熱心であらう、一瞬間とても無駄にはしない。一滴の雨一線の光が潜入しようものなら、それこそ國家的大事變である、此殖民地の凡ての子供達の移轉が行はれる、それは熱心なもので決して抛擲して置くなつてことはない。彼等が自分達と同じ重

量を持つたその大きな子供達を負ふて、一段々必要な場所に彼等を連れて行くのが見られる。きちんと保たれてゐる四十度といふ此處の溫度は、寒暖計以外の何ものであらうか？

そればかりではない。哺乳を聯想せしめる食物の注意が、亦蜜蜂よりも遙か複雑である。卵はその子守の口から營養になる濕氣を受けねばならぬ。幼蟲は銜餌をして貰はねばならぬ。殻を造り、蛹となるものは、若し注意深い監督者があつて此殻を開き、その小さな蟻を開放して、外光に出すことをしないならば、其處から出る力はないのである。吾々は眞近に之を見る爲に手に入れた人工的な蟻の巢の中に、ユウベール氏が惜くも攔むことの出来なかつた或る祕密をさへ觀察することが出来た。

此嬰兒がみせる僅かな動きが、その時期の來たことを告げた。吾々は雀躍して、凝乎と視てゐた、乳母達は小さな天女の如く、凝つと腰を下ろしてびくとも動かない。明らかに此沈黙の覆ひの中に自由の最初の願望の動くのを窺つてゐるのだ。

あらゆる高等動物に於ける如く、生れた小兒は幼弱で、何事にも不馴れである。その最初の歩行は一步毎に膝を突いて了ふ程、たよりないものである。言はゞ、リジエール（歩み始めの幼兒を支へる紐）が必要である。その旺盛な生命力は、他でもない、その小歌みのない食物攝取の慾求に現はれて来る。かくして、その熱望が激しい時、そして一日に無数の小兒を開けてやらなければならぬ時には、此等新生の子供等は都市の或る一室に圍はれて了う。

或る日、けれども私は、その一人、まだ少し蒼白い奴が、巢の入口の處へ顔を出したのを、そしてその闕を越して、此蟻塚の絶頂へ歩き出すのを見た。だが彼の脱走は長くは許されない。彼を見た一人の乳母は、その頭の端を捕へて、優しくも彼を最も近い入口の方へ導いた。

子供は抵抗した。彼は引摺られながら、孔道の中で小梁を見つけると、それにしがみ附いて、乳母の根氣を涸らして了つた。彼女は、それでも優しく、一瞬間手を弛めて、一廻りしてから又その嬰兒の傍へお守に歸つて來た、彼も遂に疲れておとなしく従つし了つた。

體が確固として來ると、之を案内して、迷宮的な都市の内部や、その城下や、外界へ通ずる通路や、近郊の道路等を教へなければならぬ。次いで、狩獵を仕込み、身を立てることを訓練せしめる。質實といふことがあらゆる共存の根柢である。

何んな食物でもちつとでも輕蔑なぞしないで之を受領する蟻は、そのこと丈でも、不安といふことがなく、利己的といふことがない。彼を吝嗇家と叫ぶのは全く誤つてゐる。それ處か、彼はその都市内に於て益々共同分配者の數を増すことにのみ腐心してゐるかの様である。自分が産んだでもない人々に對する彼女のあの寛大な母性の中に、今日は既に若き市民となる可きあの昨日までの小兒達に對する彼女のあの配慮の中に、全々新しい、昆蟲中に實に稀な或る感情、友愛の感情が生れて來る。

此教育の最も不可思議な最も奇妙な點、それは勿論あの秘密結社の様子を聯想せしめる

言語の傳達である。彼等には屢々複雑した意見を群集に傳達し、一瞬間の内に、縦列をなす全體の進行や全人民の行動等を變更せしめることが許されてゐる。此の言語は、主にその感鬚の接觸又は下顎の軽い衝突等に成立つてゐる。彼は（多分説得の爲であらう）相手の胸部に頭を打つけて主張する。そして遂には聴者を感動せしめて、何等反抗させることなしに、その聴者を或る場所、定められた物へ連れて行く。恚うした場合、勿論それは信ぜしめることも説明することも困難な時なのだ。聴者は説得させられて相手に一致する。そして今度は二人して他の立合者達を引張りに行く、彼等は次第にさうして更に次の人々を呼び、同じ方法で人数が増して行くのだ。吾々人間の議會での言葉、群集を奪ひ（感動せしめ）とか、聴衆を運ぶ（感激せしめる）とかは、蟻の中では何等形容的なものではないのである。

此活潑な振舞の外にも、彼等は猶多くの説明も出来ない運動をやつてゐる。それは乗馬運動である、即ち彼等の或者が他の者の上に乗る之を鞭達する様に、その頬をちよいちよ

い叩きながら走る。彼等は、この時二人つゝ立合つて闘ふ。脚や顎や觸角を互に引張り合ふのだ。之は遊戯と呼ばれてゐる。けれども、私は唯さうと信ずるより外はないのである。これ程熱心な、明らかに眞面目な、市民の斯くの如き角力は恐らく吾々の知らない或保健上の目的を持つてゐることであらう。

私が是等の捕虜達を立派に手なづけた結果、彼等はその新しい住居に馴れて、あだかも自分で造つた都市に於けるが如くに、私達の目の前で働いてゐた。彼等は更に一個の縮小的な小さな町を造つた、そしてその戸口を注意深く増して行つた、殊に日の熱い頃はそれを増した。それは勿論子供等に空気を與へる爲で、子供等は注意深くも穴の近くに置かれてゐた。

夜になると、忠實にも、その不變の習慣に従つて、彼等は戸口の閉塞作業に取か、つた、あだかも無職の浮浪者の夜の襲來を常に恐れてゐるが如くに。何といふ興味深い光景だらう。吾々が屢々大きな蟻塚に見に行つたのは此の活動であつた。

是程變化に富んだ光景はない。四方八方から遠い處からも彼等が皆何かしら携へて、長い行列をなして歸つて來るのが見える。或る者は長い麥藁を、他のものは松の花を又は、その地方々々に依つて尖つた樅の黒い葉などを持つて來る。そして恰もそれは日没の頃、小枝やさ、やかな束柴を持つて歸つて來る小さな柚人の様に。そして一番後に、空手で歸るかと思はれるものがあるが、彼等こそ最も重任を帯びてゐるのだ。彼等は木虱の蜜を搾つて來る、そして、子供等の爲に夜のお乳としてそれを持つて歸るのであつた。

市街に接近して、登坂が始まる點に至る時、彼等の氣力を、慫ふした重い材料を持上げようとする熱心さ、熱情さを見るは楽しいものである。一人が疲れ切つてもう持上げる事が出来なくなると、他の一人又は二人がそのあとを續ける。すると、その梁材がぐいぐいと引あけられて、恰も生物の様に登つて行く。巧妙さと智力とがその力の不足を補う。此處へ停止した人々は方向を轉じて、彼方の少し高い方へ必要な丈進んで行く、そして皆は此の重荷を正確に穴の上へ下ろす。それから素速しこくちよいくと動かすと、荷

はぐるりと廻つてうまく落つて了う。多くの力學、機械學的問題が或る恵まれたる大膽さに依つて、勞力の非常な節約の内に解決されるのであつた。小しづ、凡てが塞がれて行つた。廣大なドームは、柔かいそしてやんわりしたとでも言ひ度い様な曲線を以て、勤勞な一大國民を其正しい休息の内に包容して、最早何等の光も、戸口も、窓も見せない。そして、唯一個簡単な樅の小さな破片で出來た小山の様にしか見えないのだ。皆は全く安心して休息してゐる。斯くも思はんか？ それこそとんでもない誤信である、幾人かの歩哨が歩き回つてゐる。小さな棒でほんの一寸軽く觸つた丈けでも、木の葉が一枚擦れ合つても、幾人かの護衛兵が飛び出して來る、そして周圍を巡回して、違變のないのを極めて又這入つて行く、けれども疑はしい點が少しでもあるならば、夜中止まつて警戒を續けるのである。

最も驚く可き、そして吾々の眼の前に見ることの出来る光景、それは蟻の結婚である。狂氣じみたこと、人も知るように最も狂氣じみたことは、賢者の狂氣である。名譽あ

り、節約であり、尊敬すべき共和國は此時（それは全く一年に一日だ）愛か？ 狂氣か？ それは分らないが、逆上に充ちた、もつと積極的に言へば、恐怖に充ちた豪華な光景を呈するのだ。ユウベール氏は、それを國民祭禮の光景だと言つてゐる。何といふお祭であらう！ そして何といふ有頂點の光景であらう！ だが勿論人間がいくら考へたつて、こんな渦巻く様な沸騰を想像することなどは出来るものでない。

私は或る驟雨の日、夕刻六時から七時までの間にそれを見た。此日は大雨と熱い光とが織り混じつてゐた。地平は甚しく變つてゐた。が空氣は沈靜だつた。大雨再來前の大自然の一休止があつた。

私は見た。低い傾いた屋根の上へ、驟雨そのもの、如く羽化された昆蟲の雨が降つて來るのだ、彼等は茫然自失、喫驚仰天して狂亂してゐるらしかつた。或る目的に最も速く達せようとする彼等の擾亂、彼等の無茶苦茶な馳走、逆立、衝突、翻筋斗等を説明することは恐らく不可能事であらう。多數のものが互にくつついて、戀をした。その最大多數は籠

回する、停止することなく旋回する。凡ては生きることにあまりに急迫してゐた、それが爲、生きることそれ自身がその障礙をなした程であつた。かゝる狂熱的な願望は恐怖を抱かせる。

恐る可き戀愛よ！ 吾々は、實際には、彼等の欲してゐるものが何であるかを理解し得なかつたことであらう。彼等は愛し合つてゐたのか？ 彼等は喰ひつき合つてゐたのか？ 何にも知らない許嫁達に夢中になつてゐる是等の民衆の方へ、他の羽根のない蟻達がふらふらと出て行つた、そして、彼等に、殊に最も混亂してゐる人々にか、つて行つた、彼等を咬み彼等を引張つた。私達はその時、彼等はその戀の人々を無茶苦茶に咬んでゐるのだと思つた程であつた。だか、さうではないのだ、彼等は唯彼等を従はせようと欲したので。自分達の方へ呼び歸さうと欲したので。彼等の物凄く無言劇、それは行爲に現はされた慧智の忠言であつたのだ。翅を持たぬ蟻達は賢い、何の缺點の無い乳母だつたのである。彼女達は自分の子供はないが、他人の子供を育てる。そして此の都市の重大な凡ての

事業を擔つてゐるのだ。

是等の聖女達は怠け勝ちな戀人達を監督して、その婚嫁を毎年その市民を造り出す公事として、嚴重に監視するのである。従つて彼女等は、飛び立つた熱狂者達が他の場所で戀をすること、即ち、故國の母としての自覺がなく、他所の市民を造りに行つて了ふといふことを心配してゐたのである。

大多數の有翅者は我を張らないで、地上に、即ち、故國に、貞操を守つて降りて來る。けれども抜け出して、ふいと飛び去つて了ふものも少くはない、彼等は戀と移氣とのみを追求しやうとするのである。

以上の思出には、一の驚異すべき幻想、不思議な夢があつた。

翌朝になると、抜け落ちた翅の破片より外には、何等昨夜の狂態を想起せしむるものはない。あの特異な戀愛の夜の痕跡などとも見分けることは出來ないであらう。

第十七章 蟻の牧獸と奴隸

ユウベール氏の著者に依つて、始めて、或種の蟻が奴隸を持つてゐるといふ奇怪な事實を知つた時、私は非常に驚かされた(誰しもかゝる奇怪な暴露には驚いてゐる)、だが私はむしろ、悲痛な感にうたれた。

何たることだ！ 私は清淨潔白なものを求めて人間の歴史を捨て、來た。私は少くも是等の動物中に、自然の平等な正義を發見しようと欲してゐる。私は彼等、今まで敬愛し來つた此人々、勤勞な、質朴な人々、その嚴格な愛すべき相のなかに、共存國の様々な徳を求めてゐる……然るに私は此處にかくの如き不名譽なものを見る！

奴隸所有者達、あらゆる惡の是認者達に取つての、何といふ喜び、何といふ勝利だ！……地獄の惡魔よ、壓制の鬼よ、笑へ、あざ笑へ……自然の光明の中に、一の黒點は顯はれてゐる。

私はユウベールを放擲して了つてゐた。如何なる著作と雖是程憎ましく思はれるものはなかつた。許し給へ、名觀察者よ、貴下の祖父、貴下の父は、私を恍惚として魅了して居たのであつた。最初のユウベール、偉大な蜜蜂の歴史家は人類の信仰を大ならしめてゐた、彼は吾々の情操を高めしめた。けれども蟻のユウベールは私の情操を粉碎して了つたのであつた。

併しながらその書を再び手にして、より真近に之を驗するのは一の義務である。狡獪、邪曲、背徳な一昆蟲！ それは驗閱せざるを得ない。

併し先づ第一に區別して置かなければならない。謂ふ所の奴隸の一部は、單なる牧獸に過ぎないとも言へるであらう。

蟻の色は何れも貧弱ではあるが、中でも最も輝かしい色彩を持つた蟻を見れば、彼等が凡ての昆蟲類中最も日に焼けた陰氣なものであるといふ假定を立てるに難くはない。その比類ない峻嚴さは、化學が彼等の體軀からあの侵蝕性蟻酸を分析し出すといふことで確定

されてゐる。彼等は、その危急の場合に臨んでは、屢々それを毒液の様に、敵に投げかける。彼等の或る種類のもは、それを使用して自分達の住居とする樹木を枯らし、殆んど之を焦がして黒塗りにする。他物に對して斯の如く侵蝕性を有する物質は、彼等自身に取つて、果して侵蝕的ではないであらうか？ 私はともすればそれを信じようとする。そして、此の峻嚴性といふものがあるからこそ、彼等が蜜やその他自分を和らけて呉れる物質に對してあの極端な貪慾性を抱くのだと考へる。私は此の假説を學者に提出するものである。

メキシコの蟻は、凡ての蟻中最も恵まれた氣候にあるが、その労働者には二階級がある。一は食糧を求めに出歩くもの、他は、無精な引籠屋で、その食糧を製煉して一種の蜜を造るもの、それ等は凡て彼等の營養とされる。

我が國の蟻は、その大部分が蜜製造の力を持たぬ、彼等は木虱の持つ一種の甘露を甜め又は搾取して、之の必要を充たしてゐる。あの無精な動物は、何等働くことなしに、唯そ

の體の組織の作用に依つてのみ、凡ゆる種類の植物から甘い液體を吸ひ取つてゐるので、此の蜜が蟻へ轉送せられるのは、何等暴力に依つては無く、相互の同意に依つてなされてゐる。

それは、恰も吾々が牝牛に對してする様な、一種のくすぐり又は優しい牽引に依つて行はれる。彼の、動物生活の末尾に位し、その體組織も全くい、加減な、夏期にあつては胎生、秋期にあつては卵生といふ木虱達は、非常に粗末な被造物で、蟻に比れば智力の點で極端な劣等者である。擴大鏡で見ても給へ、彼等はいつても頭垂れてゐる、いつもまぐさを食む姿勢だ。彼等の態度は牧獸の態度である。之は蟻に取つての牧牛である。永久に之を利用する爲に、蟻は彼等を屢々その蟻塚の中へ連れて行く、彼等は其處で一緒になつて立派に生活する。蟻は木虱の卵の面倒を見、その孵化の世話をし、そして生育せる木虱を適當な植物に養つてゐる。

彼等を連れて行つて、家畜小屋に收養することの困難な状態にある場合には、蟻は彼等

をその場に圍ふ、その小枝の周圍に土の圓壙を建設する、そして、此の牧場たる樹木を覆ふて了う。それは蟻の圍場、牧畜小屋と呼ぶことが出来る。彼等は或一定の時間にその家畜を搾りに其處へ出掛けて行く、時には我が子供等をその牧獸の中へ連れて行く、營養物を一層手軽に與へる爲である。私は屢々、殊に夕刻憊うした和蘭の光景を目撃した。是迄そこに缺けてゐるものとは唯一人蟻のポール・ポッテエル (Paul Patter, 1625—1654 有名な和蘭の動物畫家) 丈である。

連れ歸られたり、又は圍場を施されたりした木虱は、あの恐る可き共和國の保護保證を持つことに於て、測り知られざる利益を得てゐるといふことを忘れ給ふな。木虱の獅子(斯く或る小さな毛蟲のことを呼んでゐる) やその他惨忍な諸動物達が、若し敢て此の蟻の牧獸に近づくなれば、彼等は無慘にもあの強暴な願と、焼く様な蟻酸とを感じるのだ。

此處に於てか、彼等が其處へ近づかない。即ち之は牧獸であつて、奴隷ではない。彼等は吾々のなす處のことをなしてゐる、彼等は、高等動物の天賦を役立て、ゐるの

だ。而かも、彼等はそれを優しく用ひてゐる、人類よりも手際よくやつてのけてゐる。

併しながら此處に最も難解なことがある。蟻に二種類ある。その體の大きな、だが何等相違してゐないものが、小さいが却つて技術を持ち、遙かに器用な蟻達を、従僕や乳母や料理人として使用してゐるのである。

動物の道德性に關する吾々の觀念を一變せずんば止まざるの感ある此の奇怪事は、現世紀(十九世紀)の初頭に發見されてゐる。蜜蜂に就ての優れた觀察家(前出のフランソワ・ユウベールの息)、ピエール・ユウベールがジネエブ近傍の田舎を散歩中、茶褐色が、つた蟻の蜜集縦隊が地上を進んでゐた。で彼はそのあとを尾行して行つた。その側面に幾匹か、急しげに往つたり來たりして、その縦列を整へるかの様であつた。十五分の進軍の後、彼等は或る黒い小さな蟻の巢の前にとまつた。その入口では激しい戦闘が開始されてゐる。

黒軍は少數を以て抗爭し、その大衆は攻撃されて戸口から逃げた、戰場から最も遠距離にあつたものは、子供達を連れて逃げた。之は明らかにこの子供等に關係があつたのだ。

黒蟻が賢くも憂慮したのは、正に子供の掠奪であつた。氏は間もなく、既にその場へ突入して行つた侵略者達が、黒蟻の子供等を負ふて、引返して來るのを見た。これ以前にも亞弗利加に黒奴賣買人の侵略が發見されたことがあつた。

褐色軍は、此の生きた分取品を負ふて、哀れな此都市を荒涼たる大破滅の中に捨てた、そして、再度我が住家への道に就いた。驚駭した彼の目撃者は呼吸を殺しながら彼等に繼いだ。けれども、褐色軍の都市の城門に、この居住者となつてゐる小さな黒蟻が、是等戦勝者を迎へに出て來た時、そして彼等からその分取品ををろし、明らかに或歡喜を以て此我が同族の子供等をもてなした時、その驚駭は如何ばかり増大せられたことであらう。此の工供等が疑もひなく此異國の土地にその種族を傳へて行く譯になつてゐる。

かくて強い戦闘蟻と小さな黒蟻とが和合して生活する混合都市が存してゐるのである。だが黒蟻は一帶何をなすのか? ユウベールはその後幾許もなく、實際此の黒蟻のみが何から何までやつてゐるのを知つた。彼等のみが建設工事をするのだつた。彼等のみが褐色

蟻の子供及び奪はれて來る同族の子供を養育するのだつた。彼等のみが此の都市を、食糧を、管理するのであつた。褐色蟻に仕へて之を養ふのであつた。褐色蟻は大きな子供の様に、之等矮小な乳母にふくみ餌を持つて來さしてゐた。戦争と盗みと、黒奴奪掠の海賊的行爲より外に何等の仕事をしてない。閑人としてうろついたり、兵舎の入口に日向ぼつこをしたりするより外に、その合間には何等動くこともないのである。

最も奇怪なことは、是等文明化した奴隷達がその大きな野蠻な戰士を愛し、その子供等の面側を見、奴隷としての仕事を喜んでなすとけ、そして、何と云ふ可きか？ 奴隷制度の擴張を圖り、幼兒奪掠を奨励するのを見ることである。慙うした凡てのことに、秩序ある自由協働の顯れがないであらうか？

又、強者を支配し、主を自由にする喜び、誇りといふものが、これら小さな黒人達に取つて、その平等な故國にゐるよりも、却つて精神的自由を與へるものでないとは誰が云へようか？

ユウベールは一つの實驗をした。彼は若し此大きな褐色蟻に従僕がゐなかつたならば何うなるであらうか、彼等は自分達で食を取り得るか何うか、それを見たいと思つた。彼は恐らく、此の墜落者達は、母の愛、蟻にあつては強烈なあの母性愛に依つて、再び元に歸り得るだらうと、考へたのであらう。

彼はそこで、褐色蟻の數匹を數個の蛹と共に硝子張りの箱の内に入れた。本能的に彼等は始めその蛹を運びにか、つた、彼等らしいやり方で蛹を揺りにか、つた。ところが間もなく彼等は（勿論體も巨しく、立派に運ぶことも出来るのだ）彼等は！これは重過ぎる荷だといふことを知つた。彼等はそれらを地上に置き放しにした。捨て、了つた。彼等は彼等自身さへも自ら捨て、ゐた。ユウベールは彼等の爲に、箱の一隅に蜜を入れて置いた。彼等は、それを取りさへすれば用は足りたのだ。哀れむ可き失墜、奴隷制度が支配者に科する慘酷なる刑罰、彼等はそれに手をも觸れなかつた。彼等は最早何者も認めないもの様であつた。彼等は、最早自ら營養を取ること出来ない程、甚しい無智、無頓着者

と成り了つてゐた。彼等は食糧を目の前に据えて死に類して行つた。

此時ユウベールは此の實驗を完全ならしめる爲に、唯一匹の小黒蟻を導き入れた。此の賢い奴隷の出現は凡てを一變した、そして生活と秩序とを取戻した。彼は眞直ぐに蜜の處へ行つた、そして死にか、つてゐる大きな馬鹿者に食事をなさしめた。彼は地中に小屋を造つた、人工的孵卵器だ、そして其處へ小さきものを入れて、孵化の準備をした、その産衣(又は蛹)を監督した。そして立派に一群の小國民を引き出した。それらは間もなく今度は自分達で勤勉家となつて、その乳母を助ける譯である。何といふ恵まれた精神の力だ！ 唯一個の存在がその都市を再興したのであつた。

觀察者は此の時、かゝる優越せる理智を以て、是等の奴隷達は實際上には此の都市に於ける奴隷制を軽々と遂行し、恐らくはその主人達をも支配してゐるに相違ないといふことを了解した。根氣強い研究が、事實はかゝるものであることを、彼に示した。小さい黒蟻達は或道德的權威を以て諸事萬端を考量してゐる。その證據はまことに歴然たるものであ

る。一例を挙げれば、彼等はかの巨大な褐色蟻が自分一個の考へで無益に出歩くことを許さない、そして強制的に立歸らせる。同じ様に體の大きいかの戦蟻も、若しその賢い小さな奴隷達が時機宜しと認可しないならば、若し彼等が驟雨を心配したり、又は日脚の進んでゐることを恐れたりするならば、之も出發するの自由を持たないのである。侵略が不成功に了つて、褐色蟻が子供を引連れないうで戻つて來る時には、小黒蟻は城門の入口にあつて、彼等の歸城を許さない、そして再び戰場に送り歸す。そして、彼等がかゝる臆病者の頸部くびねを引擱んで、無理矢理に出發せしむるのを人は現に見てゐる。

あの優れた研究家の觀察は、かくの如き驚く可き事實であつた。彼はこれに就いて己が眼を疑つた、そして、更めて實驗を遣りなほし、之が自己の誤謬であるか否かを決定する爲に、スイスの博物學者の或る大家を呼んだ。此證人及びその後之を觀察した凡ての人々は、彼の觀察が如何に正しきものであつたかを承認するに至つた。

私は敢て言ふ可きであらうか？ かゝる慎重な證據の後に、私が猶疑問を抱懷してゐる

といふことを。明快に言つて了ふならば、私は、此事實は絶對的に僞虚ではないが、その觀察に誤謬があつたと思考するものであると。一八五七年八月二日の日曜日、私は現に私の此眼を以て、フォンテエヌプロオの公園の中に、それを見たのである。私は、或る立派な學者、優れた觀察家と一緒にゐたのだが、その人も全く私と同じ見解であつた。

それは非常に暖かい日の午后四時半のことである。私達は或る石材の堆積から、四五百匹の褐色又は赤色が、つた蟻、丁度黄金蟲の翅翅の色をした蟻が縦列をなして出て來るのを見た。彼等は足速に或る芝生に向つて進んでゐた、軍曹又は押伍士官がその列の傍にあつて之を指揮してゐた。彼等は各員が列を離れるのを禁じてゐるのだ（之は蟻が行列をなして進む時には誰もよく見る處である）。併しながら、私に珍らしく思はれ、私を驚かしたことは、先頭に進んでゐた者達が次第に互に接近し合つて、最早ぐるぐる廻るばかりで進行しなくなつたことである。彼等は渦巻く群集となつて往つたり來つたりするばかりで、同心圓を描いてゐるのだつた。明らかにそれは激昂を起し、各自が互に接觸し合ふことに

依つて、皆の熱情を感電し合ひながら、精力を増大する運動に相違なかつた。

突然此旋回群集が沈下する様に思はれて、影をひそめた。蟻塚があるなどと思はれる何等の兆もない此の芝生の中に、眼にもつかぬ様な小さな穴があつた、その中へ、彼等が忽ち呑み込まれて行くのを見ることが出來た。私達は、是が彼等の住居の入口なのか、彼等は自分の都市に歸つたのか……を疑つた。長くみても一分間の内に、彼等は私達に回答を與へた、私達の考への誤つてゐることを教へて呉れた。彼等は急激に浮び出て來た、各自その顎の上に一個の蛹を咬へながら。

是程の短時間で間に合つたといふことは、彼等が以前にその状況を、卵の有り處や、それらが凝せられる時や、最後に、彼等が待つてゐなければならぬ抵抗のうすらぐ時等を承知してゐたものであることを、充分物語つてゐた。恐らく之は彼等の始めての旅行ではなかつたらう。

褐色蟻が此攻略をなした時可成多數の小黑蟻が出て來た、が私は眞に憐憫の情を起さず

にはゐられなかつた。彼等は闘はうとしないのだ。彼等は驚駭の餘り呆然自失してゐるもの、様であつた。彼等は單に此誘拐者達に附纏つて、彼等を遅らせようと働いた丈であつた。さういふ譯で一匹の褐色蟻が附纏はれた時、他の體のあいてゐた褐色蟻がその荷を受取つて了つた。すると、黒人は彼を放して了つた。此光景は遂に黒人達に取つて痛ましいものであつた。彼等は何等眞剣な抵抗を試みなかつた。五百の褐色蟻は約三百の幼兒掠奪に成功した。穴から二三歩の處で、黒人達はもう跡を追はなかつた、絶望し、思ひ諦めた。是が往復に十分を要しなかつた。兩軍は餘りに匹敵しないものであつた。巨蟻軍がその哀れな隣邦小蟻軍から幼兒の貢物を奪ふといふことは、それは明らかに餘りに容易な力の濫用であつた、あまりに必然な、屢々繰返される侮辱であつた、巨人の專横であつた。人をして嫌惡の情を起さしめる此醜い事實、之を少くも吾々は理解しようではないか。それは或る種のものに取つては普通の事である。が總體的に見て、蟻の生活の一般的法則の中に於ては、それは特別な出來事であり、例外的な場合である。彼等の社會は労働の分

擔と職分の専門化といふ原理の上に成立してゐる。蟻の社會はその正規の状態にあつては、人も知る如くに、三階級を有してゐる、一は處女労働者からなる大衆で、共和國に共有な幼兒等の教育を司どり、凡て都市の仕事を行う、二は多産にして、脆弱無智な雌、三は死ぬ爲にのみ生れて來る弱小な雄。

この最初の階級、實際上に之が眞の市民である。扨て此市民の中に、諸君は産業上の二區分を、職業上の二大團體をみるだらう。一はあらゆる力仕事、重い物の運搬等をなし、遠地まで食料を求めて、危険をも顧みない。必要となれば、戦争にも赴くもの。他は殆んど常に家にあつて、食料品を受取り、食事を整へ、凡て家内の經濟をなすが、殊に此都市の主なる事業、幼兒の教育を行ふもの。

此二個の同業團、食料供給者であり戦士である團體と、乳母であり家政婦である團體とは(何れの種族に於ても)體軀は違ふが、種類、色彩、體組織を同じふしてゐる。

精神的平等は是等大軀の戦士と小軀の産業家との間に完全なるもの、様である。若し或

相違があるとするならば、恚ういふことが言ひ得るかも知れぬ、即ち、此都市を建設し、教育に依つて國民を造つてゐるかの矮小階級こそ眞に本質的な部分、生命であり、精であり、靈であると。これのみが、まさかの時にその祖國を建設し得るであらうと。

處で此處にユウベール氏は此本質的階級、蟻の都市に先天的な此要素の缺けてゐる二種類（褐色と赤色）のものを發見してゐる。若しこれが從屬階級、戰士階級が缺けてゐるといふならば、それ程驚く可きではないであらう。然るに此處では、實際にその基礎的のものが、缺除してゐる。生命の根源であり、存在の原因である。吾々はかゝる墮落せる手段に依つて褐色蟻が存在してゐるといふことよりも、むしろ、彼等を強ひて此處に到らしめたかくの如き奇怪な缺陷に驚かざるを得ない。

此處に今日殆んど説明することの不可能な神祕が存在する、けれどもそれは、種の普遍的歴史、その推移や變化の歴史が、これを繰返すことが出來るとすれば、恐らくそれを照らし顯すでもあらう。諸動物がその移轉に依つて、外的にも内的にも、その形態に於て

も、その風習に於ても、如何に變化するものであるかを誰が知らう？ 例へば、あのブルドッグの面影を、サン・ベルナルの犬や、獅子をも惱ますベルシヤの巨犬の面影を、誰かあのハバナの犬、同じ氣候の下に於てさへ、自然があつた厚ぼつたい毛皮を着せてやる程寒がりやの月足らずの犬の中に、認め得るであらうか？ 彼はそれをかくしてゐるではないか、そして一個の謎としてゐるではないか？

移植せられた動物は變形兒となり得る。

蟻はかくして、その到る所に居住し得られる此地球が彼等の移住に便利を與へてゐる丈に、自己の革命、體質上及び風習上の變化を持ち得たのである。亞米利加の美はしい氣候の下に於ては、多種のものが蜜を製造する産業を保持して來た。我國のものはそれが出來ない。従つて彼等は木虱を使役すべく餘儀なくされた、其處から或技術と進歩が起つた、あの様な家畜を飼育し、保育し、圍ふ處の産業が起つた。

或種族は進歩した、だが或種族は退歩した。私が此褐色蟻の山賊的行爲を説明しようと

するのは、即ちこれである。これは恐らく國を失ひ、風習を破壊した階級であらう、その技術を失ひ、奴隸制度といふ野蠻な絶望的手段なしには生きて行くことの出来ない墮落都市の破片であらう。彼等は、それなくしては全市民が滅亡するより外にない技術家階級、教育家階級を最早持たない。軍人生活に歸して了つた彼等は、若しあの魂を加へられることがないならば、二日と生きては行けない。彼等は其處で、自己の滅亡を怖れて、かの小さな黒い魂を取りに行く。それらこそ、彼等を正しく養ふのだ、が、同時に彼等を支配するのだ。そしてそれは單に都市の内部に於てのみならず、又外部に於てもさうである。彼等の探検旅行を決定し、又は延期し、遂には戦争を取り極める。然るに他方褐色蟻は平和の事項を處理する處か、それを理解することさへ出来ないもの、様になつて了つた。

理智の比類なき勝利よ！ 魂の打勝ちがたき力強さよ！

第十八章 蟻の戦争、都市の全滅

壓制者の刑罰とは、たゞへ彼がその被壓制者を解放しようとしても、それが容易には出来ぬといふことにある。私は、私の鶯が歌を歌つてゐる間は、彼が殆んどその籠を感じてゐないのを知つてゐる、そして、私は此監禁行爲を何の苦痛もなく行つてゐた。處がその鳴く期間が過ぎて了ふと、私は彼の悲哀を共に味つた。(如何にして彼を解放すべきか)といふ問題が常に私を襲つて来る。彼は最早飛び得ない、翅なきに近い。放たれたなら、間もなく死ぬでもあらう。彼が巴里の大きな部屋の内や、此處フォンテエヌプロオの小庭の中に得てゐる自由とは、實際に何の役にも立たぬものである。彼にはそわが殆んど用をなさない、いつまで経つても、彼はすぐりの中に隠れたまゝ、小首を傾けて、耳をそば立て、ゐるばかりである。彼に聽えるもの、頬白達の活潑な歌、愛と母との聲、それらは彼の悲しみを一層増大するものに違ひない。此處、開けた空氣の中、大空の下、比較的自

由の中にありながら、彼は食慾を失つてゐた、もう食を取らうと欲しなかつた。吾々は彼にその本来の攝生をするように勧めた、森林の内に彼を養つて呉れる昆虫の食料を取ることを勧めた。又しても一個の困難事だ。誰か貪り食ふ爲の生餌を捕へることに嫌悪を感じないであらうか？ 吾々は何れかと云へば、彼に、本来の昆虫、昆虫の卵、睡つてゐる昆虫の蛹を、與へることを好んだ。吾々はそれをフォンテエヌプロオに求めた、其處は、我が封建種族の雉子といふ殿様が、蟻の卵より外に何者をも召上がらないといふ處である。

其處で、六月八日の夕刻、私は此森から、樹木の小枝の混つた、殊に北方の樹木の小破片や樅の針や又はビンの様に尖つた小さな葉の混じつた一大土塊を取寄せた。

その中には様々の大いさと様々の形態をした住民が雜然としてゐた、卵がある、幼蟲がある、蛹がある、極く微細な労働者がゐる、保護役の戦士らしい大蟻がある、最後に、戀愛時の翅即ち結婚の晴衣を着けたばかりの花嫁までが居た。かくて之はかの都市の完全な

標本であつた。その茶色が、つた市民は、凡て其胸部に同じ暗赤色の斑點を持つてゐた。その蟻としての階級及び職能に就いては、例へ如何に此都市が轉覆されてゐようとも、その住居そのものに依つて、彼等の特徴は容易く見別けられた。これは木工蟻であつた、樹木の小枝を以てその上部建築物を支持する種類である。

かくの如き都市の大變動に際會しながら、是等の市民は何等落膽した處がなかつた。彼等は彼等の仕事を繼續してゐた。その主なる仕事は、餘りに強烈な日光からその卵や蛹を救出することであつた。土地の全體がひっくり返つて了つたので、それらは彼等の地下室から、表面へ投げ出されてゐた。矮小な蟻達は、活潑にその仕事に携つてゐた。大きな蟻達は往つたり來たりして巡察をするのだつた、そして、分裂した都市の一片が含まれてゐる此土の大きな鉢の周圍をぐるぐる廻つてゐた。彼等は確固たる歩取りで歩いた、如何なるもの、前にも怯まなかつた。我々人間をさへも彼等は怖れなかつた。私が彼等の前に或障礙物、一本の小枝とか指とかを置く時、彼等は腰を下ろして、巧みにその小さな手を操縦

した、そして子猫のやる様にそれを叩くのであつた。

此土塊の周圍巡察中に、彼等は、此庭の住民である黒灰色の蟻にばつたり出會した。此灰色蟻は此處を領土として、此地下に大きな建物を持つてゐる石工蟻であつた。その唾液を以て、土壤をコンクリート附にし、その蟻酸を以て、之を乾燥し、衛生設備を施してゐるものであつた。

彼等にとつての好適地は、薔薇、林檎、桃等の彼等が蜜を攝取することの出来る木虱といふ牧獸を豊富に提供して呉れる處である。

此出會は睦じいむのではなかつた。たゞへ木工の大蟻がその同族の中に可成小さな體の者を含んでゐるとは云へ、彼等は此等の黒蟻をその長い脚と、胸部の赤い星とに依つて充分見分けてゐた。彼等は涙を持たなかつた。恐らく、彼等は、これらうろついてゐる黒人達を、自分達、今し方到着したばかりの移住民を探偵し、之を罪に落さう爲に送られた間牒だと、疑つたのであらう。要するに、大きな木工蟻達が小さな石工蟻達を殺して了つ

た。

此行動が恐る可き、又收拾すべからざら結果を生んだ。その土塊は不幸にも、植木屋の絶望と蟻の歡喜とを滴してゐた程木虱に覆れた林檎の樹の近くにあつた。我が石工達は此貴重な蜜の牧獸を獲得したばかりで、その木の根本の處、即ち此大營利事業の管内に陣取つてゐた。彼等の國民軍が地下には無限にゐたのだ。

殺害は十一時に始まつた。十一時十五分には之が黒蟻の全市民に報告せられ、彼等は激昂した、彼等は立合つた、地下室を昇つて、あらゆる門から飛び出して來た。黒い長々しい無数の列の下に地上の砂は覆はれた。吾々の通路は眞黒く動いた。此小庭に直射してゐた日光は此大軍を刺激し、益々彼等の進軍を速めるばかりであつた。彼等は常に地下に動いてゐるのである、彼等の體軀は非常に鋭く日光を感じるに違ひない。此熱氣の烈しさ、殊に、巨人の侵略者が我が家族を損ふたといふ恐怖等が、彼等を大膽にも死の前に赴かした。

死、それは動かし難いことのように吾々には思はれた、何となれば、木工の大蟻は何れとて、その身の丈から、その體の大きさから、正に小さな石工蟻の八匹乃至十匹に匹敵してゐる。初めての仕合に於て、吾々は既に大きいのが小さいのを唯一撃の下に撲殺したのを見てゐた。

石工達は数があつた。だが何うだらう？ 若し第一列のものが捕へられ、打倒され、次に第二、第三とやられたら、若し軍隊の進軍が新しい犠牲を供給するに過ぎなかつたなら？ これが私達の心配であつた。私達は皆此庭園の小さな土着の民の爲に心配した。私達が連れ來つた外國人、誤解した兇暴な國民の闖人に惱まされてゐる、彼等は既に何等の挑戦なしに、土地の住民に殺害の先鞭をつけてゐるではないか。

私は、之は告白して置かねばなるまい、私は肉體的な力のみを比較してをつた、そして精神的な力は勘定に入れてはゐなかつた。

吾々は、その最初の衝突に於て、小黑蟻側のでなみ、手練をみて、驚かずにはゐられな

かつた。六匹づつが一隊をなして、彼等は大蟻の一匹を捕へた、各自が一本の脚を抑へつけて動けなくし、猶二匹のものがその脊に登つて、感鬚に飛び附いて最う弛めなかつた。かくて凡ての肢體を縛せられた巨人はその體を動かすことが出来なくなつてゐた。彼は氣力を失ひ、呆然として、最早その力の限りなき優越性をも意識しないもの、様であつた。此時、他のものが來て、上から下から、何の危険もなしに、彼を突刺してゐた。

眼の前に見る此光景は恐ろしいものであつた。小蟻の英雄的な行爲及びその狂熱とに依つて吾々を惹着けてゐた或る興味は恐怖の念を起さしめた。此等の捕縛された哀れな巨人達が右に左に慘酷にも引摺り廻されて、恰も大海の中を泳ぐ様に、憤怒の波の中を泳ぐのを、哀れな屠所の羊の様に、盲目、無力、無抵抗で無茶苦茶に引摺り廻されるのを、憐憫の情なしに見ることは不可能であつた。

吾々は、勿論、彼等を離さうと望んだ。

だが何うして引離すか？ 吾々は無限数の前につた。人間の力は、かゝる多數者の前

に息絶えて了ふであらう。吾々は、必要とあれば世界的大洪水を来さしめ、一瞬間に之を溺死させることは出来た。けれどもそれで充分ではなかつたらう。彼等は取り逃しはしない。激流が之を流さうと、虐殺は決行されたに違ひないのだ。唯一の救助法、だが惨酷なものだ、悪どころか最悪のものだ、それは、藁の力を供りて、兩軍を、征服者被征服者を共に焼くことであつたらう。

吾々を最も驚かしたことは、實際に於ては、大蟻の内で縛せられたものはほんの僅少なものに過ぎなかつたといふことだ。若し猶自由な體にあつたものが此攻撃者達の上に落されたならば、彼等は、容易に、あの駭く可き殺戮をなすことが出来た。彼等の行動はそれ程敏速で、一撃の下に死を與へてゐた。然るに、彼等はそれに氣が附かなかつた。彼等は盲目的に走つてゐた、そして敵の密集軍の中へ、危険そのもの、奥へ、まがふ方なく逃げ込んだのである。噫呼！ 彼等は唯に征服された許りでなく、發狂せるもの、様であつた。小蟻達が我が家、我が領土内にゐることを意識して、非常に氣丈夫な様子をしてゐる

るに引換へ、根柢を失つた絶望的な滅落都市の片々に過ぎない之等異國の大蟻達は、移殖されたばかりの此國に就いて何等知る處がなかつた、我が身に取つては凡てが敵であり陥穽であつて、何等たよるとならないものであることを感じてゐた。……故國を滅亡せられ、その守護神を失へる國民の哀れ痛ましき状態よ！

噫呼！私を 恕せ！ 私達自身も同じ恐怖を以て、是等死の軍が、黒い小ぼけな頭を持つた恐ろしい軍隊が、あの不幸な土塊を入れた鉢を全く乗越へて、狹隘な、熱苦しい、呼吸も窒りさうな所へ、場所もない程に、物狂ほしく、互に重なり合ひながら登つて來るのを見ねばならなかつた。大蟻の敗北が確定するに従つて、恐る可き食欲が黒蟻に起つて來てゐた。私はその瞬間を見た。……それはシーンの一變であつた。彼等の沈黙の、だが恐ろしく雄辯な行爲の中に、吾々は慙う云ふ叫びを聞いた、(奴等の子供等は脂ぎつてゐるぞ！)

貪慾な瘦せこけた此軍隊は、子供等の上に飛びか、つて行つた。優越種の此子供等は可

成重かつた。おまけに、その蛹の細長い覆ひは周囲を取圍んだものに取つて手のかけ處のないものであつた。二匹、三匹、四匹と小黑蟻が協力してやつとその一個丈を土鉢の底から、釉薬を施した壁の上に乗せることが出来た程だ。彼等は此時急に恐る可き解決法を取つた。それは此産衣の中から裸體の子供を引き出して連れて行くことであつた。面倒な引出しだ。何となれば、子供は確りと密着してゐるから、そして、疊み込まれた四肢はその間にしつかりと纏着けられてゐるからだ。従つて此亂暴な突急な脱被は之を傷害し、四裂するに非ざれば行ひ得ないことであつた。彼等は、これをやつつけた、それらは引裂かれて、びくびく動くのであつた。

吾々は始め子供達を捕へた時には、單に奴隸掠奪の光景なりと信じてゐた。それは人類に於ても蟻に於ても餘りに普通のことではなかつたか。然るにこゝに致つて、それが全く別種の問題であることが分つた。幼児に取つては全く生命の條件である處の此覆から、かくも慘酷に彼等を引出すことに於て、彼等が最早幼児等の生死を顧慮してゐないのだとい

ふことが、餘りに明白に公表されてゐた。肉體なのだ、彼等が運んで行くのは肉そのものである。留守をしてゐる若者への美味しい餌である。脂ぎつた子供が、生きながらに怒り狂へる彼等の瘦せた子供達へ引渡されるのである。

此光景の恐ろしさを理解しようとするれば、蟻の大きな卵といふものが如何なるものであるかを知らねばならない。卵と呼ぶのは適當ではない、それらは蟻の蛹である、その繊細な、柔軟な、まだねつとりとした體を、此ヴェールの中にもたせてゐる小さな、立派に體制を持つた蟻である。彼等は之から體を固め、それから着色する爲にヴェールの中に止まつてゐるにすぎない。

試みにそれが完全な昆蟲となつて出る少し前に、之を開けて見給へ、人間の胎兒と同じく、自分の體を折疊んでゐるまだ白っぽい一個の動物を、諸君は見ると、それを開け擴げると、それは未來の蟻の姿を立派に示す。が、性質は不思議な差異を見せてゐる。その頭は全く無感覺だ。耳の様な恰好をしてゐるその觸覺を上げてみると、その若々しい白

い頭部は、丁度子兎の耳の様である。二個の黒點となつてゐるその眼のみがもう立派にそれと認められて、着色の近づいてゐることを示してゐる。とは云へ、かゝる弱々しい、ただ何等發育をしてゐない、ほんとに可憐な小さな動物が、一週間の後には、あれ程精力的な、生命力の著しい黒い存在となつて、燃える様な活動力と労働との狂熱を以て大地を走り廻る、といふことを豫め物語る様な何等の兆も未だ現はれてはゐない。

かゝる状態に於ける、乳氣の多い、滋養分に充ちた此蟻の蛹が、烏やその他あらゆる動物の強烈な食欲をそゝる御馳走であることは、容易に理解の出来ることである。

私は孵化期に近い蛹を一個しか開いたことはない。だがそれで充分であつた。十二倍に見える擴大鏡で之を見たところは、非常に悲痛なものであつた。形は完全で、既に腹部が黒く、胸部が黄色かつた、頭は智力を持つてゐるが、生白くて、黒に黄の縞があつた。未だ重く弱々しい此頭は、眩惑されてゐる様に、左右に垂れて、苦痛と夢中との不思議な様子を示してゐた。然しながら、彼は未知の世界に突進んで行かうとして、ひつつき勝な自

分の手足を頻りに動かさうと努力してゐた。觸感には既に完全なもので、新世界を探らうとして盛に活動してゐた。脳髓と密接な關係のある此器官は、其腦裡の不安と動搖とを充分物語つてゐた。彼の最も大きな當惑は、その二本の腕を自由にし得ないことであつた。それは、何か知らん、恐らく白い血でもあらうか、さうしたものでひついてゐた。此哀れな、既に怖れを抱いて用心深くなつてゐる小さな動物が、何の防禦の手段をも持ち得ないで、頻りに血みどろの腕を引張つてゐるのを見ては、思はず汗を流さずにはゐられなかつた。

私は以上や、長々しい説明をして來たが、それは、吾々の眼がともすればなんでもないもの、様に見逃し易い是等の丸いものに、何故かの蟻達が熱狂的興味を持つたかを理解して貰ひたい爲である。彼等は此透明な繊細な織物の中に、痛ましい二種の形態をして子供がびくびくしてゐるのを感じてゐた、或は無感覺な、未發達な、まだ夢見てゐる動物として、或は既に形態を有し、智覺を俱へ、凡てを悟るが、防禦の術を知らない、そして日の

目を見る以前に於て既に、生活のあらゆる心配煩悶を持つてゐるでもあらう動物として。

此昆蟲の幼兒に取つて最も苦痛な壓迫は、急激な寒さで、少くも裸體で空氣と光線とにさらされるといふことである。それは彼等に取つて非常にいとほしい、苦痛事である、或種に於ては、之が彼等の技術や、その最も天才的な發明の原因となる程である。此透明な小さな産衣の中にある蟻の卵及び蛹、猶、産衣を奪はれたばかりの幼蟲は、極端な敏感さであらゆる雰圍氣の變化を感じる。そこで、幼兒の肉體を寒氣や濕氣や勿論極端な暑氣から守る爲には、巧みに温度が調節されてゐる三十乃至四十といふ階段を或は上へ、或は下へと彼等を連れて行くといふ様な繁雜な不斷の注意を、彼等の乳母達がなすに至つたのである。温度一度の上下、それが彼に取つては生となり死となるのである。

女王達にも優る暮しをし、極端な甘やかして、これ迄かしづかれて來た是等の愛の娘達が、あらあらしくも死刑執行者の手に衣服を脱がせられ、鋭い齒牙にか、つて生皮を剥れ、眞裸にされるとは何といふ慘酷な、何といふ悲痛な變化であらう。突然焼けつく様な

日光の下に投げだされ、粗砂のごつごつした面の上を引摺られ、押しこくられ、轉がされて、その赤裸の肌は、その刺戟、衝突、無殘なもんどりを、如何に鋭く感ぜしことぞ、その兇暴な敵はそれを容赦してはゐなかつた。

狂暴な敵軍が狂熱の餘り占領都市の墳墓の死者までもあばいたといふことは、吾々も知つてゐる。けれども此處では、生きたるもの、發掘、此等の無邪氣な、損傷され易い者、一寸觸れること丈でも既に非常な痛手となる様な、未だ皮膚を持たぬ哀れな肉體の生肉を剥ぐといふ生きたるもの、發掘に、吾々は臨んでゐる。

此住民とその幼兒との物凄い死刑執行は繰返し繰返し行はれて、やつと午後三時になつて殆んど終了した。都市は、あらゆる意味に於て、掠奪され、市民は根絶された、そしてその將來の復活の望も絶たれてゐた。

だが私達は信じた、或る落人が猶隠れてゐるかも知れない、そしてもし吾々が此等の征服者を此荒廢せる都市と共に庭の外の物置の中に移して了ふならば、恐らく、彼等は此廢

墟を捨て去るであらう。征服者の心には、彼等の家族の考が眼醒めて来るであらう、彼等以外にその家族を養ふ者はゐないのだからと。そして之は實際に實現された。

六月十日の朝、吾々は、庭の他の端にある彼等の住居へ通ずる路の上に全く彼等の姿の消えたのを見た、だが被征服者の運命は決せられたらしかつた、沈黙の死の都市は一個の墓地に過ぎなかつた。其處では、散亂せる死體と共に、死んだ様な木材や、北方樹木の古ぼけた花や、曾ては青々としてゐた松や樅の掉ましい針葉など、都市と共に死を示してゐるばかりである。

私は告白するが、此の復讐——その原因又は口實となつた行爲に對して餘りに甚すぎた此の復讐は、私を甚しく憤激せしめてゐた。私の胸は、次第に此等野蠻な小黑蟻の爲に狂亂せしめられてゐた。

彼等が猶執深く此の廢墟の上をうろついてゐるのを見ると、私は我武者等に彼等をはじき飛ばしてやつた。是等の黒蟻等は、もう發狂したに違ひないのだと私は思つた。だか

らこんな危険を冒して、憤激してゐるのだ、そしてその最大勇氣を振つてゐるのだ、と私は靜かに考へた、けれども矢張無駄だ。私の腹は納まらなかつた。これは野蠻な、慘酷な、だが、勇敢な種族である、恰も、ミシシッピーやカナダの森林に曾て住んでゐた復讐好きな英雄、イロコア、ユウロン族と等しい、とも考へた。が慚うした立派な理由も私を鎮めては呉れなかつた。私は、心の底からその重大さを餘りに感じてゐた。彼等を粉碎したくはなかつたが、私は告白する、若しも此の兇惡な黒蟻が時に私の出す足の下になる時、私は敢てそれを構はなかつた。

虚になつた不幸な鉢が私を捕へてゐた、常に私の心頭に浮んで來るのであつた。十一日の夕刻、私達は猶其處にゐた、地に坐つて、顎を両手に埋めて、冥想に耽つてゐた。私達の凝視はその奥底に注がれてゐた。完全な死黙の上に、私達は何か生命の兆を、未だ凡てが終つてはいないといふことを示す何者かを、欲してひつついてゐた。此の動かざる意志が降神の力を持つたものらしい。恰も私達の祈願が此の半片の都市から或る哀れな魂を日

の下に呼び返したかの如く、九死に一生を得てゐた犠牲者の一人が現はれた、そして、此の死の地の外へ身を急がした、走つた……そして私達は彼が一個の搖籃を負ふてゐるのを認めた。

夜が來てゐた。そして彼は全くの外國の地域にあつた、敵軍に圍はれた深い々々敵地にあつた。隠れ家と信ずることの出来る様な、稀にある穴は、正に黒蟻等の地獄の口であつた。不幸な落人は、その不幸を一層過大ならしめてゐる子供といふ重荷を負ふて、狂へる如く、何處へとも知らずに走つてゐた。私は彼を眼を以て、心を以て追ふてゐた。けれども暗闇が彼を昏まして了つた。

第十九章 蜂(ゲープ)の狂熱

夏の日など、窓から蜂が舞ひ込んで、あの挑戰的な、威嚇的な、力強いぶうんぶうんをやられると、誰でもはつと用心する。子供は恐がる、女は仕事の手を置く、男でさへ眼を擧げる。(無禮な、無作法な蜂め!)そして、彼はハンカチを取つて武裝する。

處が一方此の傲慢な動物は、隅々を飛び廻り、輕蔑的なながし眼を部屋中に素速く投けて了ふと、かゝる不あしらひを氣にかけもしないで、甚しいもの音を立て、出て行く。彼が此處で考へたことの凡ては、慙ふだ、(哀れな家だ! 果物もなけりや、蜘蛛もゐないし、蠅もゐない、一片の肉さへもありません!)

其處で彼はお隣の肉屋の俎の上に天降る、(肉屋どん、俺はお前のお華客といふものだ。お前の處で俺はたんまり供給に預りたいんだ。ぐずぐずするなよ、けちんぼ野郎、肉のいゝところを切つてお呉れ、さうすりや俺もお前の奉公をすらあ。俺はお前の處の蠅を

殺すよ。さあ、契約を結ばう、そして朋友にならうぢやないか。お互に殺す爲に生れて來てゐるんだあね。」

人間界に於ける鈍重な諸動物は、此のゲープの行動に比べれば皆著しく顰蹙すべきものである。彼は活動する、口は利かない。が若し彼が語を發し得るとすれば、その辯明は簡單なものであらう。一語以て事が足りる。即ちこれは、自然が時間を限つて了ふといふ恐ろしい運命を負はした處の動物なのだ。時間といへば、數間時しか生きてゐないといふ蟬のことが思ひ出される。何等の仕事をしなぬものに取つてはそれで充分である。眞の蟬とは正にゲープのことである。彼は短い夏の内に(六ヶ月だが、活動期は四ヶ月)單に生れ、愛し、死ぬといふ個人生活の環を完成するのみでなく、その最も困難なもの、昆虫が持ち得る最も完全な生活、長い社會生活の環を完成するのだ。蜜蜂が數年の長期に渡つて成熟する處のものを、ゲープは、束の間に實現しなければならぬ。蜜蜂以上のものだ! 何となれば、蜜蜂は蜜蜂籠とか、岩石の洞とか、樹木の幹とか、或る前以て用意さ

れた家の中にその蜜房を造るのだが、ゲープに至つては、さうしたもの、外に都市そのものを造り、その保壘をも即坐に造らねばならないからである。

四ヶ月、凡てを創造する爲に、一市民を糾合し、解體する爲に——非常に組織立つた市民を創造するために。

見給へ、八十年の間に時がないなどといふ懶惰な種族を、かゝるものを輕蔑すべきであることを知り給へ。凡ては相對的な事だ。彼のなめくじの如きが、若し數百年を必要とするなど、云へば、寸豪の時間も決してないのだ。英雄的な活動力の前には、大意志、大精神力の前には、常に時間は與へられるものである。

ゲープは死ぬ。三萬の魂を藏せるその都市は——天才と勇氣との雷の如き爆發に依つて、革命的に瞬時に造られたるその都市は、存在する、そして彼の存在を語る。確固として、嚴然として、意識的創造のまゝに、恰も久遠を望むがように。

出發點から行くことにしよう。冬、全市民の潰滅に生きながらへた哀れな羽蟲が塵まみ

れになつてその潜伏所から出て来る。神の恵よ、こは春だ。彼は日向ぼつこにでも行くのか？ 否、一日も休憩どころではない。最初の仕事は何だ？ 愛だ、燃えあがる愛を以て素早く、目的物に向ふのだ。その途すがら、全市民を創造せんとする生命力を取るのだ。何の障碍があり得よう、社會的大目的に直進する飛躍の愛だ。

孤獨で、野生的で、理想と希望とを持つた、此の未來の國の母は、先づ第一に市民を、數千の労働家を造る。昆虫に於ては凡て労働家は女性であることを吾々は既に學んだ。其處で彼女達は労働者である。が仕事に對する峻烈な慾求が、彼女達に性を廢止せしめる。彼女等は偉大な愛を以て愛する。峻嚴な處女達よ、彼女等は、都市以外に夫といふものをば持たない。

燃ゆる様な仕事の力は、此の母から此の娘達に通じてゐる。彼女の仕事は産出することであつた、彼女等のは建築することである。

場所と氣候とに従つて、族、種、仕事などは變る。此處では、地中に洞を掘つて建物を

置く、然も大地から絶縁して、濕氣を防ぐ。彼處では、如何なる雨も物ともしない様な、強い、固い厚紙で造つたものを空中に懸垂する。此の厚紙を造る爲には、森の中を飛び廻つて、長い間濕つて立派に準備の出來てゐる樹木を選ぶ。それは恰も吾々が大麻を水漬にする様に、既に大自然が豫め水漬にしたものである。其の中を、鋭い尖つた齒(といふのは、此處では、花に接吻する爲に出來た蜜蜂の可憐な吸管ではないから)を以て、深く噛み込み、その小纖維を剝りとり、吾々が亞麻布に於てする様に、綿織紙とし、それを力強い舌を以て押ねあける。そして粘着性な唾液の混へられた此のバート(薄板)に伸べる。閑ちられた齒が壓搾器の如く、此の仕事を完成する。これで厚紙の要素は用意された。

其處で第二の技術が始められる。製紙工は石工となる。彼には鏝の用に供する海狸の尾はない、が亞米利加のゲーブには脚部の偏平部(パレット)で鏝の作業をしてゐるものがある。ギアナの作業は同じではない。ギアナの石工は壁を造つてしまふと、一連の天井を張り渡すばかりである。彼は、此の比較的乾燥した國に於ては、吾々人間の家屋の型に従つてゐる。然

しながら歐洲の石工は、夏期中屢々長期の降雨を有する濕潤な氣候の下に厚紙建築を行ふので、他の設計法を採用する、即ち家の中の家だ。一個の蜜蜂を、それを包む覆ひから完全に絶縁する。これは、此の燃ゆる様な、そして寒がりやの市民を最もよく支持するといふことで、慙うして、彼等の焔を充分に保たなければならぬのである。

かくくゝの外境があれば従つてかくくゝの内在がある。かくくゝの家屋があれば従つてかくくゝの住民がある。吾々は未だ、人間界に於ては、住居が吾々の風習状態に如何に影響してゐるかを、充分には知つてゐない。かゝる壁の二重構造、その二重な強固な圍廓の中に密集せる一市民の堅固な覆ひといふものが、此の都市の統一性をなすものでないとは言へないであらう。

も一つの特徴、小さな、と言はふか？ 否、嚴肅な觀察者に取つては大なる特徴である。それは此の都市が二個の戸口を持つといふことだ。その一方から這り、他方から出るのである。かくて凡ての混雜が除かれる。鉢合せをするなどといふことは絶対にない。こ

れは、全市民が時間を節約し、敏速に仕事を行はんとする爲である。ロンドンではゲープの様によつてゐる。此處は往く人、彼處は來る人。

だが、元に歸つて、何故か、る建築をなすのであらうか？ かくも頑健な、そしてかくも烈しい生命力を有する此の動物が、では外氣を恐れるのであらうか？ 多くの繊弱な昆虫よりも、かの絲織の宿より持たない、又は木の葉にさへ生活してゐる神經質な蜘蛛などよりも？ 此處に高等昆蟲に對する生命の高い神秘がある。地上に地下に蟻の普遍的天才をなす處のものがある。蜜蜂のあの活動力、あの根氣強い労働、あの勤儉をなす處のものがある。然らばそは何か？ 未來者への愛である。愛する處のものを永久不滅にせんとする祈願である。彼等の愛の凡ては、その子供にある。

子供を、未來を、愛するのである。時間の爲に、未だ存在しないもの、爲に働く。働いて、働いて、働き盡して死ぬ。その子孫が烈しい労働をしなくてもすむようにと、そして、例へ如何なるものであらうとも、その社會の尙い理想を彼等が確實に生きて行くよう

にと。吾々は時間を充分に有するもの、中には、かゝる生命の使用を、例へば人類とか、蜜蜂とかの如くに、充分理解することが出来る。だが、時を有せざるもの、今宵死に行くもの、その人がわがものにならない處の時を愛するのである、その人が後に来る可き生命の爲に、我が短い生命を獻するのである。明日の子供の爲に、我が唯一特別の日を犠牲にする。これこそゲーブ獨特のものである。獨創的な、そして崇高なものである。

一分と雖も消失を許さない。母は彼等の負擔を絶えず増大する。彼女は其の労働者達の外に、何等の仕事もしない雄を造り出す、その小さな職分は、甚しく短期間で、彼等は其の無爲の爲に何等の寵遇をも受けない。昆蟲類中でも嚴肅な、悲劇的な是等ゲーブの市民へ、大自然は、一つの滑稽な氣晴に依つて一瞬間を陽氣にする爲に、是等哀れな小さな、一般にづんぐりな腹の膨らがつた雄を附與したのである、無邪氣な小フォルスタッフ (John Falstaff 1378—1459 英國將校ヘンリ五世のお相手として遊蕩をこゝとした、シックスビヤは彼を捕へて厚顔無智な遊蕩兒を描いた) だ、何等價値のない男女官の様に守られてゐる。

此カリカチュールは蜜蜂の雄に於て完成されてゐる。彼等は、自分達が外部に收拾することも、内部に建築することも知らぬものであることを示しながら、恰も人間で言へば煙草ばかり吹かしてゐる若者の様に、蜜房の前で齧舌を弄して時を過してゐる。ゲーブに於ては、かゝる雄さへ、例へ彼等が如何に懶惰であらうとも、猶、敢て無爲に過さうとはしない程、その生活が緊張、熱烈、峻嚴である。何の楽しみもなく、そして、雄の持たない剣を持つてゐる女達は、此の剣を振り廻して雄どもを叱るといふ様なことをやりかねないであらう。そこで彼等も働かないで働くことを考へ出してゐる。彼等は何かやる風をする、内部の掃除とか何とかいふ一寸した片附けごとをする。若しも誰か死んだりすると、その埋葬が彼の仕事の口實の役に立つ。軽い荷を持ち上げるなど、いふことが彼等にも出来る、彼等は多勢でそれに取りかゝる。要するに彼等は非常に滑稽である。そして彼等の恐るべき仲間、相手は、私は確言するが、それを見て嘲笑してゐる。

實際彼等の爲すべきことは無限だ。養ふ可き二萬乃至三萬の口數、それは巨大な家族で

ある。若しも、彼等が蜜蜂の穏なしい活動性ばかりを持つてゐたならば、その都市は饑餓に死ぬことであらう。彼等には、激烈な、熱狂的な、兇暴な、敏速がなければならないのだ。恐ろしい食食の氣色がなければならないのである。だが、彼等の力となつてゐるもの、彼等を一寸觀察するかにしないに、直ちに感ぜられる處のものは、彼等があらゆる他の動物に對して持つてゐるその壯大な傲慢さ、優越的な輕蔑である、此動物は我物なりといふ彼等の強い信念である。實際、若し吾々が彼等の精力、これに比較すれば、獅子や虎も羊の族に過ぎない様なあの精力や、年毎になす即興的建設に要する無限大な努力や、最後に、公共的幸福に對する絶對的な歸依等を考へてみるならば、吾々は比較的にみて動物界中にこれ程の強者を、これ程自己尊敬の權利を持つ處のものを、殆んど見ない。

然しながら、吾々近代人の感情は、古代道德たる暴力を認容すべく、或苦痛を感ぜずにはゐない、彼等の都市に對する愛情は、その際限を知らないで、罪惡にまで走つてゐる。誰か蜜蜂を追撃する彼等の兇惡な熱情を見ないであらうか！ 勿論蜜を造ることの出来る

種類のゲープもある。然しながらそれは暖國に於てゐる、冬を知らない美しい氣候はゲープをして時の餘裕を持たしめて、平和な仕事に従事せしめてゐる。此地にはさうしたものはゐない。六ヶ月に切詰められてゐる彼等の生活は、彼等に慘酷な單純化の手段を求めしめてゐる。子供等の爲には蜜が必要である。で、彼等は蜜蜂を追撃する、彼を捕へる。そして、簡単な一本の絲に過ぎない様なすなりとした我が體の尾端を曲けて、此捕虜の下の方から劍を刺す。劍を刺して了ふと、彼等はその捕虜を三部に噛み切つて了う、頭部を其處へ捨て、了う、胸部は猶いつまでもびくびく動いてゐる。だが蜜の充滿してゐるその腹部、それを此野蠻人は持つて歸つて、子供等に與へる。

何の悔恨もない。他人の死の如き、明日は自分自身が死んで行くことを知つてゐる彼には、明らかに何のことでもない。

といふのは何のことか？ トウリッド(Tauride露國)の處女達は、自然が彼女等の上にその重い手と冬の擯斥すべき彈丸とを加へて來るのを待つてゐないといふことである。彼等

は剣を帯びてゐる、彼等は剣に依つて死なうとする。その都市は大虐殺に依つて終るのである、子供等、近來あれほどつくしまれた、そして猶いつくしまれてゐる子供等が殺されるのだ。寒氣と饑餓とに明日は死ぬであらう若い子供等に、其姉妹達や伯母達や又優しい乳母達は少くも愛するもの、手に依つて死ぬといふ慈悲を與へる。此最後の賜、短い死は、それを要求しようなどと考へてゐない不幸の者にも、役のない小さな雄にも又遅く生れて、冬に打勝つて行く丈の力強い質を見せることの出来ない若い労働者達等多くの者に、何の惜しげもなく、與へられる。此英雄的な種族が人間の燻つた屋根の下に屈辱的な歡待を求めてゐるなどと言はるること勿れ、少くとも長く生きようとして、蜘蛛の貯肉所にその哀れな脱殻をさらしてゐるなどと言はる、こと勿れ。然り、子供等よ！ 然り！ 姉妹よ！ 死ね。我が共和國は不滅である。我々の如き、年毎の奇蹟と、自然の偶然とに寵を得たるものは、凡てを再興することが出来る。唯一人残らんか、それで充分である。世界が潰滅するならばせよ、一つの偉大なる心臓は以て一世界を再建するに足るであらう。

第二十章 ヴィルジルの蜜蜂

あらゆる近代精神はヴィルジル (Virgile 70—19av. J.c. 羅馬の詩聖)の無智に打勝つた。死から生命を取出し、犠牲に獻じられた牝牛の腹から蜜蜂を生れしめるといふアリステ (Aristotele)の子、人間に蜜蜂飼育を教へし人。彼が誤つてウールデイスの死を招いた時、彼女のニンフ達は彼の蜜蜂を殺して其敵を討つた。アリステ此處に於てウールデイスの死靈を慰む可く四匹の犠牲を殺した、その牛の臟腑より一群の蜜蜂出でたりと、希臘神話。)に關する彼の偶話に打勝つた。私、私はまだ曾つてその詩を笑つたことがない。私は知つてゐる、私は感じてゐる、此大詩聖の凡ての言葉は非常に重大な價值を有してゐる、占卜的であり、法皇者の言とも云ふ可き權威を持つてゐる、といふことを。あの「田園詩」の第四卷は殊に聖い作であつた、心の最も深い處から湧き出でた聖い作であつた。それは不幸と友情とに捧げられた敬虔な尊敬であつた、ヴィルジルの最も親しい友、ガリュ

ウスといふ追放人の讃辭であつた。此讃辭は勿論深慮なメセエヌ(Méteune)當時の騎士にして有名な藝術擁護者)に依つて抹殺された。そしてヴィルジルは其處にかの蜂蜜の復活を置き換へた、かの永久不滅の歌を。それは自然の變遷の神祕の中に、吾々の最も高い希望を含んでゐる、その死は死に了る勿れ、更新復活の生命たれ! といふ希望を。

彼は、一友の名に専念してをつた詩の此神聖な箇所にて、一篇の通俗的な物語を作るといふ様な空しい快樂を貪つてゐたのだらうか? 私は決してさうとは思はない。此偶話、若しこれが偶話だとすれば、此偶話は何等かの嚴肅な根柢を、眞理の一面を持つてゐるに違ひないのだ。此處に於てか、これは、ローマのお上品な人氣物、ホーレス(Horace)と同じく羅馬の大詩人)の如き、都風の讃歌者、浮華輕薄な詩人ではない。これはオウギュスト朝廷の美しい即興詩人、神の愛に裏切つた謹みのない輕薄なオヴィド(Ovide) 43 av. J.c.—16ap. J.c.)ではない。ヴィルジルは大地の子である、古代伊太利の古風な野人の高尚な、天真爛漫な型だ、宗教上の質疑者だ、注意深い、そして淳朴な、自然の

神祕の代辯者だ、たとへ言葉の上に誤つてゐるようとも、たとへ其名の與へ方が誤つてゐるようとも、このことが言へないといふことはない。だが事實といふことになれば、それは別問題である。彼が言つたことは、彼が見たことであると、私は信ずる。

或る偶然が私を同じ路の上に置いた。一八五六年の十月二十八日、私達は冬の來る前に、家族の墓所にお参りしようとして、ペール・シェーズの墓地に登つた。此墓は我が父と、その孫とを入れてゐるのである。此兒は現世紀の前半が終つたその年に私に與へられた、そして私は國民覺醒の宗教的希望の中に、彼をラザール(Lazarus)聖ラザールはイエスに依つて復活した人)と命名したのであつた。私は彼の面に、私の教育事業の最後の瞬間まで私の胸を充たしてゐた様々な愛の籠つた強健な思想の閃きを見るものと信じてゐたのだつた。私の希望の空しさよ! 此の私の花は——私が、自分に取つて遅く打開かれた力強い生命力を以て培はんと欲した此花は、彼が生れ出づるや否や影を消した。そして私は、我が子を我が父の足下に置かなければならなかつたのである。死して既に四ヶ年。其

時私が植えた二本の絲杉は此惡質の粘土の中にあつて、慙うして僅かな年月の内に、驚く可き成長を遂げてゐた。私の二倍三倍の高さに達して、それ等は、常に大空を指ささんとする、豊かな若々しい葉を持つた力強い枝を、張つてゐる。それらを強制的に引下げんか、それらは昂然として、力強く信じ難い活氣を以て、再び起きあがつて了う。恰も是等の木々が、此大地の中から、私がこゝへ埋没した處のものを、私の過去の尙い寶を、私の制しがたい希望を、吸収せるかの様に。

慙うした瞑想の内に、丘に登りながら、上の方の小徑の中に在るその墓に達する前に、私は次の觀察をしてゐた、即ち、此美しくも悲しい場所は屢々訪れる機會をあれ程もつてゐて、曾つては是等の死者に對しての最も精勤な參詣者であつたにも拘はらず、私は曾つてペール・ジューズの昆蟲といふものを殆んど見たことがなかつたといふことである。花盛りの時期に、凡てが花に蔽はれてゐる時でさへ、そして、古い打捨てになつた無數の墓そのものまでが薔薇の中に隠されて了ふ時にでさへ、此地に動物の生活が榮えたといふこと

を、私は知らなかつた。鳥も殆んどゐない、昆蟲は猶ゐない。何故だらう？ 私はそれを説明することが出来ない。

慙うした思索を續けながら、私達は丘の登攀を終へてゐた。私達は墓の前にあつた。私は此處に於て、以上私が述べ來つたことに對する意外な否定を發見して、驚嘆した、言ひ得べくんば、戰慄した。

約二十匹ばかりの勢のい、蜜蜂が、一個の棺位しか廣さのない、そして此寒い期節に花も落ちて衰れな姿になつた此小庭の上を、飛び廻つてゐた。墓地全體をみやつても、秋の最後の花、葉も半ば散り果てたバンガアルの萎れた薔薇より外には殆んど残つしゐなかつた。私達が居つた場所、新しい墓石に充ちた處でさへ、荒涼たるアラビヤであつた。墓の上にさへ祖父の頭部にある色の褪せた翠菊と、我が兒の絲杉より外には何もなかつた。而も此粘土質の瘦地の中にあつて、或は大氣を呼吸し、或は大地の精に養はれてゐる是等の翠菊は、慙うした小さな落穂拾ひグラッセウメが猶働きに來てゐる處をみると、未だ幾分の蜜を藏して

るるに違いないのであつた。

私は迷信家ではない。私は唯だ或奇蹟に自然の攝理の永久的奇蹟を信するばかりである。然しながら、生々しい心の警異が、如何に人智を揺り動すものであるかを、私は實驗した。私は是等不可思議な小動物が、此孤獨の地を愛してゐるのを見て感銘せずにはゐられなかつた、噫呼！ 私自身さへ、稀にしか訪れないこの處を。日を日につぐ漸層的な仕事の誘惑、明日の生をも疑ひつゝ、次第に急がしく鍛へ行く我が鍛冶場の喘ぐ様な焰、凡てさうしたものが、私達をして、是等の墓碑から遠去からしめてゐた、青春期を回想しつゝ、煙草を吹かす時はありながら。私は是等の蜜蜂等が私の代人となつて、私の役目を果してゐるのを見て感動せずにはゐなかつた。私の不在中、彼等は此地に住んで此處を賑はしてゐたのだ、我がなき人々を慰さめてゐたのだ、きつと嬉ばしてゐたのだ。私の父は彼等をみて、あのお人好しの寛大さを以て微笑してゐたことであらう。彼等は私の兒の幸福を、最初の嬉びを造り出してゐたのであらう。

利益は彼等に齎らされなかつた。私達の手の内には、彼等の爲に取る可きものが全くなかつた！ 然しながら、私達が持参した百日草の花環を絲杉に掛けた時、彼等は好奇心を起して、若しや此新しい花の中に何かありはしないかと其處へ飛んで行つた。がその硬い刺だつた花冠は彼等をはね返した、そして元の萎れた翠菊の上に送り返した。私は悲しかつた、私は彼等に向つて言つた、(遅かつた、ほんとに遅かつたんだよ、お前方が来たのは、それに哀れな墓だなんて……私には小袂を張つてお前を勞ふ爲に何にも持たないのだ、慙うした高い氷地の上に既に動き始めた最初の寒氣から、北風に晒された寒氣から、お前方を保護し、暖めてやる可きものを！)

彼等は恰も私の言葉を解したかの如く、その行動は正しくその返事となつてゐた、私は見た、彼等は眞直に後ろの方へ向いてゐるその小さな手を以て、日光に當つたその脊を擦つた。彼等は此生温い光線の中へ浸り込まうと欲してゐる。彼等は、短かい時を利用してゐる、不幸にも太陽の急ぎ歩に廻り行くはかない時を、彼等は太陽を未だろくに感じもし

ない、然るに太陽は既に過ぎてゐる、非常に表情的な彼等の身振は明らかに言つてゐる、
 「噫呼！ 何といふ寒い日に生れ合せたことだ……急がう！ ……一時間の中には矢張寒い宵が、凍つた夜が始まるのだ、誰が知らう？ 冬だ！ そして直き我々は死ぬのだ。」
 彼等は未だ非常に活々としてゐた、その輝かしい、金色の光澤を帯びた翅の下に、殆んど光體とも言ふ可き程、驚く可き清き美しさを持つてゐた。私は曾つて是程美しい昆虫を見たことがなかつた。或事が私を惑はせた、彼等が餘りに美しいといふことだ、餘りに輝かしいといふことだ、殆んど勞働的服裝を、毛むくぢやらな着物を、その刷筆を、刷毛を持つてゐないといふことだ。遂に私は或事を知るに至つた、彼等は蜜蜂が持つ四葉の翅を持たないといふこと、唯二葉の翅を持つてゐるといふことを知つた。

私は私の誤謬を識つた。彼等こそ正しくヴィルジルをも誤解せしめた者達である。私の様に、ヴィルジルも彼等を蜜蜂と信じて、彼等に此誤つた名を與へた。レオミュウルさへ、彼等には一時騙されたといふことを告白してゐる。

然しながら、ヴィルジルに依つて物語られた事實は不正確ではない。この事實が此古代の人を如何に強く感動せしめたか、彼等が如何にも再生の相を見せたに違いないかは、容易に理解される。彼等は如何にも死者の娘らしい。その生涯の三時代の第一期を、彼等は病的な、堪へがたい、他のあらゆる動物に取つては勿ち死である様な水の中に過す、滅亡し行く生命の残骸が残した水の中に。巧みな愛情に依つて、自然は彼等を其處に保存し、今や生存せしめ、萬死の中に呼吸せしめる。第二期を、彼等は、地中の暗黒界に過す、その蛹としての睡りを眠る爲に。だが怒かる墓場を捨てた彼等は、其先の世の沈淪を立派に填め合せる。空中を行く輕快な、蜜蜂の勞働を免除された、そして、蜜蜂などが決して持つたことのない様な黄金色の翅の光榮を持つた生活、それが、その優しい品性と共に彼等に與へられる。無邪氣で、劍を持たない彼等は、我が愛の時を太陽の下、花の中に生きる。その生立を恥づる處が、尊いヴィルジルの蜜蜂である彼等は、墓地の花を蔑しむはしない。彼等は死者に對してはその伴侶となり、生者に對しては、魂の蜜を、未來への希望

を集める。

(三三〇)

第二十一章 田園の蜜蜂

〔植物がその生活の最高點たる花期に達する時、對生の形態、香氣、色彩及び動物と同様な刺戟感應を取る時、彼は今迄になく孤獨より出で、凡ゆるものに結び付いて行く。然しながら植物は一箇所に固定されてゐる。愛の接近がない。動物は、之に反して、運動する。彼はその生の嬉びを氣まぐれな動きに依つて傳へる。其處で囚はれの身の植物は、自由な生活を持つ動物に向つて、親しげな親任の眼差を投げかける、そして、彼に豊富な物資を提供し、その報酬として、自己の繁殖行爲を成遂けんことを、彼に待つ。其處で又動物は恰も兄の如く、植物に援助する。自由の救援をする。然しながらその爲には、その動物が完全に自由でなければならぬ、翅を持つてゐなければならぬ。そして、その動物に取つては、親切な乳母であつた處の此の植物の生活に連絡されてゐなければならぬ。此處に於てか、昆蟲が、植物の愛の使であり媒介者である、彼等の普及者であり、そ

(三三一)

の繁殖の熱心な機械である。

〔母の様な情を以て、植物は自身の体内に昆虫がその卵を蔽ふ可き處を與へる。彼は未だ動くことも出来ないその若い幼蟲を養う、それは遂に此植物の中の殻を出で、自由に動き、自ら養ふに至る。植物の成長力は、昆虫がその体内に窃取してゐた箇所を譯もなく恢復して下う。かくて動物と植物との両者は共々相調和して生命の最高調點に到達する。動物は營養吸收の下界から、上空の世界に、純なる活動の慾求に、愛の追求に飛翔する。植物は、實際上、それ程高く登らない。けれども、その花は至高存在の美はしい夢である。かりそめのものとは云へ、その果實に依つて種の存在を確固たらしめんとする夢である。花を持てる植物、翅を持てる昆虫は、合奏曲の様に、色彩と、美はしい均濟な形態と、その織巧な本質とに依つて、相類似した一發展に到達するのである。胡蝶形科の花の如き、實際植物となつた昆虫なりといひたい位ではないか。〕

〔此の調和生活は同じ韻律を以て晝の一刻々々を進行して行く。各々の花は其蜜に一匹

の昆虫を招待して、此昆虫が最も活動的生活を営む時に開き、彼が休憩する時につぼむ。彼等はかくして共に一致を感じてゐる。愛が彼等を互に引附けてゐる。植物は此の場合、自然の中に即したる創造の固定的根柢たる女性の役を務めてゐる。昆虫は、大地を離脱し、空中に飛び舞ふ處の男性、但し、植物に呼ばれて地上の萬物一致に力を盡す處の小さな雄の様である。彼は花の中にその生活を打擴けて行く處の翅ある葯である。〕(Burdach, livre II, ch, III.)

風が偶然にやることを、昆虫は愛に依つて行ふ。我が種族に對する直接の愛と、我を歡待し、我を養ひ、猶又我に繼いで我が卵をさへも養ひ、かくてその母性を續けて行く處の敬愛すべき補助物に對する間接的な複雑な愛とに依つて。彼の行動は亦、風の様に、外面的、表面的なものではない。それは内面的であり侵人的である。熱情と好奇心を持つ昆虫は、花の羞恥がその神秘の戸口を圍つてをくあの軽やかな小さな障礙物などに阻止されて、止まりはしない。彼は大膽にその蔽を取り除け、花の内殿に這入る。彼は取る、彼

は掠奪する、彼は蹂躪する、如何なるものも許されるといふ保證の下に。無力な花は、我が希望を自ら行きたいと思ふ處へ運ばうとする此の自由者の掠奪を幸福とする。彼女は言ふ（取つて下さい、どしく取つて下さい。）昆虫は此處にその全力を盡す。彼の體の毛の凡ては吸収し、吸収せられんと欲する磁石の如き小さな箭となる。その尖端、その凡ての表面は、此の植物電氣の寶玉を吸収し、蔽はれて了ふがい、それこそ彼女の願ひである。願は叶へられた、徳望ある昆虫——吸収装置を以て身を蔽はれたる蜜蜂の獨特な器具に依り、又、その蜜製造といふ個人的小産業の爲に、又、植物繁殖といふ一般的、世界的大産業の爲に、此の宿命を負ふた蜜蜂に依つて願は叶へられた。

尊き神の子よ、殊にかゝる大生理學者に依つて花と昆虫との愛に就いて語られた様な優れた被造物よ、殊に蜜蜂の嘆稱すべき特異性よ。彼は花の中から、花がその戀愛生活に消費して了ふ處の高貴な飾りより外には、求めはしない。彼は、その卵を植物の中に産みつけて是を養ひ、又植物の養分を吸はうなど、はしない。胡蝶はその未來の青蟲の爲によく

やつてゐる處だが、蜜蜂はあんな風に自分の卵を當もなく植物の生活に任す様なことをしないで、却つて植物を大切にする。そして、是を害することなしに、そこから貴重な材料を借用して、我が技術を以て、雪化石膏や、琥珀や、或は黄金の宮殿を造り、其處に我が兒を休ませる。

蜜蜂の此の無害といふことは、彼の嘆稱すべき技術と共にその高貴な一屬性である。彼の螫は防衛上の武器に過ぎない、而も非常に必要なものだ、人間に對しては、人間には彼自身何の用もない。ではなくて、彼の恐る可き敵、あの慘酷なゲープに對してである。蜜蜂は、それどころか何者に對しても害を與へない。彼は、殆んど死といふものを見ない。その罪を好まぬ生活は、他の生命を全く必要としない。彼は無數の存在を生ぜしめ、生命を附與し、繁殖せしめる。如何なる荒蕪の地、未開の所と雖も、彼がその草木の衰退せる成育を旺盛ならしめ、それらを注意したり見守つたりして、花を開かしめやうとしない處はない。彼は草木に向つてその懶惰を責める、そして、それら哀れな沈黙の處女

達が愛に胸を開いてからは、彼は必要無く可からざる商議の様にその一人々々を縁づけ
る。その咬きの内に、それらの花粉や香氣を運ぶ、それらの花の意である所のその香りを
結び合せる。

是が三月の月に始まる。まだ不確な、だが既に強い日光が田園の小さな花々の眠りこけ
てゐる活氣を眼醒めしめる時、すまふとり草、芝地の雛菊、桓のきんぼうけ、早咲きのに
ほひあらせいとう等が花を開いて、空氣をかぐはせる。だがこれは一瞬間である。午開い
たかと思ふと、三時には、彼女等は又しぼんで、その寒がりの雄蕊を蔽ふて了う。此の優
しい暖かさの瞬間に、諸君は一個の小さい、褐色の、全身毛もくぢやらの、だがそれはそ
れは寒がり屋の動物を見るだらう、彼も亦思ひ切つて、その翅を伸ばしたものだ。蜜蜂
が、自分に、又自分達の子供の爲に、賜食が整へられてゐることを知つて、我が家を出て
來てゐるのである。

此の時期に物のないことは事實である。だが其搖籃の大部分は此時期には矢張り空であ
る。母蜂の大繁殖力はまだその胸の内に隠されてゐる。一世界を造り出す筈の、あの敏速
な規則的の産卵は、もつと遅く、美はしい五月の月にならなければ始められないのであ
る。

驚く可き萬物の呼應よ。寒がりやの花の大部分は、寒がりの蜜蜂と同じく、變り易い四
月の空には堪へられぬ程繊細なその色彩を、日光の下に繰り擴ぐ可き、より確かなる時期
を待つてゐる。

是等愛らしきもの、始まりを見るこそ楽しみである。温順な花は打伏して、昆蟲の不安
氣な活動に身を委してゐる。彼女は、風を避け、人眼を避けて閉ぢてゐた内陣を、親しい
蜜蜂の爲に開く。蜜蜂は彼女に心からの思を寄せられて、その戀の使を運ぼうとしてゐる。
其處に生じてゐる神秘を俗人の眼から蔽はん爲に、自然が盡してゐる得も云はれぬ様な用
意は、恰も同じ家族人の如き、而も第三者の地位にあることを少しも懸念にしない大膽な
かの探求者を、一瞬間と雖も阻止しはしない。譬へば或花の如きは互にくつつき合つてド

ームを造つてゐる二個の花弁に依つて自らを保護してゐる（水邊の菖蒲が、かくてその小さな繊細な婚達を雨から守つてゐるが如きである）。又或者はスイート・ピーの如く一種の兜を以て頭を飾つてゐる、でその爲にその前庇を擧げなければならぬ。

蜜蜂は是等の最も柔かい毛氈を張られた、仙女にも相應はしい隠れ家の奥に身を入れる。黄玉の壁、碧玉の天井、此怪奇な寶蓋の下に。だが、生命なき寶玉に譬へるなど、は哀れな比較だ！……これらは生きてゐる、そして感じてゐる。祈願してゐる、期待してゐる。で若しも隠れた小さな王國を征服せる幸福者が、若しも彼女等の是等精淨無垢な柵門の權柄すくな侵害者、昆蟲が、凡てのものを攪亂蹂躪して了ふならば、彼女等は彼に有難うを言ふだらう、そして彼にその香料を浴びせ、その蜜を負はせるであらう。

世には恵まれたる場所もあるものだ。祝福された時もあるものだ。其處では蜜蜂が收穫を得ながら、純潔な勤勞者よ、無数の結婚を成就するのである。譬へば、山腹の上、誰だつて穩かな牧歌を聞かふなど、は思はない様な未開な海のほとりなどに、若しうまく隠さ

れた、安全な、日の當る神秘境があるとすれば、自然は此の暖かい潤える優しさを持つた母の様な隠れ家に、選ばれた一小世界を創造することを忘れはしない。こゝでは花がその花蜜の最も甘いものを蜜蜂に浴びせれば、蜜蜂は、身に餘る望みに頭も擡げ得ない花の思ひを叶へてやる。

暖かく、慎ましく、そして柔しきは、亦、夕の來る前の時である。入日に愛撫されて、その温か味を我が身の内に包み、既にほのかに白く浮き始めた靄に花冠を潤されて、花は再び甦る思をする、二重の情熱を感じる。彼女は愛を迫られる。彼女は愛する。その雄蕊は顯はれる、その香の雲を揺り動かす。仲介者よ來れ、此の愛すべき聖き時に、救ひの蜜蜂よ來れ！そしてその香りを捕へよ。夕吹く風が散らして了ふではないか。そしてそれらを巧に配して、此處に取り、彼處に與へよ。花々は最早孤獨ではない。荒野は仲介者に依つて一社會となつた。こゝでは皆がその小さな司教の手に依つて結ばれた結婚に入つて、啜き交し、愛し合つてゐる。

蜜蜂が朝早く起き出で、泌み込む様な露の下に眠つてゐた花が、眼を醒まして、われに歸る瞬間に立合ふのは之も亦嚴肅な仕事である。情ある光に打たれて、花は何の抵抗もしない。彼女は心を時めかして、己が身に持つ最もよい凡てのものを、他人の爲すがま、に任せる。彼女は滴々と蜜を湧出す小さな泉の様である。それを汲んで見給へ、跡から跡からと湧く。その時、恰も此處に蜜蜂は來てゐる。その仕事は此處に於て殆んど盡きてゐる。甘い寶物は、かくの如きよき折に充分に用意されてゐて、蜜蜂に何の手數もかけない。彼はそれを我が子等に持ち歸る、(お食り、これが花の精ですよ。)

午の暑さの時には、彼は無爲に過すだらうか？ 早魃と熱氣とは平原の花を枯らす。けれども森林の花は爽やかな日陰に蔽はれて、盡きない泉を持つてゐる。さら／＼流れる小川や靜寂な深い沼澤の花は、此の時も旺盛な元氣にある。忘勿草の如きは物思はしげに、蜜の小さな涙を流す。白睡蓮でさへ、その蒼ざめた純潔な面に、柔しい愛の玉を見せる。

【暑さは蜜蜂を防げないが寒氣は極端だ。彼の良心は強い、短い夏に一日の仕事も無駄

にしまいとして、彼は、突如な冬の來襲、あの最もよい天氣の日によく氣まぐれにやつて來る處の鋭い北風にも、充分な考慮をしない程である。蜜蜂程に理智のない、が同時にそれ程勤勉でもない昆蟲も、完全には是をのがれることを知つてゐる。懶惰な用心深さを以て、彼等は言ふのだ、(明日だ……休まう。)そして彼等は辛棒強く一日二日或はそれ以上、意地悪い北風が御機嫌を靜めるのを待つ。然しながら、養ふ可き大家族を負ふてゐる人々は、此の家族の者を元氣あらしめて(従つて饑じさを覺えしめて)ゐる様な暖い冬が來得るといふことを知つてゐる人々は、唯一日の休息を取ること懸念になるではないか。

【六月でもまるで三月頃の様な寒い朝がある、さうした朝でも矢張り彼等は何の躊躇する處なく大膽に野良へ出て行く。然し彼等は強壯であるといふよりも勇敢である。寒氣は彼等を捕へて了ふ。私は彼等が精魂盡きて、恰も麻痺せるもの、様に、我が家の窓を這ひづつてゐたのを見た。彼等は逃げようとはしないで捕へられるまゝに身を任せてゐた。彼等は神聖な状態にあつた、と敢て云ふのは、その勇敢な、倦むことなき勞働の徴を身に負

ふてゐたといふことを告げたいのだ。花の微粉にまみれてゐた、その小さな吸胃(嚙囊)は一杯であつた、花粉で一杯過ぎる程一杯であつた。彼等はいふもの、様であつた、(私達は少しも怠けものではありません。それどころか、多くのものが眠つてゐる朝の寒い間に、私達はもう一仕事やつてゐたのです。けれども噫呼！ 天候があまり甚いのです、餘りに刺す様な北風なのです！ で私達はこんなに凍えて了つたのです。一寸の間宿をお願ひ致します。)

(かゝる非難の打ち處のない、餘り熱情的な労働者達の不幸に誰か同情しないものがあるか？ 私は彼等に宿を、風の當らない、日光の當る一室を借したばかりでなく、貧しいが友情の籠つた御馳走を提供した、他でもない、砂糖壺の奥で。

(寒がり屋さんは此の美はしい暖かい光にその失つた體温を恢復し、體を一面に蔽ふてゐる毛の衣を完全に元のすこやかな状態に戻すと、此の一時的な獄屋を認め始めた、そして驚異の歡喜を以て、此の硝子器が食堂であることを發見した。非常な食慾をそゝられて

食卓に就いた彼は、一塊の砂糖にかゝつて行つた。そしてその吸尿管を以て出來得る限り吸ひ込んだ。食事が終つた。蜜蜂が全く蘇つて、動き出した時、行つたり來たりして戸口を求めた時、彼の爲に既に日足の進んだ今日の一時を失はしむるのを恐れて、私は彼を放免した……勢込んだ飛翔を以て、こよなき日光に祝福されつゝ、彼はその仕事に歸つた、羽音は明らかに言つた。(左様なら、奥さん、何うも有難うございました。)

第二十二章 蜜蜂の建築

若しゲープの巢がスバルタ式であるとすれば、蜜蜂の巢は、昆蟲世界中での、眞のアテ
 ーヌである。此處では凡てが技術である。市民中、その選抜きの技術家が不斷に二のもの
 を創造してゐる、一は都市である、國である、他は國母である、國母は單に市民を永續せ
 しむるのみならず、それ以上に、その偶像である、禮拜物であるのだ、此都市の生きたる
 神である。

蜜蜂にもゲープにも蟻にも是等凡ての社會的昆蟲に共通するものは、生命の全部を一の
 定つた母に捧げるといふ、伯母や姉妹等凡て勤勞な處女としての無差別一様な生活である。
 そして是等の類似市民から蜜蜂を區別するもの、それは彼がその愛に依つて勞働を促さ
 れてゐる處の市民的偶像に、自分から成らうとする要求を持つてゐるといふことである。
 此事は長い間知られずゐた。吾々は始め此國は王を持つた君主國であると信じてゐる

た。處が、ではないのだ、此王は女性である。其處で一轉して、此女性は女王だ、と言つ
 た。未だ誤つてゐる。彼女は統治しない、支配しない、何者も導きはしない、ばかりでな
 く、彼女は或者に支配されてゐる、時々特別な特典に置かれる。それは女王以上であり、
 以下である。それは公衆の、そして法規上の禮拜の對照である。私は法規的組織的だと言
 ふ、何となれば、此禮拜は、かゝる場合に、人も見る如く、此偶像が非常に嚴重に取扱は
 れる程盲目的でないからである。

〔然らば此政體は眞實デモクラチックなのであらうか？〕 左様、若し此國民の全員一致
 の獻身、萬民の自發的事業といふものを考へて見るならば、如何なるものも命令してはる
 ない。けれども、實際、あらゆる建設物の中に主力を占むるものが、智能ある選民、技術
 家の貴族であることはよく知られてゐる。その都市は全市民に依つて建設せられるもので
 もなければ、組立てられるのでもなくて、或特別な一階級、一種の同業組合人に依つて
 ある。蜜蜂の大衆が田野に皆の食糧を求めに行く一方では、より體の大きい蜜蠟蜂が蠟を

煉り、調べ、細工して、是を巧みに使用する。中世の自由結社フライングの如く、此尊敬すべき建築業組合は、深奥な幾何學上の原理の上に建設する。これは、人間古代のその如く、生きる石の主人達である。だが如何によく此名稱が此尊い蜜蜂に價してゐることであらう！彼等が使用する材料は彼等に依つて造られる、彼等の花々しい活動に依つて精煉せられたのだ、彼等の體液を以て生命を吹込まれてゐるのだ。

その蜜も蠟も植物質のものではない。花の汁を取りに行く輕快な小蜂がそれを持ち返るや、既に變質してゐる。彼等の生命を受けてゐる、甘くて、純粹な此汁は、彼等の口からその姉さん達の口へと移される。此姉さん達、偉い蠟細工者達は、此生命を附與された食料を受取ると、是に此市民の魂であるかの如き得も云はれぬ甘さを附ける。彼等は自分の受持の精煉法を施す。自己のものの生命を以てこれを固める、それがその耐久力となるのである、賢明な、坐職の彼等は此液體を固定的な蜜とする、第二次的蜜とする。私は之を熟した蜜と呼ぼうと思ふ。是で全部ではない。此二度精煉され、二度動物質の液を附與さ

れた物質を、彼等は猶、不斷にその唾液を以て潤ほしながら、使用するのである。唾液は此物質をその作業の間丈はより柔軟なものとして、すんだあとはより強軟なものとするのである。

かゝる構成が生きたる石のそれであると先に私が言つたのは誤りであらうか？ これらの材料の一原子と雖も生命を三度通過せざるものはない、生命に三度泌み込まれないものはない。かゝる蜜蜂の巢に就いて、その主力となるものが果して花であるか、又は蜜蜂であるか、を斷言するものは誰か？ 蜜蜂はその大部分である。此處に於て此市民の家、それは此市民そのものである、明らかにその魂である。魂が彼から都市そのものを引き出したのだ、かくて、蜜蜂と蜜巢とは同一物である。

然しながら彼等のその作業を見ようではないか。

未だ空虚な是から創造すべき此巢の中央部に、博識な蠟工は唯一人進んで行く。彼は自分の環節の下から一枚の板蠟を大切氣に取り出だし、それをその手から口へ移す。此板は

その齒に依つて碎かれる。そして此齒が紡績機の用をする、蠟はリボンの形となつて出て来る。八枚の板がかく取りあけられ、加工せられ、潤される。その結果として八個の小塊が彼に依つて、此都市の母坐——第一構造の第一標柱として据えられる。

他の者達は此第一人者が造り始めたものからかけ離れずに續けて行く。若しも或智能ある新參者が一定した計劃に従はない時は、博學なそして經驗を積んだ師匠の蜂が其處に居てその誤りを捕へ、之を訂正せしめる。(ユウベール)

立派に据えられ、整列された、此の塊、多くのものがその蠟の貢物を調和さして置いた處のその總塊の中に、今度は穴を穿つて、一の形を造らなければならぬ。又一人が、一人だけが、他の者達から離れて、その角質の舌と、齒と、足とを以て、此可成硬質の物質の中に、遂に圓光井を逆さにした様な窩を造る。疲勞すると、彼は身を退ける。他の者達が來てそれを模造する。二個の間の壁を、彼等は薄く薄くする。觀察すべき唯一の點は、その厚さを常に巧妙にやつてのけることである。だが何うして彼等はそれを理解するのだからう？

誰が彼等に、もう一邊打撃を與へればその仕切に穴があいて了ふでもあらう様な瞬間を告げるのだらうか？ 然も彼等は決してそれを知る爲に向側へ往つたり來たりする煩をば取らない。眼は彼等には無役である。彼等は觸鬚に依つて凡てを判斷する、觸鬚は彼等のソングでありコンバスである。彼等は觸れてみる。そしてその非常に敏感な一觸に依つて、蠟の弾力を感知する、又は聞える響に依つて、猶其處に掘鑿すべき確實さがあるか、又は此處で止めて、先へ進んではならないか、を感知する。

此構造物は、人も知る如く、二の目的を持つ。蜂窩は一般に夏期は搖籃であり、冬期は花粉と蜜との貯藏所である、此共和國の豊富な藏である。此甕の一個々は、その蠟の蓋を以て密封される。全市民が信仰的に決して觸れない閉鎖よ、彼等はその本體の爲には唯一個の蜜窩しか開けて置かない。此窩が盡きんか、市民は何か他のもので、而も非常な節約と非常な節食とを以て、暮すのである。

是等構造物が絶對的に一律であるとは繰返し言はれて來たことである。ビュウフマン

(Georges-Louis Leclerc de Buffon, 1707—1788 佛の大博物學者)は、蜂窩は蜜蜂の形そのものに過ぎない、蜜蜂はその蠟の中に身を入れ込む、そして、その盲目的行動の内に體の摩擦に依つて、その跡型が出来る、凹みが、一樣な蜂蜜が出来る、と主張するまでに至つてゐる。何たる憶説であらうぞ、假に觀察して分らないとしても、少しく省察するならば、かゝることのあり得可からざるものであることが判断されないではない。

事實、彼等の仕事は極度に多様である、様々な遣方に條件づけられてゐる。

第一番に、蜂窩は、巢の兩表面の周圍を廻らなくても濟む様になつてゐる廊下又は小隧道の中央に貫かれる。萬事に節約的な彼等は時を惜しむのである。

第二番に蜂窩の形はちつとも同じでない。彼等は六角形を選ぶ、明らかに此形は最小の廣さに最大数の窩を造るに最も優れた形である。然し、彼等は此形の奴隸では全くないのだ。樹木に附着せしめる最初の窩が、若しそれが六面の窩から成るとすれば、それは、その狭い突出部に依つて、危つかしげに取付けるより外にないであらう。彼等はこれを唯の五

面のもものとする、樹木の上に強固にくつつく様な廣い底邊を造り出す爲に五角形の蜂窩にそれを構成する。是を膠着せしめるのは、その蠟でなくてゴム若しくは蜂蠟を以てする、而して是は乾くに連れて鐵の如く硬化する。

未來の母達の大王室若しくは搖籃は、是を房々の側に見ることが出来るが決して、六面ではない。細長い卵形をなしてゐる、是等の特典者に心地よい自由さ、安樂さと發達の容易さを與へる爲である。

最後に、一目見た處では皆同じ様な六角形の蜂窩の中にも、少しく注目するならば、非常な差違が見られる。落穂拾ひの働き手のは小さく、蠟技家のはより大きく、雄蜂のは大きく廣い。恚うした廣さは、その底に附けられた圓形の小片に依つて保たれてゐる、それが亦幾分の丸味、膨味を出してゐる、即ち家に依つて住人が違ふ。雄蜂はづんぐりとして便々たる腹を以つて生れる、その搖籃の形に依つて恚うした形態を取る可く豫め定められて生れるのである。

かく、彼等は自ら蜂窩のデッサンと廣がりとを多様ならしめてゐる。彼等は其處に置かれた障碍物に従つて猶もこれを變化自在なものとする。若しその敷地が何者にか遮ぎられるならば、彼等は非常な技妙さを以てその六角形を自由に變化させる。これはユウベールが天才的實驗に依つて確めた處である。氏は、彼等がその蜂窩を附着せしめんとする巢の壁の一に、木の代りに硝子板を置くことに依つて、彼等に妨害することを考へた。彼等は此すべしした硝子が何者も固着することの出来ないものであることを豫め見抜いて了つた、そしてその時から策を施して、その蜜蠟を、此硝子を避けて、木に達する様に曲けた、けれども是等の蜂窩を曲げる爲には、その直徑を變へなければならなかつた、中高の部分の直徑をより大にし、中凹の部分のそれをより小にしなければならなかつた。緻密を要する問題である、是が何の困難もなく蜜蜂の建築家に依つて解決されて了つた。

彼は猶語つてゐる。冬の最中、彼等の無力な時期に、重過ぎた一房の蜂蜜が崩壊して、その下部の蜜房にかぶさり、通路を塞いで了つた。なだれは焦眉の急に迫つてゐた。彼等

は強固な護謨質の添木、承塵まほしを造り出した、是で倒壊した蜜房と巢の壁とを保持して、此危険な崩壊の内部の建物を引倒すことを防いだ。さうしてをいて、恙うした同じ様な不幸に備へる爲に、建築上の新しい、そして用のない設備、扶壁拱、控柱、親柱、梁等を造つた。

新しい、そして用のないものだ！ 是は正にビュウフオンの理論を打破つてゐる。機械が自ら改良するなどと、機械的偶然が發明するなどと——説明困難なことである。然しながら、此博物歴史の大壓制者の至高な權威は、若しも前世紀の末期に當つて、蜜蜂自身が意外な一撃を以て、此問題を決定的に解決して了はなかつたならば、恐らく、事實に、觀察に打勝つてをったことであらう。

それは佛蘭西大革命の少し前、亞米利加獨立戦争の當時であつた。我が歐洲の天地に恐る可き形をした未知の動物が出現し、傳播した。強大な夜の蛾で、可成明らか、醜怪な死の頭を持った灰色の野獸の姿を備へてゐた。曾つて見たこともない此不吉な動物は諸國

を恐怖せしめた、そして最大な不幸の前兆を顯はした、實際是に驚怖した人々は自ら是を撲滅するのであつた。是は青蟲としてその寄生せる植物、亞米利加の馬鈴薯、バルマンティ (Antoine-Augustin Parmentier, 1737—1813, 佛の農學及び經濟學者、馬鈴薯の栽培を教へし人。) が吹聴し、ルイ十六世が保護し、人々が到る處に植へつけた此流行植物と共にやつて來たのであつた。學者達は是にあまり安心のならない名を以つて洗禮を與へた、即ちスフィンクス・アトロボス (アトロボスは生命の絲を斷つといふ地獄の女神)。

此動物は恐ろしいものであつた、實際、だが蜜に對してであつた。彼は非常に貪慾で、蜜を得る爲には何事をも犠牲にする。三萬の蜜蜂の巢も彼を怖れしめはしなかつた。眞夜中此貪慾な怪物は、その附近が防備手薄な時を計つて蜜蜂の都市に侵入する、その蜜房に押寄せる、鱗腹詰め込み、藏や幼兒を掠奪し、目茶苦茶に引掻き廻し、ひつくりかへす。蜜蜂達はびつくり眼を醒まし、互に呼び交はし、互に集合しても無駄だ。彼等の劍は此怪物の全身を覆ふてゐる柔軟な弾力性の毛蒲團で出來た此種の蔽ひには刺さらないのだ、そ

れはコルテース時代のメキシコ人が身につけた綿の鎧で、イスパニヤ人の如何なる武器も是を突き刺すことが出來なかつたと同じである。

ユウベールは此の圖々しい掠奪者に對して蜜蜂を保護する手段を考へた。格子を造らうか、門を造らうか？ 何うしてやらうか？ これが彼の心配であつた。最もいゝのは蓋をすることであつたが、それは此の巢に於ける激しい出入を不便ならしめるといふ不都合があつた。我慢してゐる譯には行かない彼等の焦慮は、彼等をして、彼等が自ら困惑する様な、自らの翅を破る様な、矢來を設けさせるのではなからうか。

或朝、此の實驗に氏を援助してゐた忠實な助手が次の報告を齎した。蜜蜂達が既に自分達で此の問題を解決してゐるといふのであつた。彼等は多くの巢に於て防禦の方法を様々に考へ、防禦工事の様々なシステムを試みてゐたのであつた。或は體の大きな敵が通過することの出來ない様な狭い窓を持つた蠟壁を築いた。或は、より天才的な發明に依つて、何等閉塞をなすことなく、その入口に十字に組合せたアルカードを設けたり、又は小さな

数々の仕切を次から次へと、而もそれが交互にたがひちがひになる様に、第一列のものに依つて残された隙間に、第二列のものが竝ぶ様に、設置された。かくすれば此の多くの開きから、多忙な蜜蜂の群は少しジグザグに進む丈で何等他の障碍なしに、常の如く出入することが出来る。然し、大きな肥つた敵に取つては閉塞だ、完全な閉塞だ。彼は最早その翅を擴けて這入ることは勿論、此の狭い廊下から押し潰されることなしには、迂り込むことさへ出来ない。

これが動物のクウ・デターである。是が蜜蜂に依つて、唯彼等を掠奪するものに對してのみならず、彼等の理智を否定せし人々に對して、實行せられたる昆虫の革命であつた。彼等の理智を否定せる理論家マルブランジュやビュウフオンの徒は宜しく敗北せりと思ふ可きである。吾々は、スオムメルダム、レオミュウル等の大觀察家の沈黙に引返すべきで、彼等は、昆虫の天才を拒否する處か、我々に、昆虫が自由自在であること、昆虫が、危険や障碍に依つて偉大になり、或る境遇に於ては、習慣を捨て、意外の進歩をなすも

のであることを、實證すべき多くの事實を與へてゐる。

第二十三章 蜜蜂の市民及び共通母

蜜蜂の生活に於ては萬事が子供といふ觀念に關連してゐる。其處で此の愛の對照を見ようではないか。蜂窩の奥にゐるであらうもの、今しがた送られたばかりのもの、小さな労働處女蜂を見ようではないか。

最初、彼は、排泄器官さへ持たぬ程の非常に簡單なものとして生れる。人々が彼の爲に取換へてやる蜜と花粉との極上等な煮物の上に、諸君は初め、一のコマしか、次いでCを、更に螺旋線を見なければならぬ。けれども彼は既に生活してゐる。彼は有機體であり、従つて活動してゐる。一週間目には、巧みな紡ぎ手として、彼はその變態の産衣を織つてゐる程である。乳母達は此の大切な時に彼に完全な休憩を持たせる様にと、彼の小室を閉ざす注意を怠らない。彼女等は其處に鹿子色をした天鷲絨張りの小さな丸天井を施すのである。彼は十日間蛹として、非常に柔かい、純白なゼールに覆はれてゐる。それを透

して縮圖的なその口、その眼、その翅、その足を見ることが出来る。二十一日でその發達は終了する。彼は此の時此の小さな丸天井を切り始める、その頭を以つて是を突破するのだ、そしてその縁にかけられた初めての足を以て、凡てのものから自由になる爲に、力を單めて引く。大努力である。然るに蜜は、彼を元氣つける爲に其處に置かれてある。此の最初の窩内に於て、その吸管を伸ばす、かくして自ら生活に通じて行くのである。

彼は未だ濡れて、ぼんやりとして、確固としてゐない。彼は日光に身を乾かしに行く、疊まれてゐる柔かい翅をしつかりさせに行く。其處で彼は多くの伯母さん達から面倒を見て貰ふ、伯母達は彼を拭ふてやる、可愛氣に彼をねぶる、彼に母のキッスを與へる。

如何なる動物と雖も、蜜蜂以上完全に器具を備へたものはない、是以上明白にその機能の特異性を見せてゐるものもない。各々の器官が彼に、その課業を教へる、彼が爲すべき處のものを教へる。五個の眼に照らされて、二個の觸覺に導かれて、彼は前方に口の外部に、驚く可き試食の器官を、突き出だす、長い外部の舌、よく含みよく潤ふ様に出來た、

繊細な、半ば毛むくぢやらな舌、吸接管である。休んでゐる時には立派な殻質の袋に收められてゐる此の吸接管は、或液體を受ける時にはその細い尖端を伸ばす。そして此の尖端が潤ふと、彼はそれを口の奥に引込ます。そこに感覺の裁判官たる内部の舌があつて、之が味覺の結審を決定する。

かゝる細密な器官に、もつと粗大な附屬器官を加へて見給へ、彼の天職を證據立て、ゐるものを、花粉を附着せしめる爲の全身の毛、此の收穫物を掻集める爲の脚の刷子、又それをあらゆる色の毬に壓縮する處の嚙囊（吸胃）等を。凡て是等を一緒にすれば、それが此の職業の特徴ではないが……さあ、我が娘よ、行つて、刈取機械となれ。

お前は何等他の希望を持たないだらう、そしてお前はそれ以上のものを望まないだらう。お前の搖籃を準備し、お前が生れるやお前を養つて呉れた處女の精達は、お前を彼女等の通りのものに造りあける。質素な、勤勞な、そして石女な彼女等は、自分達の身の上で節約する。彼女等は自分達に、そしてお前に斷食に依つて、少くも僅少な攝取に依つて、永

久の處女を保つのである。然も一方では、彼女等は、未だ子供である未來の母を豪奢にもてなす、そして、種族の爲に、殆んど無用な多くの雄に對しても矢張り非常に寛大である。

此の都市の原則——獻身的精神と智態との賢聖政治を感じしめるものが此處にある。彼の蠟細工蜂又は建築蜂達が、若し生存中の母蜂に相談したりするならば、彼女の後繼者は決して準備されないであらう。彼女は盲目的に嫉妬深い。そして、後繼者が生れると、それを殺さうとばかりするのである。で人々は彼女の言を全く聞かない。是等賢明な強い人は、市民の滅亡を慮つて、種の永續を考へる。其處で、蜜窩又は此の共和國の凡ての子供等を入れてゐる押し詰められた小さな蜂窩の側に、彼等は幾つかの非常に廣い部屋を建設する。此處に入れられた通常の卵は氣樂さと自由さとに幸せられて、肥え太つて大きくなり、そしてあらゆる自然の機能を發達せしめることが出来る。此の選ばれた卵の立派な發育を促進せしむる爲に、人々はより強い、より優良なある滋養物を惜氣もなく與へる。

それが彼女にその性の活動力を與へ、繁殖力を與へる。此の激しい力を有つた液體たるや、若しも乳母達が安心してその數滴をお隣りの搖籃に滴して了ふ時は、是等偶然に幸せられた小さな蜜蜂は、たゞへ弱い程度にせよ繁殖力を持つて了ふ、それ程のものである。

(私は王を造りました。奥さん、そして自ら王たらんとは思ひません)といふ悲劇の白言は是等賢明な乳母達の超越を完然に説明してゐる。彼女等は此の寵兒に此の世のあらゆる賜を與へた。美はしい廣い場所を、優良な食料を、そして女性の樂園、母性を！ 他者達には反對である、彼女等と同じ様に生れ來るであらうその姉妹達には、せ、こましい搖籃や、下等な食物や盡きざる仕事や苦痛やを與へる。その或者は野に出で、市民及び母の爲に汗を流すであらう。又他の者は部屋に閉ぢ籠つて、絶えず、家を建て、子孫の面倒を見るであらう。彼等には何等の慰安もない。私は、蟻の如くに、彼女達がお祭をするのも、體育上の遊戯をするのも見たことがない。彼女の凡ての歡樂は勞働である(是に母は免除されてゐる)、唯一人のものに彼女等は愛を與へてゐる、そしてその貞淑のみを守

つてゐる。

此の恩寵の子、市民の愛的となつてゐる此の娘の特質は、殊に長い、美しい、黄金といふよりは、むしろ燦然と輝く透明な琥珀の脚を持つてゐることである。此の豊かな色彩は彼女の腹にも神々しく輝やいてゐる。又それは脊部環節の縁にも現はれてゐる。優美な、しなやかな、そして貴族的な彼女は、働蜂に負はされてゐる刷子とか嚙囊(吸胃)とかいふ勞働の器具を引きずることを免れてゐる。凡ての蜜蜂と同じく、彼女も劍を——針のことを云ふ——持つてゐる、けれども、彼女は殆んどそれを抜くことはない(個人的決闘は別として)、彼女は過乘な愛に圍まれ、まとはれ、と言ふよりはむしろ壓倒されてゐて、そんな機會は殆んどない。

此の母は至極臆病である。ほんのつまらないものが譯もなく彼女を驚怖せしめる。一寸した危険にも彼女は逃げ出して、巢の奥に隠れて了ふ。彼女の頭はそれ程大きくはない、そして、彼女の専門となつてゐるその特別な職分は、その頭腦を益々働かしめる様なもの

ではない。他のものは達は知識を獲得し、才能を磨く機会を多く持つてゐる。小さな刈取り娘達は野良の知識や生活上の経験を得る。建築蜂は、それ以上に、内部の思ひがけない様な仕事を処理するので、勢ひ物を考へ、その智能を發達せしめられずにはゐない。母はなすべきことは唯の二つしか持つてゐない。

春の日の麗かな午後三時頃、彼女は立ち出で、千若しくはそれ以上の雄の中から一の夫を選び、彼を一瞬間その翅の上に負ふ。そして去勢された彼を投げ捨てる。彼女は立歸る、そして凡ては終了したのである。彼女はその生命の通常期間たる四年間、繁殖力を持つてゐる。是程短かい、是程あつさりした戀愛が又とあらうか。彼女の仕事の凡ては、夜となく晝となく、嚴冬癩痺の三ヶ月を除いて、季節のきらひもなく、到る時、到る處に産卵することである。彼女は室から室へと移つて、その各室へ卵を置く。これが彼女に要求される凡てのことである。彼女は此の爲に生れた。そして明かに、その繁殖力に應じてゐる。若しも、彼女が不産になるならば、凡てが凋落し沈滞して了ふであらう、活氣も、仕

事も彼女に對する愛も。彼女に皆が示してゐる感情は、效用觀念、市民の保存承續の觀念が是を明白に支配してゐる程に、非個人的なものである。

母蜂は輕薄な頭の所有者である、と斯界の人は言つてゐる。何も爲すことのない人の常として、彼女は浮氣もので落着いた所がない。その産卵期、巢の奥での蟄居生活の一年の終りには、それが彼女に外氣を養ませる、少しく世間を見に、目新らしい國々を見物に行きたがらせる、然しながら、彼女には慙うした人々が言ふ以上に緊要な動機があるのだ。

彼女は自分に代るかも知れない若い母蜂の育てられてゐる、廣大な部屋を見出だす。彼女は其處に我が競争者を感じる。そしてそれが妬ましいのである。絶えず、彼女はその周圍を徘徊する、そして彼女達を絶えず保護してゐる番人がゐなければ、又遠のいてゐるれば、彼女は彼女等の薄い壁の外からその針を突刺すかも知れない。其處で、彼女の怒りも自分達の危険も皆目知らない無邪氣な小女王達が、我が搖籃から抜け出ようと輕卒にも努力する時、ぶん／＼言つて、蜜蜂の母に特有なあの蟬の小歌を洩らす時は、そも／＼如何

なることになるだらう？ それは明に先の母に向つて、その王位窺視者が其處に存在するといふことを告げてゐるのである！……萬難を排して是迄に若き母蜂を孵化せしめて來た蜜蜂達の警戒は、此の時彼等を非常な困難に投込む。恐るべき決闘が起り得る、罪なきもの、虐殺が。舊い母蜂は、若しも構はずに放置するならば、憎らしい王女達を一人残らず助けはしないだらう。同じ市民として闘ふよりも、絶交するに如くはない。先の母は、動搖、驚駭、身の置き所もなく走り廻る。そして（え、もう仕方がない！ 私を愛するものは、私に附いて來るがい、！）と言ふらしい。彼女は出發の歌の音頭を取つて歌ふ。凡ての仕事は放擲される。

彼女に従はうと腹を決めた多くの蜂はその準備に取りかゝる。彼等は數日分の食ひ溜めをする。その異常な昂憤は、急激な温度の變化に露はれて來る。巢の温度が二十八度から三十一二度まで上昇する。彼等に取つて忍び得ないこと、それは、譯もなく發汗するといふその體組織上の特別な事情である。こゝに於てか、出發しなければならぬ、然もなくば

死ぬばかり。母蜂が出發する、皆が急ぎ續く。彼等は捨てた祖國の上で一時渦を卷く。空中に奇怪な交叉を描いて、幾分遠くまではねまわる。空はその爲に暗くなる。その幾匹かのあるものが遂に近くの樹の枝に身を落着ける。次いで他の多くのものが女王を伴なつてとまる。彼等は互にくつつき合つて、大きな房の様にぶらさがる。沈靜が取り戻される。他の都市の蜜蜂達は、この急を聞いて、是等熱狂者達の侵入を恐れつ、我が戸口をかため、哨兵を百倍にもしてゐたが、彼等の沈んだのを見て、ほつとして、その仕事にかへる。

處が深慮ある律義心ある先驅者達が此處から離れる、そして新しい建設に好適な四圍の状態が如何なるものであるかを確めに行く。ドボオヴォイス氏は此先見的行爲、新移民群を訓練指導すべき軍曹の特別派遣を、最初に觀取した人である。洞を持つた樹木、凹んだ岩石、北風を避けた處、容易に水の便を得られる小川の近邊等が、我が賢明なる移住民を最も決心せしめる處である。凡ての準備の整つた、既に蜜も俱へられてある巢に對して

は彼等は無關心ではない。彼等は非常に實利的である、或優れた意識に導かれてゐるのである。

彼等はあれ程熱心に働いて来た生れ故郷を何の愛惜もなく捨て去つた、と言へるだらうか？ 一度去つた以上は、も早それを思ひ出さないか？ 何うして、何うして。謂ふ所の輕薄な頭の所有主たる母蜂は殊に歸國の念に誘惑される、そして二度も三度も（實際見たのだが）、彼女は、餘りにも獻身的な移民群を引連れて、歸還しようと強情を張るのである。

此歸國に於て、彼女が若し、彼女の代りに居残りの市民達が擁立した處の新しい母蜂と顔を突合せるならば、何うなるであらう？ 決闘に違ひないのだ。又移住が始めから行はれずに、人々の是を阻止せんとするあらゆる配慮にも抱らず、若い母蜂が遂に自分の室を破つて、舊の母蜂の目前に、その嫉妬の憎むべき對照をさらけ出して了つた時と同じ結果が到來する。鬭争は必然である。處が、互に相手の武器、死の針を知つてゐるので、彼女

等性來の怯懦は、その激憤を和らけることが出来る、恰も金で買はれた力士の拳闘の如く、その決闘をして、罪のない騒ぎに、空しいつかみ合に終らせることがある。だが圓陣を造つて彼女等を端近に見守つて市民達は非常に眞面目である。彼等は事態はかくあるべしといふことを知つてゐる。都市内に於ける反目は、惡の惡たるものとなるであらう。彼等は又自分自身に對しても節食を強制するが、他人に對しても吝嗇である。彼等は若しも二人の母蜂を支へなければならぬとすれば、その費用や巨大だと、實際是を勘定する程儉約家である。二人が共に今迄通り、王らしい美食を取るならば、それは共和國の可成な負擔である。國家は二重の歳費に滅亡するでもあらう。此處に於て、二人の一人は死ななければならぬ。かくて、此國民特別な精神をその底まで説明する奇怪な光景が見られる。此讚仰の對照たる母蜂が若し身を引くならば、人々は再びその鬭争に引戻す、押しやる、二人の一人が遂に相手にのしか、つて、下腹部を彎曲せしめて、是を敵の下に差入れ、その臟腑の奥まで、我が容赦なき短刀を突刺すに至るまで。

統一はかうして得られる。打負かされてゐれば、惜し氣もなく打捨られてゐたに違いない。此勝利者は、誇りに偶像となる、此都市の生きたる神となる、だがそれは、彼女が此國民を不滅ならしめ、永久に繁昌せしめんとして此特別な地位を望んだものである。

母蜂が凡て死滅するといふ情ない場合を假定せんか、さうした孤兒の世界は如何に成果てるであらうか？ それは、人の言ふ如く、全然の混亂に陥るであらうか？ 此の不幸は恐る可き無政府状態を、彼自身に依る都市の奪掠が引起されるであらうか？ 否とドッボオヴオイス氏は言ふ。數時間の混亂、悲痛、憤激、精神錯亂が見られる。皆は往く、来る、騒ぐ、他事を放擲する。一時は嬰兒達さへ打捨てる。けれども生來慎重な此市民は再び我が真面目に歸る、我を取りかへす。女王が死んだ？ 女王よ生きよ！ 我々も一人造ることが出来る。昨日我々があつた處のものに、今日も猶我々はあるではないか。

最後は最初となるであらう。それは此市民中最も若い子供だ、恐らく此殺も開かれてゐ

ない、その狭い搖籃からも壓迫を蒙る時を未だ持たない、働蜂の食物をまだ食べさせられてゐない、従つて瘦せてゐない子供である。働蜂の食物は蜜ではない、蜜蜂の麵麩と呼ばれてゐる單なる花粉に過ぎない。既に此こちこちの麵麩を食つたものはいつまで経つても小さい。彼等は最早變形能力を持たない。

けれども、此若い子供柔軟な彼女は望むがまゝになる。彼女を眞に女性とする爲には、愛の蜜蜂、繁殖力を持つた蜜蜂とする爲には、何うしなければならぬか？ 自由だ。彼女の爲に、その若い生命が、安樂に生長の出来る様な廣い搖籃を造ることだ。それには、彼女の爲に三個の搖籃を、生れ来る可き三人の幼兒を犠牲にしなければならぬ。それが何であらう、彼女は一年に御身等の爲に一萬のものを送りだすではないか？

市民から此女王への成聖式、それは、市民が自分自身から造り出した生命の籠つた食料である、其處には香ばしい花の精に、蜜蜂の甘味が加へられてある。高等な、強烈な食料、藥草の芳烈な香に富み、又それ以上に、三萬の姉妹達が、彼女等の凡ての所有物たる

愛すべき此子の爲に、そこに打込まれた處女の愛に富める食料である。

三日目にはその子供は我が搖籃が廣げられて、益々自由になり得る様に、上下になつた一個のピラミッドを組合せた裝飾が附けられるのを見る。五日目にはもう完成せられて、彼女はそこに安らかに睡ることが出来る、靜かにその變態をなすとけることが出来る。此時から、心配は一層である。人々は明日は共有な魂となり、市民の仕事の上に、其愛による飛躍を與へて呉れるだらう此いといひ睡兒を張番する。彼等は彼女を守る、彼女に仕へる、だが、我が創造、自分で選擇して、自分で養ひ、自分が造り出した、そして破壊することも出来るといふ自分の創造物を讚仰してゐるに過ぎない處の市民に相應しい威嚴を持つてゐる。必要に應じて我が神を創造することの出来るのは、彼等の誇でなければならぬ。

結 論

蜜蜂と蟻とは吾々に昆蟲界の高級調和を見せてゐる。兩者は共に高度の智能を備へて、技術家、建築家等として立つてゐる。蜜蜂は、より幾何學者である。蟻は殊に教育家として優れてゐる。

蟻は明白に斷乎たる共和主義者である、その都市には生きた信仰の必要を持たない、國民の永續を司る優弱な女性を餘り尊敬もせず、可成亂暴に支配してゐる。蜜蜂は是に反し、より情義的らしい、又はより非理智的であり、より想像的であつて、共通母崇敬の内に精神的支持を發見してゐる。これは、これら處女達の都市の爲の恰も愛の宗教である。

蟻に於ても、蜜蜂に於ても、母性は社會の根本である、けれども又友情がそこに根を下ろし、そこに花を咲かし、非常に高く育つてゐる。

此書はあの大暗黒に始まつて、此大光明の内に終結する。

昆蟲類を正しく判断する爲には、彼等の仕事を、彼等の社會を、凝視せよ、理解せよ。若しも彼等の體組織が人の言ふ如く劣等なものとなされるとすれば、かゝる低劣な器官を以て、非常に高等な事業を完成する彼等は、それ丈ますく嘆稱すべきである。

牢記せよ、最も進歩したる事業は屢々（譬へば蟻の如く）何等その仕事を容易ならしむ可き特別な道具を持たず、その熟練と發明とに依つて是を補はなければならない様なものに依つて、なされるものであることを。

假に彼の技術家達があれ程小さいものでないとするならば、彼等の藝術品、彼等の事業に對して、吾々は如何なる考へを抱くであらうか？ 白蟻の都市を黒人の小屋に、蟻の地中の仕事を我がトウル人達のロワール河の小さな開鑿工事に比較する時、人は如何に昆蟲の優れた技術を目立たしめることであらう！ 然らば諸君の精神上の判断を變化せしめるものはその大きさであるか？ 諸君の評價に相應する爲には彼は如何なる脊丈を持つべきであらうか？

であらうか？

猶、假に此書が諸君の意見を變化させないとするも、此書は吾々の意見を非常に修正して來たものである。吾々の意見は此研究の進行中に重大な變化をしてゐる。吾々は物を研究すると信じた、そして吾々は魂を發見した。

日毎の親しい觀察は吾々をして彼等の生活に通曉せしめた、吾々の内に、我等の研究を刺戟し、がそれと同時に複雑ならしめた一つの感情を發達せしめた。彼等の人格、彼等の生活に對する尊敬である。

〔何？ 昆蟲の一生？ 蟻の生涯？ 自然は彼等を安價に造つてゐる、彼等を絶えず造り直してゐる、彼等を亂費し、彼等をして互に犠牲を拂はしめてゐる……〕

左様。然し自然は彼等を造つたのだ。自然は生命を附與し、視奪する。自然は彼等の運命の祕密を握つてゐる、進歩の順序の内に於ける報償の祕密を握つてゐる。我々と

雖も、何等彼等の上に行ふ可き力を持たないではないか、彼等を苦しめることより外には。

是は重大なことである。是は少年の感覺などではない。反對に、子供達も學者達もそれに注意もしないだらう。だが一人の人、自ら身を以て、我が行爲を考量し評價する習慣を持つ人は、一存在から、かゝる生命の賜を輕々に奪ひはしないだらう、ほんのつまらぬものに對してさへ、是を附與するなんといふ力は、かくて全く我々に許されてゐない様な此賜を。

此思想は吾々の内に力を得た。で初め、私より遙かに感じ易い、そして氣にかけ勝な或人が、此處フォンテエヌプロオへ此土地に關する小昆蟲學を打建てる計劃を持て來たが、其人は躊躇した、延期した、そして、良心の命するまゝに、是を斷念しなければならぬと信じた。絶對に避く可からざる學術上の蒐集は少しも禁示するの要はないが、死者を慰みものにしてはならないといふことは確かだ。昆蟲の多くのものは、その形態や、その色彩

よりもピンの先端にとめられないその様子、その運動こそ、遙かに遙かに重要なものであることを、知らねばならない。

私達の慙うした考へは、私達が一時的に験べてみようとして網に捕へた或非常に注目すべき蝶（私にして誤らずば天蛾である）の身の上に初めて起つた。私は何時間となく、それが花の上を行つたり、來たりするのに眺め入つた。多くの蝶の様に輕卒にひらひら飛び廻るのではなくて、高い處から花を選んで、次ぎに非常に細い、非常に長い吸收管を、遠くから投げつける様にして、ちゅちゅと吸ふかと思ふと、恰も鋼鐵の發條にはぢかれでもしたかの様に、すつと急に身を引くのであつた。ぢやれてゐる様な小食のその運動の比類なき優美さ、それはいつも慙う言ふかの様であつた、（最う澤山だ……今日は、もう……明日だ！）と。——私は是程可愛らしいものをまだ見たことがない。

是は灰色の蝶に過ぎない、人目を惹く何ものも持つてゐない。彼の死體を見るならば、彼が、その愛らしい敏捷さを持つた處の、そしてその優しさを盡く附與してゐる自然の寵

結

兒であるなどといふことを、誰が認めるであらう？

私達は網を開いた。そして、その數日後、私達は再び此同じ蝶を見るの喜びを持った、彼は、悪い天候を避けて、私達の家にその夜宿を求めに來た、そして部屋の内に休んだのだ。その翌朝、彼は日光を享樂せんと欲した、そして飛び去つた。

私は猶次のことを附言して置かずばなるまい、即ち、晩秋の氣候になやまされた者達は凡て、或非常に確かな、だが可成意外な本能に導かれて、自發的にやつて來たといふことである、その或者は一時的に、我々と一緒に住むのだといふ風に。或非常に弱り果てた、そして明らかに多くの事件に遭遇して來たに違いない若い鶯は、全くをどをどして到着した、そして、その日から人の手から食を取つた。又是よりも悲惨な動物に慚んなことさへあつた、それはまだ小さいじやうびたきだが、彼は是を良い鶯として賣らうとする残酷な人の手に依つてその冠毛を引抜かれてゐた。かくも人間から虐待されて、非常に恐怖を感じすべき筈の此動物が、何の迷ふ處もなく、その最初から人の手の内の穀物を食べたばかり

論

でなく、我が女主人の指の上のみに睡らうとした程であつたといふことである。

昆虫はと言へば、是を飼ひ馴らすといふことは不可能である。だが、多くのものは猶人間と共に生活することが、平和な人々や優しい性格を理解することが出来るもの、様である。去年の冬、二匹の赤い可愛い昆虫が、私の机の上の絶えず動される書類と書籍の中へその住居を選定した。で彼等に許してをくより仕方がなかつた。彼等はその冬中食を取らずに過ぎしてゐた、そしてそれで一向差支へないもの、様であつた。部屋の暖かさが彼等に適してゐたらしかつた。

そら今は九月の大風だ、此風が恰も昨日、私の家へ、非常に美しい茶褐色の毛蟲を吹き込んだ。彼は自分から來たのではない、我が意に反して押し寄せられたのである、とは言へ、私は此難破者を尊重すべきであると信じた。私は何處から彼が來たかを知らない、けれども、その様子に依つて、彼は今や我が衣を紡がんとする瞬間に吹き飛ばされたものであると推察した。で彼に様々な木の葉を提供した、處が何れも彼の氣に入らなかつた。彼

結

論

は往つたり來たり、明らかに異常な不安を示してゐた。是はきつと、木の枝に吊下がりのだ、と私は察した。けれども雨が瀧をなして降つてゐる。彼に取つて不都合である。多くの青蟲が地上に働いてゐる時、私は彼を地上に移した。けれどもさうでもなかつた。織物を織る時だから、彼は織物を好くだらうと、恚う考へて、窓を覆ふてゐたブウルレの布の上に載せた。此冷たくゴツゴツした布はてんから彼の氣に入らなかつた。それに風、隙間をもれる少しの風が冬中彼を慘酷にも凍らして了ふかも知れない。最後に女らしい直覺に依つて、彼が絹を造らうとしてゐる以上、我が顯微鏡の箱の覆ひとなつてゐる絹天鵲絨なら氣に入らだらう、と想像した。

明らかに、これが彼が選んでゐたに違ひないものであつた。夜此處に置かれて、その翌朝、彼は既に此非常に柔かい、非常に暖かい、非常にたよりとなる場所を採用してゐた。彼は既に紡いでゐた。もう早速、まるで邪魔の入るのを心配してゐるかの様に、躁急に、その絲を右に左に張つてゐた。そしてその日の内に、その仕事に精を出した彼は、その寸

法がよくなかつたことを、その莢が短か過ぎたことを知つた。彼はその三分の一をこわした、恰度い、寸法にその仕事を造りなほす爲に。

其處で、見て呉れ給へ、顯微鏡、解剖刀等我等の器具は除外されちまつたのである。私は何うしようか？ 此信頼しきつてゐる動物は、我等の爐邊に身を落着けた。そして歸りはしない。生命が科學を驅逐した。嚴格な研究よ、待て、一時期を延期せよ。我々は此冬は此蛹の睡眠を尊重することにしよう。

詩の昆蟲終

本會役員

會長	侯爵	大隈	信常
理事長		市島	謙吉
編輯長	法學博士	浮田	和民
編輯理事		宮島	新三郎
理事		大鳥居	弁三
同		並木	覺太郎
同		森脇	美樹
同		杉山	重義
監事		廣井	一

大正十四年四月十五日印刷
大正十四年四月二日發行

詩の昆蟲
毎月會費參圓

編輯兼 發行者 大日本文明協會

右代表者 市島 謙吉

東京市牛込區早稻田町卅四番地

印刷者 渡邊 八太郎

東京市牛込區榎町七番地

印刷所 日清印刷株式會社

東京市牛込區榎町七番地

不許
複製

東京市牛込區早稻田町三十四番地

發行所 大日本文明協會事務所

電話牛込三五四二番
振替東京二一八九〇番
振替大阪六八五二〇番

大正十一年度既刊々行書

(各册三四)

三重組織の國家

Dr. Rudolf Steiner:—Der Dreifache Staat—Die Wilkliche Betrachtung der Sozialfrage

社會遺傳

Benjamin Kidd:—Science of Power

海陸の神祕

Sir E. Lancaster:—Secrets of Earth and Sea

世界政治へまで

C. D. Burns:—International Politics & Political Ideas

國際社會史論

R. J. Lawrence:—The Society of Nations

體論

J. Tebb:—The Organization as a whole

◎本年度入會者は既刊々行書中希望の書を各册參照にて購讀することを得。

近代英國社會主義史

N. Beer:—A History of British Socialism

社會主義批判

William H. Mallock:—A Critical Examination of Socialism

應用優生學

Paul Popenoe:—Applied Eugenics

現代の都市計畫

Nelson P. Lewis:—The Planning of the Modern City

婦人解放と性の懷滅

Arabella Kenalty:—Feminism & Sex-Extinction

無限生活

R. W. Trine:—In Tune with the Infinite

大正十二年度既刊々行書

(各册三四)

東西文明の調和

英國ラフソン・スミス氏原著 武者金吉君譯

百歲不老

A. L. Smith:—How to be useful and Happy from Sixty to Ninety

性愛

佛蘭克林・マクニール氏原著 大戸徹誠君譯

平和なき歐羅巴

露國ニコライ・ニコラエヴィチ氏原著 赤司繁太郎君譯

今日の太平洋問題

N. Golovin:—The Problem of the Pacific in the Twentieth Century

科學と宗教

佛蘭克林・マクニール・ポーター氏原著 村山勇三君譯

◎本年度入會者は既刊々行書中希望の書を各册參照にて購讀することを得。

社會組織の解剖

G. G. Cavanah:—The Anatomy of Society

世界の終り

Joseph McCabe:—The End of the World

輿論

Walter Lippman:—Public Opinion

弛緩心理論

W. Patrick:—The Psychology of Relaxation

文明と保健

W. Hutcheson:—Civilization and Health

社會理想學

George G. H. Cole:—Social Theory

◎本年度入會者は既刊々行書中希望の書を各冊參照にて購讀することを得

大正十三年度既刊々行書 (各冊三圓) (全部三十圓)

英國エル・ドンカスター氏原著 宇田一博士譯
性の決定

L. Doncaster;—The Determination of Sex

英國エルネスト・バーカー氏原著 小島幸治君譯
近世政治思想史論

E. Barker;—Political Thought in England from Spencer to To-Day

大日本文明協會編纂 辻井眞君擔任

燃料問題の將來

米國エフ・マーヴィン氏原著 丸山岩吉君譯

F.S. Marvin;—Western Races and the World

世界文明の統一

米國エドウィン・コンクリン氏原著 寺尾新君譯

E. Conklin;—The Direction of Human Evolution

佛國ヴローア氏原著 鈴木貫一郎君譯

G. Valais;—L'Economie Nouvelle

新經濟學

英國イー・カーペンター氏原著 宮島新三郎君譯

吾が日吾が夢

E. Carpenter;—My Days and Dreams

露國イワノフ・ラズムニーク氏原著 三宅賢君譯

インテリゲンツェヤ

Интеллигентия

大日本文明協會編纂 武者金吉君擔任

近代科學の諸問題

大日本文明協會編纂

日米國際紀要

獨逸ビスマルク公遺著 定金右源二君譯

政局は斯して動く

F.O. von Bismarck;—Gedanken and Erinnerungen

米國イー・ハンチントン氏原著 武者金吉君譯

地球と太陽

E. Huntington;—The Earth and the Sun

終

